

## 半井桃水作品研究：初期新聞小説を中心に

金, 裕美

<https://hdl.handle.net/2324/4784379>

---

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

半井桃水作品研究―初期新聞小説を中心に―

九州大学比較社会文化学府

金 裕美

令和4年3月

目次

凡例

序章

1 論文の課題……………1

2 半井桃水及び桃水文学に関する研究……………6

3 各章の概要……………13

第一章 半井桃水をめぐって……………17

1 はじめに……………17

2 桃水の生い立ち……………18

3 投書家・新聞記者としての桃水……………23

4 経済的問題……………25

5 朝日新聞社と桃水……………26

6 おわりに……………36

第二章 「啞聾子」論——主人公の設定をめぐって……………39

1 はじめに……………39

2 主人公の設定……………42

3 桃水の役割……………49

4 おわりに……………54

第三章 「くされ縁」をめぐって……………56

1 はじめに……………56

2 第一部の「因縁」……………58

3 第二部の「因縁」と二部構成との関係……………62

4 おわりに……………65

第四章 「海王丸」論——素材と連載時期について……………	68
1 はじめに……………	68
2 明治期日本における海難事故・事件……………	72
3 ノルマントン号事件と「海王丸」……………	74
4 連載時期との関係性について……………	81
5 おわりに……………	87
第五章 「夢」論——二項対立をめぐって……………	89
1 はじめに……………	89
2 桃水の健康状態と執筆意図……………	91
3 「夢」における二項対立……………	95
4 おわりに……………	103
第六章 「胡砂吹く風」論——『朝鮮紀聞』『雞林医事』との比較を中心に……………	106
1 はじめに……………	106
2 『朝鮮紀聞』『雞林医事』について……………	109
3 「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』の比較……………	111
4 「胡砂吹く風」と半井桃水……………	115
5 おわりに……………	119
第七章 「胡砂吹く風」論——歴史的事実と小説的虚構のあいだ……………	120
1 はじめに……………	120
2 主人公林正元について……………	122
3 悪役鄭思錫について……………	127
4 桃水が描きだした歴史的事実とその結末……………	129
5 おわりに……………	133

参考文献	143
終章	134

## 凡例

- 半井桃水作品の引用は『東京朝日新聞 復刻版 明治編』（日本国書センター、一九九二年五月）による。紙面の劣化等により判読困難な場合などは、単行本と対照し引用した。なお、『東京朝日新聞』の記事はすべて『東京朝日新聞 復刻版 明治編』から引用した。
- 作品における不適切な表現、差別語については、極端な場合を除き修正していない。
- 原則として和暦を表記したが、各項目及び年号変更の時は、西暦も表記した。
- 資料を引用する際、ふりがなは必要と思われるもののみに付し、他は省略した。一部の人名・書籍名を除き、漢字の旧字体はなるべく新字体に改めた。
- 本文中の引用は「」で括った。また、本文中の注記は「○」（括弧書き）で記した。
- 新聞掲載の作品名は「」で表記した（ただし書名を指す場合は『』を用いた）。  
雑誌・新聞名は『』を用いた。
- 韓国の研究論文については以下のように整理した。  
原則としてそのまま表記したが、本文において引用する際、研究者名・論文タイトル及び研究内容は引用者が翻訳した。

## 序章

### 1 論文の課題

本研究の目的は、半井桃水なからいとうすい（一八六〇—一九二六）の新聞小説を対象とし、朝鮮との関係という論点や視点からのアプローチを除けば、従来の研究で看過されてきた桃水の小説の具体的内実について初期作品を中心に考察することにある。

一九〇七（明治四〇）年二月、夏目漱石が池辺三山に誘われて、朝日新聞社に入社し「虞美人草」「三四郎」「明暗」などを連載したことはよく知られている。「明暗」第一一六回を掲載する一九一六（大正五）年九月二六日『朝日新聞』には、「明暗」の左側の紙面に半井桃水の連載小説「義民嘉助」第一回が掲載されている。同作は、信濃国松本藩の貞享騒動（貞享三年・一六八六年）に取材し、騒動（一揆）を率い処刑された中萱村の庄屋・嘉助（多田加助）を主人公にした作品である。「義民嘉助」の連載は、「夏目漱石氏逝く——現代我が文壇の泰斗」「昨日午後七時胃潰瘍の為に文豪の最期」の見出しで漱石の訃を報じる一九一六年一月一〇日の紙面でも、「明暗」が一八八回で未完のまま中絶した一月一四日以降も続き、同年の年末となる一月三一日に九七回で完結している。この年の『朝日新聞』での「明暗」の連載と漱石の死による同作の中絶を知る人でも、「義民嘉助」について知る人は少ないのではないか。夏目漱石は日本の代表的作家の一人として周知であるが、半井桃水については「義民嘉助」のような作品名のみならず、作家としてもあまり知られていない。あるいは聞き覚えがあるという場合も樋口一葉との関係に絡む場合が多い。

父の事業の失敗と病没後の困窮の中で生計の途を求めていた樋口一葉が、小説『藪やぶの鶯うぐいす』（一八八八年六月、金港堂）の出版後、女流作家として活躍していた同門（萩やの舎や）の田邊たなべ龍子たつこ（田邊花圃、後に三宅花圃みやけかほ）に刺激され、小説を書こうと決意したことは知られている。生活を成り立たせるため、小説を書き始めた一葉は、妹の邦子の友人で桃水の妹（幸子）と築地女学校で同級であった野々宮菊子を介して桃水に会った。当時の桃水は『東京朝日新聞』に連載小説を発表し生計を立てていた職業小説家であった。一葉は、桃水に対し職業小説家として立つための指導と発表の場となる新聞雑誌への推薦を期待していた。

桃水と一葉が最初に面会した一八九一（明治二四）年四月十五日のことは、一葉の日記「若葉かけ」に記されている（以下の引用は『樋口一葉集（明治文学全集30）』筑摩書房一九七二年五月初版に拠る）。「野々宮きく子ぬしがかねて紹介の労を取たまはりたる半井う

しに初てまみえ参らする日」に「南佐久間町」の家を訪ねた一葉は、留守と知るが、桃水が「東京朝日新聞の記者として小説ニ雑報ニ常に君かあづかり給ふ」多忙な身なので、そういうこともあるだろうと待っていると、人力車が止まる音がする。「初見の挨拶」での自身の様子と桃水の「姿形」を記した後、一葉は桃水が「おもむろに当時の小説のさまなど」を話題にし、

「我思ふに叶ふへきは人好まず 人このまねは世にもて遊はれす 日本の読者の眼の幼ちなる 新聞の小説といわゝ有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様を事をつゝらされば世にうれさるをいかにせん我今著す幾多の小説いつも我心に屑しとしてかきたる物はあらさる也されば世の学者といわれ識者の名ある人々には批難攻撃面てを向ケかたけれといかにせん 我は名誉の為著作するにあらず 兄弟妹父母に衣食させんが故也 其父母弟妹の為に受くるや批難もとより辞せさるのみ もし時ありて我れわか心を持って小説をあらはすの日あらんか 甘んして其批難は受さる也」

と語ったことを記している。さらに「君が小説をかゝんといふ事訳野々宮君よりよく聞及ひ侍りぬ さこそはくるしくもおはすらめとしはしのほどにこそ忍び給ひね我れ師といはれん能はあらねと談合の相手にはいつにても成りなん 遠慮なく来給へ」と懇切に語ったとも記している。それを聞いた一葉は「限りなく嬉しきにもまつ涙こほれぬ」と記している。

一葉研究では周知の記事で、初めて対面した桃水の「姿形」の描写への言及が多く、一葉研究では「姿形」についての記述が引用されがちだが、桃水の側から日記の内容を読み直すと、「東京朝日新聞の記者として小説ニ雑報ニ」多忙であったこと、桃水が自身を新聞小説家として意識していたことが注目される。とくに、新聞小説について、読者との関係から「奸臣賊子の伝」や「奸婦いん女の事跡」などの要素も取り込まないと「世にうれさ(ざ)る」(引用内の丸括弧の濁音表記は引用者の注記、以下同じ)ため、自分でも不本意な気持ち(「いつも我心に屑しとしてかきたる物はあらさ(ざ)る也」)を持ちながら、「幾多の小説」を書いてきたこと、その一方で「世の学者といわれ識者の名ある人々には批難攻撃面てを向ケか(が)たけれと(ど)」というかたちではあるが、そうした「批難」を意識している点も注目される。この「批難」については、「名誉の為著作するにあらず(ず)」

とか、「もし時ありて我れわか(が)心を持って小説をあらはすの日」には「甘んじ(じ)て其批難は受さ(ぎ)る也」ともくり返し気にしている。一葉の日記が伝える桃水の発言からは、「奸臣賊子の伝」や「奸婦いん女の事跡」の要素の摂取と「世の学者といわれ識者の名ある人々」からの「批難」をともに意識しながら、そのせめぎ合いの中で「新聞の小説」を書いていた桃水像が浮かび上がる。

この日の日記の結びには、一葉がしたためておいた「小説の草稿一回分を預け、「君か著作の小説四五冊を借参らせ」、桃水の好意により人力車で夜の八時に帰宅したとの記事がある。その「四五冊」が具体的に何だったのか、この日以降の記事を見ても記載はない。しかし、一八九一(明治二四)年四月一五日という日付を考えるなら、その「四五冊」に、本論が対象とする桃水の初期新聞小説が含まれていた可能性は小さくないように思われる。桃水が『東京朝日新聞』に掲載した最初の小説『啞聾子』が駿々堂から発行されるのは一八九九年一月で、『海王丸』も一八九九年一月に今古堂から出版されているからである。『夢』(一八九一年八月、金桜堂)や『胡砂吹く風』前編(一八九二年一二月、今古堂)、同後編(一八九三年二月、今古堂)は該当しないが、「四五冊」に近接する。なお、『胡砂吹く風』前編には、本文「はしかき」が始まる直前の頁に一葉が序として歌を寄せている。「桃水うしがものし給ひし　こさ吹く風をみ参らせて　かくは　朝日さすわが敷島の山ざくら　あはれかばかりさかせてしかな　一葉」という序である。日記中の「四五冊」以降も、桃水が自身の小説を一葉に読ませていた痕跡となるだろう。

一葉が日記に記した「新聞の小説」についての桃水の感想が、そのまま直接的に作品に反映するわけではなく、「東京朝日新聞の記者として小説」を執筆するときに「眼の幼ちなる」「日本の読者」の期待と「世の学者といわれ識者の名ある人々」の「批難」とを常に意識していたわけではないにしても、桃水が一葉に語った感想や作者としての葛藤が、日記中の「四五冊」を含む初期作品と無縁であったとも考えにくい。一葉が紹介した桃水の発言は、この時期の桃水が直面していた「新聞の小説」の問題を示唆しており、本論の対象である桃水の初期新聞小説と時期的に重なる点でも注目しておきたい。

一葉の死後、桃水も『中央公論』に「一葉女史」<sup>1</sup>という文章をのせ、この初対面のことを回想している。二人の出会い後、一葉のデビュー作「闇桜」が桃水の『武蔵野』<sup>2</sup>に発表されたのは、一八九二年三月である。

一葉の恋慕の対象として知られている半井桃水は、明治から大正にかけて、朝日新聞社に勤務しながら、記者・小説家として活躍している。

桃水に対する日本文学界の評価は、一葉が残した文章により判断される場合が多いため、一葉の方に偏る評価が多いといえる。桃水は一葉の小説を世に出すきっかけの役割は果たしたものの、一葉文学に及ぼした影響はないという否定的な見解に終わっている。

例えば、中村光夫は「(略)一葉が師事したのは半井桃水という新聞小説家で、彼との間柄はやがて恋愛に発展し、彼女はそのため苦しみ、交渉を絶つにいたしました」<sup>3</sup>と述べている。また「小品作文風の初期の断片に小説の形式と骨法とを考え、一応小説の体をなさしめたが、それは旧式な文学構図と修辞法とを与えただけで、一葉の本質に沿ってその構図を展開させようとするものではなかった」<sup>4</sup>という評価もある。さらに「桃水については、一葉のおびただしい「日記」が、かなり詳細に物語っているが、彼から受けた文学的影響は、さほど大きなものがあつたとは考えられない。しかし、一葉が作家として出発するためにはぜひ必要な人物であつたのであり、事実、桃水は一葉のために種々の便宜をはからつた」<sup>5</sup>などの評価もある。いずれも桃水と一葉の恋愛感情が伴う師弟関係という具体的な人間関係は認めながらも、文学的影響という点では本質的なものではないという見解になっている。

このような指摘は、日本文学史での桃水の位置を端的に表している。文学史に関する記述や評論では、樋口一葉が師事し、その間柄がやがて恋慕の対象になったということが強調されるのみである。桃水の存在は、一葉の師であり、一葉の小説に見られる「結ばれざる恋」の背景にある伝記的な素材として注目されがちである。日本近代文学研究において桃水は、長らく、樋口一葉研究に付随する要素としてのみ取り扱われてきた。言いかえれば、近年の日韓比較文学研究の動向が生じる以前には、塚田満江の研究(後掲)などの例

1 半井桃水「一葉女史」『中央公論』二二(六)(二一九)(中央公論社、一九〇七年六月)

2 『武蔵野』は半井桃水と彼の門下生を中心に、創刊した今古堂刊の雑誌である。

3 中村光夫『明治文学史』(筑摩書房、一九六三年一月)、一〇七一―一五頁

4 塩田良平『樋口一葉研究』(中央公論社、一九五六年一〇月)、三八八―三九一頁

5 坂本俊夫『樋口一葉研究』(教育出版センター、一九七六年八月)、一一頁

外はあるものの、小説家としての半井桃水は独立した研究対象として取り扱われてこなかったといえる。

半井桃水は、明治一〇年代に朝日新聞社の特派員として韓国の釜山駐在を長く勤め、多くの朝鮮関係の記事を書き、明治二〇年代から大正八年に朝日新聞社を退社するまで、多数の新聞小説を発表し続けた作家である。新聞連載後に単行本として出版された作品も多い。人気が高まった時期には、『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』両紙に、ほぼ同時に小説を連載したこともあるほどの作家である。例えば、一九〇一から一九〇二年のあいだ、両紙に連載した桃水の作品は次のとおりである。

『東京朝日新聞』(一九〇一年)「遺物の軸」(三月二〇日―五月二五日)「むきみ屋御殿」(八月二六日―十一月六日)「男禁制」(十二月二〇日―翌年二月二八日) (一九〇二年)「写絵」(五月七日―七月一七日)「萩の下露」(九月六日―十一月三日)  
『大阪朝日新聞』(一九〇一年)「咲わけ」(一月一日―三月一八日)「小猿」(五月二五日―八月一三日)「雪と炭」(八月一四日―十一月三日)「ごぼれ梅」(十二月一六日―翌年三月九日) (一九〇二年)「花の鈴」(三月一〇日―六月一〇日)「狂咲」(七月八日―十月六日)「玉柳」(十二月九日―翌年三月二二日)。

半井桃水は坪内逍遙、二葉亭四迷、樋口一葉、森鷗外、夏目漱石らと同時代に生き、作風は異なるものの、彼らと同時代に活躍した。これらの作家たちは、研究者から評価され、現代でも多くの読者に恵まれ、海外でも翻訳され刊行されている。それに対して桃水の場合はそうではない。桃水に関する研究論文や研究書は、きわめて少ない。また、文学史の記述において、桃水の位置づけはきわめて慎ましやかなもので、せいぜい樋口一葉の恋慕の対象としてその名を挙げられる程度にすぎない。時代の推移の中で桃水の作品は読まれなくなってしまいが、その当時においては人気作家の一人であった。その人気を支えた理由や背景を知るためには、何よりも作品そのものの分析及び作品とメディアの関係の考察が不可欠である。この課題に対し、本論文は、桃水の初期新聞小説を中心に検討することで桃水の文学を再評価するための具体的なモデルを提示したい。

## 2 半井桃水及び桃水文学に関する研究

半井桃水に関する研究の嚆矢は『近代文学研究叢書 第二五』<sup>7</sup>である。本叢書は、近代の作家や学者・思想家などの生涯・業績・遺族遺跡の探訪記と、網羅主義を基本とする著作年表・資料年表から構成されている。近代の著名人に限らず、高い功績を収めながらも評価が後世に続かなかった人物にも光をあてていることが大きな特色で、三九四名を没年順に収録している。その一人として桃水も採用され、桃水研究の前提になる基礎的情報が整理紹介されている。

基礎的な研究書には上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日韓関係』<sup>8</sup>がある。本研究書は、桃水の朝鮮関連の記事を中心に明治期の朝鮮観を究明している。「桃水の朝鮮報道記事は、朝日新聞社の「報道本位」の立場、当時の「大新聞」がとっていた政治的な結論を主張することに力点をおかず、事実をまずありのままに記す事を第一義にするという姿勢が次第に読者の支持を得た」<sup>9</sup>と指摘している。その上で桃水と桃水の新聞記事を一個の「時代を映す鏡」として想定し、明治の朝鮮に対する認識を確認している。

以上の二冊は、基礎的な情報と基礎的な研究として様々な示唆を与える。

上垣外以前に桃水を独立した研究対象として位置付けた成果が、塚田満江『半井桃水研究 全』<sup>10</sup>である。同書は、「半井桃水の人と文学」・「半井桃水作品研究」・「復刻・解題」・「半井桃水補遺」・「半井桃水の周辺——比較風土・比較文化資料として——」の五部から成り、それぞれの項目に応じた論考や資料を収める。小池正胤は「著者の立場と方法のきわめて个性的である」ことを指摘し、「従来かなりに偏った取り上げ方や評価のされ方を続けられて来た半井桃水は本書によって一葉の桃水から桃水自身へようやくその姿勢を回復した。その意味で本書はまさに画期的であると言えよう」<sup>11</sup>と評している。また芦谷信和は「一葉の恋人であり、一葉に影響を与えた、二流、三流の通俗的新聞小説家と見られ纏まった研究としては、塩田良平博士の『樋口一葉研究』や昭和女子大学発行の『近代文学研究叢書』第二五巻で取り上げられたにすぎない対象を、初めて独立した研究

<sup>7</sup> 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第二五』（昭和女子大学、一九六六年）

<sup>8</sup> 上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日韓関係』（筑摩書房、一九九六年一月）

<sup>9</sup> 上垣外憲一、前掲書、三頁

<sup>10</sup> 塚田満江『半井桃水研究 全』（丸ノ内出版、一九八六年五月）

<sup>11</sup> 小池正胤「塚田満江著『半井桃水研究 全』」『国語と国文学』 六五（九）（至文堂、一九八八年九月）、七〇―七五頁

対象として採り上げ、韓国文化や風土の投影を検証しながら追究した最初の研究成果である<sup>12</sup>と評価している。両者の書評が指摘するように、塚田の研究書は小説家・半井桃水を独立した研究対象として初めて取り扱ったという意義をもつ。だが、その研究方法や論説の展開は個性的である。「桃水は新聞小説欄の開拓の先頭に立つ人であり、そこに偏見、誤解、曲解を受けやすいところがあった」<sup>13</sup>と指摘し、この「偏見と誤解」を正すことが、本書の目的であった。しかし、論の展開は筆者の連想によつて発展してゆく場合が多い。また韓国の「新羅花郎道」が桃水の精神と行動を支配し、桃水の文学はこの「花郎道」実践と主題としたものであると言及している部分（四〇―四二頁）は筆者の韓国文化に対する理解が不十分な状態で論を展開している。特に、当書第四部「半井桃水補遺」と第五部「半井桃水の周辺——比較風土・比較文化資料として——」は半井桃水論というよりも、エッセイに近い展開を見せているので、より実証的で客観的な検討と考察が待たれる。そのほか比較的まとまったものとしては二〇〇五（平成一七）年四月から二〇〇七年八月まで『朝日総研レポートAIR21』に連載された草薙聡志「半井桃水 小説記者の時代」がある。半井桃水の朝日新聞社在職時代を軸として当時の朝日新聞社を考察している連載記事である。

個別の作品研究では、「鶏林情話 春香伝」<sup>14</sup>と「胡砂吹く風」<sup>15</sup>に作品研究が集中している<sup>16</sup>。桃水は朝鮮に滞在中、二〇回にわたって「鶏林情話 春香伝」を『朝日新聞』に連載した。同作は韓国古典小説『春香伝』が原作の翻訳作品である。実は、韓国文学史においては、桃水の名前は『春香伝』を世界で初めて翻訳した作家としてその名があげられる。「鶏林情話 春香伝」の原作が『春香伝』であることから、原テキスト問題の検討が

<sup>12</sup> 芦谷信和「塚田満江著『半井桃水研究 全』」『論究日本文学』五〇号（立命館大学、一九八七年五月）、八〇―八六頁

<sup>13</sup> 塚田満江、前掲書、八頁

<sup>14</sup> 「鶏林情話 春香伝」（『大阪朝日新聞』、一八八二年六月二五日―七月二三日）

<sup>15</sup> 「胡砂吹く風」（『東京朝日新聞』、一八九一年十月二日―一八九二年四月八日）

<sup>16</sup> 日本文学界においては一葉を理解するための対象に止まっている半井桃水が、韓国文学界および比較文学界においては韓国の古典を世界で初めて翻案した作家として研究されてきたのは大変興味深い。少なくとも、半井桃水は独立した存在としてその存在は表している。しかしながら、桃水が注目される理由は、韓国の古典との関連性があるというのみに集中している。

研究の中心になってきた。西岡健治<sup>17</sup>、キム・シンジュン<sup>18</sup>などにより、「鶏林情話 春香伝」の原テキストは「京坂三〇張本」が最も酷似していると推測されている。

韓国古典『春香伝』の研究の側でも「鶏林情話 春香伝」は取り上げられている。日本における『春香伝』の受容研究が行われ、日本の作品の一つとして「鶏林情話 春香伝」が検討された。鄭美京『日本における韓国古典小説の受容』<sup>19</sup>、鄭大成『春香伝』日本語翻案テキスト（一八八二—一九四五）系統的研究<sup>20</sup>、イ・ウンス「日本における「春香伝」受容の展開様相…第一期（一八八二—一九二四）中心に」<sup>21</sup>などが挙げられる。

そのほか、『春香伝』と「鶏林情話 春香伝」を比較し、翻訳の過程における改変に関する研究がある。西岡健治「日本における『春香伝』翻訳の初期様相——半井桃水訳『鶏林情話 春香伝』を対象として——」<sup>22</sup>は、「鶏林情話 春香伝」の翻訳において、「削除」と「縮小」の操作が行われていたことを明らかにした。ユ・ウンギョン「半井桃水の『鶏林情話 春香伝』を通じてみた朝鮮認識」<sup>23</sup>では桃水の朝鮮認識について論じている。

次に「胡砂吹く風」の研究では、桃水が「胡砂吹く風」を通して朝鮮文化を紹介していること、紹介された朝鮮文化を一連の基準において整理していること、そして「胡砂吹く風」における朝鮮の描写は桃水の朝鮮に対する認識であることが指摘されている。桃水の

<sup>17</sup> 西岡健治「桃水野史訳『春香伝』の原テキストについて」『大谷森繁博士還暦記念朝鮮文学論叢』（杉山書店、一九九二年二月）

<sup>18</sup> 김진중·김용의·신해진「나카라이 도스이（半井桃水）역『鶏林情話春香伝』연구」

『日本語文学』第一七（韓国日本語学会、二〇〇三年六月）

<sup>19</sup> 鄭美京『日本における韓国古典小説の受容』（花書院、二〇一二年三月）

<sup>20</sup> 鄭大成「『春香伝』日本語翻案テキスト（一八八二—一九四五）系統的研究」『日本学報』第四三（韓国日本学会、一九九九年一月）

<sup>21</sup> 이은수·윤석임·박태규「일본에서의「春香伝」의 수용연구」『日本語文化』第一九集（韓国日本語文化学会、二〇一一年九月）、「일본에서의「春香伝」수용의 전개양상」…제 1기（一八八二—一九二四）중심으로」『日本語文化』第二二集（韓国日本語文化学会、二〇一二年九月）

<sup>22</sup> 西岡健治「日本における『春香伝』翻訳の初期様相——半井桃水訳『鶏林情話 春香伝』を対象として——」『福岡県立大学人間社会学部紀要』第一三巻第一号（福岡大学、二〇〇五年三月）

<sup>23</sup> 유은경「나카라이 도스이의『계림정화 춘향전』을 통해서 본 조선인식」『고산의

인간학』第三集（全州大学校韓国古典学研究所、二〇二〇年二月）

意図を踏まえながら、鄭美京は「新聞小説『胡砂吹く風』に描かれた朝鮮」<sup>24</sup>において作品の執筆動機、朝日新聞の朝鮮認識や当時の朝日新聞の読者層などについて論じている。

「胡砂吹く風」に朝鮮の紹介書的な側面があることに注目した研究には権美敬「風俗資料としての小説——『胡砂吹く風』、『小説東学党』での『付記す』の問題——」<sup>25</sup>、趙惠淑「明治時代朝鮮文化の紹介様相——半井桃水『胡砂吹く風』について——」<sup>26</sup>などが挙げられる。

権美敬『明治文学に描かれた朝鮮・明治二〇年代の「朝鮮関連小説」を中心に』<sup>27</sup>は、明治二〇年代の朝鮮関連小説を取り上げ、当時の日本文学者たちが朝鮮をどう描いているのかを考察した。具体的作品の一つとして桃水の「胡砂吹く風」・「続胡砂吹く風」を取り上げている。権美敬は、同書第一部の一章「『胡砂吹く風』における『春香伝』と『九雲夢』」で、『胡砂吹く風』における『春香伝』と『九雲夢』の受容過程を検討し、韓国古典文学が『胡砂吹く風』の中でどのように変容したのかを明らかにしている。また朝鮮の近代化が日本化であることを読者に示唆している点も指摘した。同書第二部「ジェンダーで見た朝鮮」では、「胡砂吹く風」における〈女性〉に注目し、「朝鮮が〈女〉としてメタファー化され、そこには様々な意味が含蓄されていることを表象している」と指摘したうえで、男性である日本と〈女〉である朝鮮における、ジェンダーと国家、民族の間に関わるヘゲモニーの関係に言及している。

劉銀炅は「半井桃水「胡砂吹く風」再考——初期小説の変化から——」<sup>28</sup>で「胡砂吹く風」を「続き物」から出発した新聞小説の特性を色濃くもつテキストとして分析した。その過程で桃水の初期新聞小説について簡単に触れているが、具体的な分析は行われていない。

<sup>24</sup> 鄭美京「新聞小説『胡砂吹く風』に描かれた朝鮮」『韓国言語文化研究』第一一号（九州大学韓国言語文化剣友会、二〇〇五年十二月）

<sup>25</sup> 権美敬「風俗資料としての小説——『胡砂吹く風』、『小説東学党』での『付記す』の問題——」『日本語文学』第三二号（日本語文学会、二〇〇六年二月）

<sup>26</sup> 조혜숙「메이지 (明治) 시대 조선문화의 소개양상——나카라이도스이 (半井桃水) 『胡砂吹く風』에 대해서——」『日本思想』第一六号（韓国日本思想史学会、二〇〇九年六月）

<sup>27</sup> 権美敬「明治文学に描かれた朝鮮——明治二十年代の「朝鮮関連小説」を中心に」、金沢大学博士論文（甲第2003号）、学位授与二〇〇二年三月

<sup>28</sup> 劉銀炅「半井桃水「胡砂吹く風」再考——初期小説の変化から——」『中央大学国文』五七二〇一四年三月

以上見てきたように、桃水や桃水作品の研究には少なくとも二つの特徴がある。ひとつは、桃水についての研究は、朝鮮との関係を除いて萌芽期の段階にとどまっていること。もうひとつは、桃水の文学作品の研究も「鷄林情話 春香伝」や「胡砂吹く風」という朝鮮との関係が深い作品に偏っていることである。それには、桃水の履歴が朝鮮と深く関係し、その履歴と密接に関係する「鷄林情話 春香伝」が朝鮮の古典『春香伝』を世界で初めて翻訳した小説として評価され、桃水の代表作「胡砂吹く風」も主要な舞台が朝鮮であることなど、いくつかの理由や背景が考えられる。そうした理由や背景は、桃水の文学研究において、朝鮮と関連した作品や朝鮮との関係を焦点化することになった。

桃水は、朝日新聞社が本格的に新聞小説に力を入れた時期から新聞小説を執筆し、小説の発表メディアとして、月刊誌や週刊誌が主流となる以前、新聞が主要な舞台であった新聞小説の時代を生きた作家であるが、先に述べた二作品を除くと、桃水の新聞小説に関する研究論文や研究書は、きわめて少ない。桃水の新聞小説の研究が少ないのは、桃水の場合も例外でないように、それが一過性の消費の性格が濃い大衆向けの作品として受容され、桃水自身も大衆文学作家の一人というかたちでしか評価されなかったからであろう。桃水の同時代作家として挙げた坪内逍遙、二葉亭四迷、樋口一葉、森鷗外、夏目漱石などは、いずれも研究の蓄積も多い作家である。日本の近代文学研究は、文学思潮を革新した作家や思想性や芸術性が評価される作家を中心に展開してきた。先に引用した一葉の日記「若葉かけ」の表現を借りると「世の学者といわれ識者の名ある人々」の文学を中心に研究がされてきたのである。明治期の新聞小説は、夏目漱石の場合のように、日本近代文学史に名が残る代表的作家による著名な作品は、むしろ例外的であり、その多くは、桃水の場合のように、作家研究も少なく、作品研究も皆無であるような大衆向けの作品の方が、圧倒的に多い。漱石としても、最初は家庭小説の「虞美人草」<sup>くびじんそう</sup>を連載したのであり、二葉亭四迷も「其面影」<sup>そのおもかげ</sup>という大衆向けの小説を連載している。家庭小説を代表する菊池幽芳は、一九〇三年『大阪毎日新聞』に「乳姉妹」(八月二四日―二月二六日)を連載して好評を博している。さらには新派劇に組まれたのち、大阪で一代片岡仁左衛門、東京では五代目中村歌右衛門が房江に扮して歌舞伎でも上演された<sup>29</sup>。また、一三回も映画化されるほ

<sup>29</sup> 鬼頭七美『「家庭小説」と読者たち―ジャンル形成・メディア・ジェンダー』(翰林書房、二〇一三年三月)、一九三―二一二頁、小谷野敦『忘れられたベストセラー作家』(イースト・プレス、二〇一八年三月)、三二頁

ど大衆向けの作品である。菊池幽芳は、その平易な文体と通俗的な物語内容によって多くの読者を獲得するが、桃水の場合のように、作家や彼の作品研究は少ない。

新聞は産業化、近代化の象徴の一つで、日本でも西洋型の新聞はかなり早い時期から発行されている。初期の新聞は、外国人、あるいは、政府が発行し、海外のニュースを掲載したものだ。日本国内記事を書いた最初の新聞は一八六八年に、最初の日刊新聞はその三年後に発刊されている。その後、明治初期の新聞は大新聞と小新聞に分かれて発展していく<sup>30</sup>。一八七二年になって『東京日日新聞』を始め三大新聞が東京に現れた。二月二日創刊の『東京日日新聞』、三月一日創刊の「日新真事誌」、六月発行の「郵便報知新聞」がそれである<sup>31</sup>。三大新聞と『東京横浜毎日新聞』や『東京曙新聞』などを、大新聞と総称し、それに対して、『読売新聞』・『仮名読新聞』・『平仮名絵入新聞』などを小新聞と呼んできた。大新聞は政治経済など固い記事だけの新聞で、新しく結成された様々な政党の機関紙の性格が強い。一方、小新聞は読み物や演藝記事などが載る新聞のことで、江戸時代からの大衆的伝統文化をうけつぐものであった。

新聞の様相について本田康雄の「江戸文芸から新聞小説へ——文明開化の深層——(一)」(『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』第五号、一九九六年三月)を引いてみよう。

新聞はニュースを知るための報道の印刷物であると同時に読み物でもあった。有益な教養を得るための、また閑暇つぶしの娯楽の読み物である。江戸時代の木版本、例へば、草双紙が普通は年一回正月の刊行であることを思うと、毎日入手することの出来る新聞は明治の市民にとって驚異的、魅力的な読み物であり、文明開化の生活必需品であった

<sup>320</sup>

つまり、明治期の新聞は読者にニュースの提供と同時に読み物としての娯楽も提供したのである。

<sup>30</sup> この区分は一八六〇年代パリにおける「レ・グラン・ジュルナル」、<sup>31</sup> 「レ・プティ・ジュルナル」の区別を反映したものであるが、同時に日本の歴史的事情に由来するものでもあった。(グレアムロー、森田典正「世界の新聞小説の歴史をめぐって」『文学』第四卷第一号(岩波書店、二〇〇三年一月・二月)、四一―四二頁、山田俊治『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』(日本放送出版協会、二〇〇二年一〇月)、三三―三五頁)

<sup>31</sup> 大西林五郎『日本新聞発展史 明治・大正編』(樽書房、一九九五年三月)、四五頁

<sup>32</sup> 本田康雄の「江戸文芸から新聞小説へ——文明開化の深層——(一)」(『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』第四号、一九九六年三月)、一八七頁

一八七七年、最後の内戦である西南戦争が終結すると、新聞メディアは紙幅を埋める必要と読者を惹きつけるための新たな商品開発の必要に迫られた。その結果、雑報を物語的に長編化したいわゆる続き物（新聞小説）が掲載されるにいたったのである。そののちは続々と、小説が紙面を飾り、新聞小説の単行本が出版される状況となる。多くの新聞において、次第に小説は主力商品になり、新聞メディアは自らの存続と繁栄のために、多くの読者を魅了する小説を載せなければならぬ<sup>33</sup>。

ふたたび一葉の日記「若葉かけ」の表現を借りると「新聞の小説といわゞ有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様の事をつゝらされば世にうれさるをいかにせん」という発言は、明治期の新聞小説の一般的性格に通じている。それゆえ「世の学者といわれ識者の名ある人々には批難攻撃面を向ケかたけれといかにせん」という後ろめたさを作家自身が抱え込んでいる。桃水の作品に限らず、明治期の新聞小説の大半は、「世の学者といわれ識者の名ある人々には批難攻撃」される文学である。文学研究を担うのが「世の学者」といわれ識者の名ある人々であるとするれば、桃水が語ったような明治期の「新聞の小説」が、研究の対象になってこなかったのは当然である。そのような「新聞の小説」に改めて注目する理由は、まさにその点にある。桃水は「世の学者といわれ識者の名ある人々には批難攻撃面を向ケかたけれといかにせん」という意識を持つ一方で、「有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様の事をつゝらされば世にうれさるをいかにせん」という商品性も十分に意識していた。そのせめぎ合いの所産である桃水の「新聞の小説」を具体的に検討することは、これまでの「世の学者といわれ識者の名ある人々」が見てこなかった問題を検討するということであり、それは発掘しつくされていない一つの時代（明治期）の文学の全体像に近づくことになる<sup>34</sup>と考える。

大衆的な新聞小説家であった桃水は、その活動の時期が明治中期から大正期にかけてであるだけに、新聞小説家のイメージが、幕末維新期の戯作家という作家像から、漱石に代表されるような近代的な作家像へと変化していく歴史的文学史の変遷を問う上でも格好の対象である。

<sup>33</sup> 松原真「小説隆盛と新聞メディア―明治二〇年前後の新聞小説について」『人文・自然研究』第一三号（一橋大学全学共通教育センター、二〇一九年三月）、一九四―一九五頁

桃水の新聞小説を通して明治期における新聞小説の変容を究明するのは今後の課題としても、その前提となる第一歩として、まずは桃水が一葉に語ったという「新聞の小説」の問題を実作に即して具体的に検討し分析する作業は不可欠である<sup>34</sup>。

上記の理由から、本論文では先行研究を踏まえながら、桃水が「新聞の小説」を書くことの苦勞を語りながら実作していた時期、具体的には一八八九年から一八九二年にかけて『東京朝日新聞』に発表した初期新聞小説を対象に作品の具体的な検討と読解を試みる。

### 3 各章の概要

本論文は七章構成となっている。その概要は、以下の通りである。

第一章では、第二章以下の作品分析に先立ち、作者半井桃水の伝記事項とその問題点を確認する。主要な資料としては『上野理一伝』、『近代文学研究叢書 第二五』を参照した。

日本最初の日刊新聞は一八七〇（明治三）年創刊の『横浜毎日新聞』とされる<sup>35</sup>。その後、次々と新聞の創刊が続くが、知識人向けの言論や報道が中心の大新聞と、世間の話題や事件や娯樂にかかる記事を中心とする小新聞に分かれる。大新聞と小新聞がそれぞれに試行錯誤しながら発展していた明治中期、具体的には一八八八（明治二一）年、桃水は朝鮮での生活を終えて東京に戻ってくる。一八七五年の上京後に入学した尺振八の共立学舎に在学中、『東京日日新聞』や『読売新聞』などの投書家となった桃水は、その後新聞関係の仕事に従事するようになり、一八八一年には朝日新聞社の海外特派員として朝鮮に滞在していた。帰京後の桃水は、『東京朝日新聞』という舞台を得て、新聞小説家として新たな一歩を踏み出すことになる。

<sup>34</sup> 明治期の新聞小説については、すでにいくつかの蓄積がある。平井徳志『新聞小説の研究』（朝日新聞社、一九五〇年）、玉井乾介「新聞小説史」（『文学』第二二巻第六号、一九五四年六月）、柳田泉『明治初期の文学思想』（春秋社、一九六五年）、興津要「へつづきもの」の研究（『明治開化期文学の研究』（桜楓社、一九六八年）、高木健夫『新聞小説史 明治編』（国書刊行会、一九七四年）、本田康雄『新聞小説の誕生』（平凡社、一九九八年）などがある。

<sup>35</sup> 『横浜毎日新聞』は、一八七〇年二月八日、横浜で発行された日本最初の日刊新聞である。世界や日本国内の動静、物価などを載せるなど、新興の貿易地である横浜のニーズに応じたものであった。『横浜毎日新聞』の体裁は、版型を洋紙一枚刷にしたものである。この洋紙一枚刷の方法は同紙が始めたものであるが、次第に新聞の主流となり、やがて新聞は新聞紙と呼ばれるようになった。それに、鉛活字を最初に採用したのもこの『横浜毎日新聞』である。（稲田雅洋

『自由民権の文化史』（筑摩書房、二〇〇〇年四月）を参照）

本章では、半井桃水が新聞小説家になった経緯について、『東京朝日新聞』創刊時の背景や桃水の経済的事情の面から検討する。『東京朝日新聞』創刊時に主筆に抜擢されたのは、桃水とは旧知の小宮山天香であった。創刊時の『東京朝日新聞』の方向性や主筆となった天香と桃水の関係から桃水の新聞小説に要請された要素について考察する。さらに、桃水の個人的な事情として経済面についても考察する。当時の桃水は、すでに一家の大黒柱として何としても生計を立てなければいけない立場にあった。新聞記者には一定の給料はあるが、新聞に小説を書けば原稿料と連載作品の単行本化で収入が増える。以上、当時の朝日新聞社の状況と桃水の個人的事情の両面から新聞小説家になった経緯と背景を考察する。

第二章では、「啞聾子」を取り上げる。「啞聾子」は桃水が東京朝日新聞社に入社後、初めて『東京朝日新聞』に連載した作品で、周囲から「啞聾子」と見なされていた岸辺捨吉が、実は「啞聾子」を装っていたことを告白し、そのような嘘をついた理由や経緯を描いている。新聞記者として記事を「書く能力」はあったとしても、新聞小説を連載で執筆することは別の次元の問題である。桃水は、朝鮮滞在中に『鶏林情話 春香伝』を『大阪朝日新聞』に寄稿していたが、同作は『春香伝』という原作がある翻訳作品である。原作の翻訳に近い執筆であれば、あらかじめ小説の展開を把握することが可能である。また、連載回数にしたがって、一回分の分量や内容の調整も容易になる。「啞聾子」にも原作や下敷きがある可能性はあるが、『鶏林情話 春香伝』のような翻訳作品と比べるなら、やはり創作の度合いは強いと考えられる。その意味では、桃水の新聞小説家としての能力が問われた作品といえる。

作品の分析としては「話せない」「聞こえない」障害者を偽る主人公という設定に注目し、「啞聾子」と偽った目的とその経緯を検討する。捨吉を障害者として設定したことと関係して小説では様々な出来事が展開する。そのような設定に親の復讐と妹の捜索という捨吉の目的がどう関わるのかという作品の構造も問題にする。「啞聾子」は新聞の広告から物語が始まり、現実の人物である半井桃水をその会見へ取材に行かせ、岸辺捨吉の話を聞くという構成になっている。「啞聾子」において桃水本人が作品内に登場する場面は三か所ある。こうした場面の機能や効果にも注目する。

第三章では、「くされ縁」を取り上げる。「くされ縁」は二部構成で、代々にわたる悪縁を描く物語である。第一部では、清吉と芸者琴治の恋と悪縁が語られ、第二部では、盛一とお薦の結ばれない恋と因縁が語られる。分析の手がかりを「くされ縁」の縁起に求め、

その内容を確認した上で、第一部と第二部の因縁の関係性を中心に考察する。また男女関係を中心とした「くされ縁」の展開にも注目する。さらに二部構成を連載回数から検討する。前作「啞聾子」の連載回数三一回に対し「くされ縁」は五三回で倍増に近い。二作目で急に連載回数が増えるのは、それなりの負担があったと思われる。それが二部構成とどう関係するのか、新聞社側の変化も視野に入れながら論じる。

第四章では、「海王丸」を取り上げる。「海王丸」は、世界無比の汽船・海王丸の沈没によって多くの人々や会社が莫大な損害を受ける出来事を描き、多額の保険金を支払うことになった保険会社が次々と倒産するなか、唯一の生存者となった清作が海王丸沈没の原因を調べ、そこに潜む陰謀を暴き出す物語である。「海王丸」において、船の沈没は最も重要な要素の一つである。その下敷きになった出来事を明らかにしたうえで、連載時期との関係性を検討する。明治期日本の海難事故・事件のなかで最も世間を騒がしたのは、一八八六年のノルマントン号事件である。ノルマントン号事件をめぐる新聞報道に基づいて、同事件が当時の社会全般に大きな影響を与えたことを確認する。「海王丸」とノルマントン号事件を比較分析することで、はじめて浮かび上がる共通点と相違点を確認し、「海王丸」の新聞小説としての性格を考察する。

第五章では、「夢」を取り上げる。幼い頃ポーランド国王である父の命令で、山奥の洞窟に閉じ込められ野生動物のような生き方をしてきた王子が、人間性を失ったまま王宮に戻り、夢を利用して人間としての自覚を取り戻し、その後無事に王位継承を果たす物語である。こうした異国を舞台にした作品ながら、当時の桃水が健康状態の悪化で入院し、その経験が作品の執筆や内容とも関係することを指摘した上で作品を読解する。

主人公で野生児のジギスムンドが、どのように人間社会への復帰を果たすのが物語の要点であり、その方法として夢がうまく利用されている。それまでの桃水小説には典型的設定がいくつか存在するが、「夢」には既存の桃水小説にみられない特徴がいくつかある。作品の背景が日本ではなく、ヨーロッパに位置するポーランドであること、登場人物の名前が西洋式であること。そして連載期間が一月に及ばず、一回の分量も比較的短いことなどである。そうした特色を確認しつつ、「夢」は表面的には〈現実〉と〈夢〉、〈動物〉と〈人間〉という対立関係が成り立つことを考察する。その上で文明開化の日本を描き、一八九〇（明治二三）の憲法発布と国会開設とも関係する時事性の高い作品であることを論じる。

第六章及び第七章では、「胡砂吹く風」を取り上げる。「胡砂吹く風」は主人公林正元が親の復讐を果たし、朝鮮の様々な問題を解決して後に朝鮮の最高顧問になる物語である。

『東京朝日新聞』連載時は毎回挿絵とともに掲載され、朝鮮の地理や風俗などが小説内で言及されている。時には読者の理解を図るために「付（附）記す」の形で、本文内で言及された朝鮮の慣習を説明している。

第六章では、「胡砂吹く風」の「はしかき」末部で『朝鮮紀聞』と『鶏林医事』に言及していることに注目し、「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』及び『鶏林医事』の比較について論じる。従来の研究は「胡砂吹く風」が小説によって朝鮮事情の紹介をしていると捉える論が多く、「胡砂吹く風」を朝鮮事情の紹介書として評価してきた。「はしかき」での『朝鮮紀聞』と『鶏林医事』への言及から、『朝鮮紀聞』と『鶏林医事』を参考にしたのは間違いない。桃水が『朝鮮紀聞』と『鶏林医事』を参考に「胡砂吹く風」を執筆していた点を踏まえ、『朝鮮紀聞』と『鶏林医事』の記述と「胡砂吹く風」における朝鮮に関する描写や説明との比較対照から文学作品の分析として何が見えてくるのか、影響や受容の様相から考察する。

第七章では、「胡砂吹く風」について登場人物の設定から論じる。「胡砂吹く風」は、多様な読みが可能な作品である。そのひとつとして、登場人物の設定に「同時代」の状況の反映を見る読み方が可能である。先行研究を踏まえながら、主人公の林正元と悪役の鄭思錫について考察する。

以上が本論文の構成と概要である。本研究の意義は、従来の半井桃水研究では看過されてきた作品研究、特に作家活動を始めた初期の新聞連載小説を対象にして具体的な読解と考察を提示する点にある。それを通じて新聞小説作家としての桃水の作家像に関して新たな一面を提示する。時代の進行に伴い、新聞紙は画一化されていく。新聞小説が画一化されていく新聞紙において差異をつくりえる要素の一つだとすると、桃水の作品はその役割を果たしている。新聞に連載される小説を、読者は毎日のように楽しみにし、その物語に一喜一憂し、読み続いてく。広い範囲にわたる読者のニーズに答えた作品を連載したからでこそ、新聞小説家としての桃水の寿命は長く続いたといえる。

## 第一章 半井桃水をめぐって

### 1 はじめに

幕末の日本の国境に位置する離島対馬に生まれた人が、どのような経緯で当時の新しいメディアである新聞界で活躍するようになったのか。本章はその問いから始めたい。

半井桃水は、初期には投書家として、やがて記者や小説家として活躍したが、新聞小説家として活動した期間が最も長い。本章では、桃水が新聞小説家になった経緯について、家庭環境や経済的な問題を中心に述べることにする。

半井桃水の幼名は泉太郎、後に冽（きよし）と名乗り、桃水痴士や菊阿弥<sup>あみ</sup>などの別号もある。半井桃水の伝記事実を記すものとしては、上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日韓関係』の指摘にあるように『上野理一伝』<sup>36</sup>の記述が最も詳しい。上野理一（一八四八—一九一九）は、大阪の地で小新聞の新聞社として始まった創業（一八七九年）間もない朝日新聞社に入社し、一八八一年には、創業者（木村家）から、村山龍平（一八五〇—一九三三）とともに経営権を譲られ、今日の朝日新聞社の基礎を築いた人物である。なお、上野とともに朝日新聞社の社主となった村山は、その後も上野とともに朝日新聞社の社主として同社を大きく成長させていく。その伝記は、明治期から大正期にかけての朝日新聞に関係する人物や出来事を知る上での基礎的な情報を提供する。ただし『上野理一伝』には記述の根拠となる資料の明示がないので、桃水の記述についても根拠資料に当たっての確認や追跡は现阶段では難しい。塚田満江『半井桃水研究全』（丸ノ内出版、一九八六年五月）は、『上野理一伝』と対照しても事実関係の記述に錯誤があり、やはり資料の明示がないので伝記事項についての検討が必要である<sup>37</sup>。そのほか樋口一葉の日記や一葉の伝記研究も桃水の生活を知る有益な資料となる。本章では、上記の諸資料に加え、先に述べたように桃水の伝記に関する基本的情報を収録した『近代文学研究叢書 第二五』を参照しつつ桃水の生い立ちや家庭環境を簡潔に紹介し『東京朝日新聞』に新聞小説を書くようになった経緯を確認する。

<sup>36</sup> 朝日新聞社編修室『上野理一伝』（朝日新聞社、一九五九年十二月）

<sup>37</sup> 上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日韓関係』（筑摩書房、一九九六年一月）、二七三頁。ただし、桃水に関する記述は、樋口一葉の日記を含めた他の資料と対照してみると、おおむね正確といえる。

## 2 桃水の生い立ち

半井桃水は、半井湛四郎たんしろうの長男として一八六〇（万延元）年一月二日、対馬の厳原いずはらに生れ、厳原の天道茂町という屋敷町で育つ。父の半井湛四郎は一八三二（天保三）年に武士の家柄であった竜田左仲の三男として生まれ、半井文中の養子となり、文中の二女藤と結婚していた<sup>38</sup>。半井家は対馬の宗家に代々仕えた典医の家である。湛四郎は朝鮮の釜山にある倭館<sup>39</sup>勤務のため、対馬と釜山を往来していた。泉太郎こと少年の桃水も一八七二（明治五）年、釜山の父のもとに赴き給仕として働き始める。

『上野理一伝』によると、父の湛四郎は好人物で、義理固いところがあつたが、子供の躰についてやかましい武家にあつても特に厳しい方であつたらしい。その父が漢籍、医書の外は禁じて読ませなかつたので、桃水は父が寝しずまるのを待ち、行燈に覆いをかけて小説や雑書の類を耽読したという<sup>40</sup>。

桃水は倭館内の空気の重苦しさや父の躰の厳しさに家出まで考えたが、やがて父も新しい学問の必要を認め、釜山と東京を往復していた自分の友人に桃水を託し上京させた。桃水の東京は、一八七五年、一六歳の春で本所相生町にあつた尺振八の共立学舎（一八七〇年創設）に入学する<sup>41</sup>。一八七七年、桃水は共立学舎を出て三菱会社に入ったが、間もなく退職する<sup>42</sup>。

<sup>38</sup> 高瑞和彦「一葉と桃水（二）」『久留米大学論叢』第三一卷第二号（久留米大学法学部、一九八二年一月）には桃水の戸籍の複写が収録されている。

<sup>39</sup> 倭館は、朝鮮との外交および通商ために設置された施設で、徳川時代には対馬藩が担当していたが、維新後、明治政府は対馬の対朝鮮外交を外務省に移す。また、対馬藩が従来独占的に行ってきた朝鮮貿易も他の商人に開放する。その結果、対馬藩の経済困難のため倭館の経費も削減される。その穴を埋めるため、対馬藩では対馬の上士の子弟を学業という名義で倭館へ連れてきて給仕として働かせた。

<sup>40</sup> 前掲、『上野理一伝』一九九頁

<sup>41</sup> 共立学舎を開いた尺振八は中兵万次郎やアメリカ人ロムシー・ロベルトなどに会話を学んだ人で、「会話は尺先生」という評判の高い塾主であつた（前掲『上野理一伝』、二〇〇頁）。当時江戸で名のある洋学塾は、塾生三〇〇を超える福沢諭吉の三田の慶応義塾が筆頭であり、鳴門二郎吉、箕作秋坪、石振八の三つの塾が門弟一〇〇人台、福地源一郎の塾が八、九〇人だつたという（前掲『上野理一伝』二〇〇頁）。

<sup>42</sup> 前掲『上野理一伝』二〇二頁。当時三菱は戦争景気で飛ぶ鳥も落とすような勢いであつたが、桃水の眼から見れば、人使いが荒いばかりで、殺風景な拝金者の奇合いとし映らなかつたのが退職の理由である。

その後、桃水は叡山<sup>43</sup>でしばらく僧坊の生活を送り、一時は出家得度も考えたが、所持の金も使い果たし、坊主の生活を送るにもお金が必要であることが分かって山を下りた。一八七八年、桃水は、比叡山に近い京都の新聞社『西京新聞』に入社し、論説・雑報担当の記者となる。一八八〇年、かつての『仮名読新聞』の記者で、当時、創業間もない大阪の『魁新聞』に移っていた胡蝶園若菜（一八五五―一九一八）から招かれ、大阪魁新聞社に移る。同社には、胡蝶園若菜のように記者で小説も書いた小宮山天香（一八五八―一九三〇）や同じく宇田川文海（一八四八―一九三〇）がいた。この二人の社友は、桃水が『東京朝日新聞』の記者兼小説家として活動する背景として注目される。

小宮山天香については『明治政治小説集(一)・明治文学全集6』（筑摩書房、一九六七年八月）の柳田泉「解題」（『聯島大王』の作者小宮山天香）を参照する。それによれば、天香は「明治十三年八月、津田貞が大阪に魁新聞を起したとき、津田に懇望されて、その記者となった」が、「魁新聞がつぶれてから畿内申法（後の此花新聞）や『日本立憲新聞』、「絵入朝野新聞」、「浪華新聞」などで記者兼小説家として活躍し、明治二十一年、大阪朝日」が「多年の希望であった東京進出の目的を達し、東京朝日新聞を出すことになった」とき、「社主村山龍平は、この新出発の東京朝日を主宰させる編輯の総務は天香の外ない」と見てとって、主筆としての入社をもとめた」、「天香は喜んでこれに応じ主筆の任についた。こうして天香の東京朝日新聞在社は、明治二十七、八年、日清戦争のころに及び、東京朝日をして、立派に今日のように大新聞とのびさせる土台を築いたのであった」とある。なお、文中にある村山龍平は、先にも簡単に言及したが、朝日新聞の創業時に、上野理一とともに経営権を譲られ、その後も朝日新聞社の社主として、上野とともに同社を大きく成長させていった人物である。

宇田川文海については『明治開化期文学集(二)・明治文学全集2』（筑摩書房、一九六七年六月）の興津要「略歴」（「宇田川文海」）を参照する。それによれば、文海も神戸の「港新聞」や「大阪の代表的小新聞」であった「浪花新聞」さらに「大阪日報」「大阪新報」「魁新聞」を経て、「大阪朝日新聞」に入社したが、二十三年には同社を退き、二十六年に「大阪毎日」に入社し、以後十年間健筆をふるった」とある。

つまり、天香も文海も、『魁新聞』を経て朝日新聞社の記者兼小説家として活躍した人物である。具体的な資料による確認や証明は今後の課題となるが、『魁新聞』時代の天香や文

<sup>43</sup> 比叡山。京都市と滋賀県大津市との境にある山。

海との交流は、桃水が大阪朝日新聞社の海外通信員となり、さらには「大阪朝日」が「多年の希望であった東京進出の目的を達し、東京朝日新聞を出すことになった」直後に東京に呼び戻される背景として注目される。とくに東京朝日新聞社社主の村山に懇望されて主筆となった天香の在社期間は、そのまま桃水が『東京朝日新聞』の記者兼小説家として活動し始める期間と重なっており、天香と桃水の関係は桃水研究の重要な課題となる。

『魁新聞』は読者の評判は良かったが、大阪では小新聞の競合と淘汰の時代であり、『魁新聞』も経営困難から二三〇号を以て一八八一年八月に廃刊した。職を失った桃水を見かねた胡蝶園若菜は、当時の勤務先であった大阪朝日新聞社の上野理一に桃水の事で相談をもちかけた。桃水が朝鮮語に通じていることを知っていた胡蝶園若菜は、上野を説得し桃水を渡韓させることを提案したという<sup>44</sup>。当時二二歳の桃水は、一八八一年五月下旬、大阪朝日新聞社通信員として朝鮮に渡るが、同年八月の亀浦事件に関わったとして逮捕され、八月二六日に保釈され、対馬の厳原署に護送される。翌一八八二年、ふたたび大阪朝日新聞社の特派員として朝鮮に渡り、『春香伝』の翻訳小説「鶏林情話 春香伝」を『大阪朝日新聞』に二〇回連載する。

一八八三年、釜山で同じ対馬厳原藩出身の成瀬もと子と結婚したが、もと子の肺病が原因で一年後に死別する。

一八八八年、通信員としての最初の朝鮮滞在から数えれば七年間の朝鮮生活を終えた桃水は、日本に戻る。上京した桃水は、大阪朝日新聞社から東京朝日新聞社に移り、小説家としての活動が本格的に始まる。郷里より弟の浩、茂太、妹の幸を引き取り、芝南佐久間町の「恵智十」という寄席の裏に一家を構える。ここには福井県敦賀の写真屋の娘・鶴田たみ子（幸の同級生）、二人の弟子も同居し女中も置いていた。

一八九二年三月、桃水は東京本郷西片町に移り、同月二五日発行で主宰者として同人誌『武蔵野』<sup>45</sup>を創刊する。発行所は、桃水の単行本を出していた今古堂である。桃水は、同年五月には神田三崎町に移り、「松濤軒」という葉茶屋を開くものの、すぐに店を閉じる結果となり、飯田町四丁目二一番に移った。

<sup>44</sup> 前掲『上野理一伝』、一九五―一九六頁

<sup>45</sup> 『武蔵野』は第三号で廃刊となる。

一九〇四年、朝日新聞社の従軍記者として乃木希典が率いた第三軍<sup>46</sup>に従軍する。日露戦争から帰った桃水は、一九〇七年に、元対馬藩の大浦繁太郎の長女・若枝を後妻に迎えた。その後、一九一一年に長女松子が誕生するが、松子は一九二三（大正一二）年に死亡した。一九一二年一〇月、東京牛込区若宮町三七番地に移る。桃水は日露戦争の頃から長唄の作詞に興味を持ち、「鳥羽の恋塚」をはじめとし、二〇編近くを作詞したという。妻の若枝は歌沢寅右衛門の門下で寅千代と言ひ、後に小唄に転じて、春日豊千代と名のつた。半井桃水が朝日新聞社を退職したのは、一九一九年八月末日だった。入社してから一年余、年齢も五九歳に近づいていた。晩年は脳溢血気味で、福井の鶴田写真館に身を寄せて静養していたが、一九二六（大正一〇）年一月二一日、脳溢血が原因で福井県敦賀市の病院で死去した。六六歳の誕生日を目前にした死であった。

『東京朝日新聞』（一九二六年一月二五日、夕刊）は、桃水の訃を次のように報じている。

大衆文芸家として知られている元本社員半井桃水氏は予て敦賀に赴き大作に従事して居たところ十一月二十二日同地で逝去、遺骨は二十四日午前十一時二十分東京駅着牛込区若宮町三二の自宅へいり二十七日午前十一時より正午までの間に告別式を執行するはずである。同氏は日本音楽界に功労あり吉住小三郎氏等と長唄研精会を創立し舞踊界にも知られている、行年七十六<sup>47</sup>

しかし、この記事には誤りがあり、その訂正を兼ねて翌二五日の『東京朝日新聞』朝刊には、桃水の写真を付した追悼記事が載せられている。

（略）今年春頃から風気味<sup>マキ</sup>であったのを過労のためこじらせ日蓮の事跡探りかたがた静養に敦賀の親戚に行き遂にここを死地としたのである。遺族は唯若栄夫人だけのさびしさであるが、神戸の某宮司の息で故人の徳を慕い特にこうて同家の嗣子となり、現に

<sup>46</sup> 日露戦争において編成され、戦後に解散した軍隊。

<sup>47</sup> 『東京朝日新聞』（夕刊）一九二六年一月二五日（発行日二四日）

シカゴ大学特待生である豊三氏（二八）が近く帰朝するはずである。葬儀は大阪長唄協会の都合で三十日午前十時から十二時まで牛込片町養昌寺で挙行するはず<sup>48</sup>

さらに二六日の『東京朝日新聞』朝刊には桃水の死亡広告が載せられている。

半井桃水洌儀予而病気の処養生不相叶越前敦賀病院に於て本日二一日午後死去り候間此段謹而御通知申上候

追而来る三十日午前十時より十二時迄本郷区片町養昌寺（市電吉祥寺前下車）に於て告別式相當可申候

十二月二五日

妻 若枝

（在米ミシガン大学）豊三

親戚総代 竜田 浩

浦野文彦

河村菊江

友人総代 武田 尚<sup>49</sup>

草薙聡志も指摘しているが、最初の記事に誤りがあり、『東京朝日新聞』には、その訂正を兼ねた一連の訃報関連記事がある。しかし、それらにも夫人の名前や養昌寺の住所などに間違いがある<sup>50</sup>。葬儀翌日の『東京朝日新聞』（二月一日朝刊）には、「半井桃水洌告別式の際は遠路御焼香被下難有御礼申上候 十一月三十日 妻 若枝 親戚一同」という参列御礼が掲載されている。

桃水の戒名は、観世院謠光列洌音居士<sup>51</sup>。墓は東京文京区駒込二丁目二〇―一七の養昌寺（曹洞宗）内の「半井家代々の墓」に合葬されている。

<sup>48</sup> 『東京朝日新聞』（朝刊）一九二六年一月二五日

<sup>49</sup> 『東京朝日新聞』（朝刊）一九二六年一月二六日

<sup>50</sup> 草薙聡志「半井桃水 小説記者の時代（29）大家になって下さるな」『朝日総研リポートAIR 21』二〇七号（朝日新聞社総合研究本部、二〇〇七年八月）、一三七頁

<sup>51</sup> 岩井寛『作家の臨場・墓碑事典』（東京党出版、一九九七年六月）、二四七頁

### 3 投書家・新聞記者としての桃水

桃水と新聞業界との関係はいつ始まったのか。それは、桃水が尺振八の共立学舎に在学していた時期と考えられる。『上野理一伝』によれば、桃水は新聞への投書に際して、先生である尺振八の許しを得て『東京日日新聞』に投書<sup>52</sup>し採用されたという。しかし、『東京日日新聞』の投書欄には、半井泉太郎（桃水の幼名）や半井痴史、あるいは半井桃水の名義での投書は見あたらない。その理由について上垣外憲一は次のように指摘している。

『上野理一伝』は何らかの伝聞によってこれを記したと考えられるが、その伝聞が誤りでないならば、桃水は仮名を用いて投書したと考えて良い。『上野理一伝』によると、桃水はまだ塾生の身分であったので、投書するについて共立学舎<sup>53</sup>の尺先生<sup>54</sup>の許可を得て投書したという。学生の身分で投書にはばかりがあつたとすれば、仮名を用いる事は自然である<sup>54</sup>。

それではどの投書が半井桃水のものであろうか。上垣外憲一は、『東京日日新聞』の投書欄から、まず住所を東京以外とするものは除外した。さらに一八七五（明治八）年九月から、翌一八七六年までの『東京日日新聞』の征韓論や非征韓論に関する投書の中で、筆者の名が仮名と推測され、対馬の人でなければ知り得ないような江戸時代以前の朝鮮との外交史に言及している一八七五年一月十九日付、「東京麹町平川町 桂馨」名義の投書が、桃水の投書である可能性がある<sup>55</sup>と推測した。投書家として知られるようになった桃水は、

<sup>52</sup> 『東京日日新聞』に投書という言葉が初めて現われるのは、一八七二年四月二十八日の紙面である。「育幼社より投書」という見出しで、学校の寄付についての報告だった。半年後に紙面改革に行い連日掲載の常設欄となった。草創期の新聞は、取材網も貧弱で記事を確保することが容易でなく、これを補足したのが読者からの投書だった。旅行記や見聞、随想めいたもの以外に、投書の内容も次第に幅広くなり社会性のある論評などがふえてくる。（中島善範『新聞投書論―草創期の新聞と読者』（晩声社、一九九一年一月）、二七―二八頁）

<sup>53</sup> 尺振八（せきしんぱち）が本所相生町に開いた英語塾。尺振八は英会話をミッチリおさめた人で「会話は尺先生」という評判の高い塾主であった。（前掲『上野理一伝』、二〇〇頁）

<sup>54</sup> 上垣外憲一、前掲書、二〇―二二頁。

<sup>55</sup> 上垣外憲一、前掲書、二〇―二二頁。

『東京日日新聞』ばかりではなく、『平仮名絵入新聞』や『読売新聞』にも投書するようになった。しかし半井桃水という筆名で始めから投書していたかどうかは定かではない<sup>56</sup>。以上は在京時の投書であるが、東京を離れた後も、新聞との関係は続く。京都の『西京新聞』は、桃水を投書家として厚遇し、一九七八年に桃水は『西京新聞』の記者として第一歩を踏み出す。

『西京新聞』は桃水を寄書家として最も待遇してくれた新聞であって、不意にたずねると「ちようどよいところであった、編集者が手不足で困っていたから、今日からでも手伝ってくれ」というわけで無造作に入社がきまった。明治一年のことであった。『西京新聞』の編集はそれまでまったく無人状態だったので、桃水は論文も雑報もほとんど一人で引き受けて書きまくり、時には探訪も代理さえもつとめた<sup>57</sup>。

一八八〇年の夏、桃水は大阪の胡蝶園若菜から一通の手紙を貰う。桃水的能力を見込んだ胡蝶園からの仕事の誘いの手紙であった。投書家仲間であった胡蝶園は、桃水の先輩格で新聞社主催の投書家の会合などで顔見知りになっていた。『上野理一伝』によると、胡蝶園の手紙の内容は、津田貞が大阪朝日新聞社に反旗をひるがえして、新しい開化時代の精神を盛り込んだ中新聞を作るようになったいきさつや、自分が雑報主任格で西下した次第をのべ、津田主筆は桃水のような新時代の教養を持つ記者を期待しているというものであった。津田貞の名は、先に紹介した『明治政治小説集(一)・明治文学全集6』(筑摩書房、一九六七年八月)の柳田泉「解題」(『聯島大王』の作者小宮山天香)にも見えており、小宮山天香についても「明治十三年八月、津田貞が大阪に『魁新聞』を起したとき、津田に懇望されて、その記者となった」と記され、『上野理一伝』の記述と考え合わせれば、創業直後の『魁新聞』が、相応に有能な記者の人材を求めており、胡蝶園や桃水や天香や文海など投書家として知られていた人物に声がかけられたことが想像される。津田貞(一八四五―一八八二)は、土佐藩の出身で、自身でも『大阪新報』主筆として「秋廻錦芸妓真心」などの新聞小説にも手を染め、一八七九年、大阪の木村平八・騰の父子が小新聞を創業した際に編集主任として乞われ、『朝日新聞』の名付け親にもなった人物である。しかし、経

<sup>56</sup> 上垣外憲一、前掲書、二〇一―二〇二頁

<sup>57</sup> 前掲『上野理一伝』、二〇二頁

営重視の創業家と大新聞の方向を目指す津田の間に軋轢が生じ、津田は朝日新聞から社員を引き抜くかたちで『魁新聞』を創業する。そうした津田の意を受けて集められた投書家の一人が胡蝶園である。胡蝶園が桃水に送った手紙は、寄稿のことや将来の企画なども相談したので一度来阪してほしいという意味のものであったらしいが、その内容も創業時の津田と『魁新聞』の意向をうかがわせる。その手紙をうけ『魁新聞』の本社を訪れた桃水は、津田貞と面会し、『魁新聞』に移る。一時は人気も出た『魁新聞』が、小新聞淘汰の時代にあつて廃刊に追い込まれることは、すでに言及した。

#### 4 経済的問題

新聞の廃刊は、以後給料を得られないという状況を意味する。桃水はこの経済的困難を乗り越えるために、新たな道を模索する。ところが、桃水が経済面で苦悩していたのは、『魁新聞』の廃刊時に始まったことではない。

そのころ東京の新聞の寄書家として少し名前が出てくると、地方の新聞から「どうか我社へも御奇稿を……」と依頼してくることもあった。地方新聞の寄書は定期的に東京通信をのせたり、続き物を書いたりするようになれば、大ていの社で月末、盆暮などにちよつとした報酬を出す。これが、その頃父の商法の失敗で、極貧の底にあえていた桃水にとつては大きな魅力ともなった<sup>58</sup>。

「父の商法の失敗で、極貧の底にあえていた」桃水には、投書による報酬は大変貴重であつたに違いない。『西京新聞』に入社した時期は、『西京新聞』の経営がまだ安定していたので、桃水は、生れてはじめて少し金銭的に余裕がある生活ができた。だが、その期間は長くはなかった。『西京新聞』から『魁新聞』に移つたものの、『魁新聞』の経営状態は悪化し給料を得られない日が続くことになる。

桃水は、経営状況が悪化した『魁新聞』の給料の支払いが数か月間も滞つたため、釜山に渡つて自活の道を模索しようとする<sup>59</sup>。

<sup>58</sup> 前掲、『上野理一伝』、二〇二頁

<sup>59</sup> 朝日新聞百年史編『朝日新聞社史 明治編』（朝日新聞社、一九九〇年七月）、五五頁

こうしてみると、桃水にとって幼年期、青年期は経済的に困難な時期が多かったといえる。この経済的な困難は、桃水が海外特派員の生活を終えて帰国した後も続いた。帰国後に『東京朝日新聞』で小説を書き始めたとき、桃水は、すでに一家の大黒柱であった。

私が樋口夏子さんと相識したのは、慥か明治二十三年頃であったと思います、当時私は二人の弟と一人の妹と、外に二人の書生と下女と都合七人の家族を成して、芝南佐久間町の貸家に住んで居りました<sup>60</sup>。

桃水と一葉が最初にあつた一八九一（明治二四）年四月一五日のことは、一葉の日記「若葉かげ」に詳しく、すでに先に紹介している。桃水にも初対面のことを追憶した「一葉女史」（『中央公論』）があることは先にも述べたが、具体的には右の引用の通りで、郷里にいた弟の浩、茂太、妹の幸を引き取って、芝南佐久間町の「恵智十」という寄席の裏に住んでいたことも確認される。ここには福井県敦賀の写真屋の娘・鶴田たみ子（幸の同級生）、二人の弟子も同居、女中も置いていた。ただ、桃水は、初めての面会を「明治二十三年頃」と述べているが、時期としては一八九一（明治二四）年が正しい。ともあれ、「都合七人の家族」を抱える桃水にとって、経済的な問題は、常についてまわることになる。それは小説を書き続けなければならない条件でもある。

## 5 朝日新聞社と桃水

日本における最初の日刊新聞『横浜毎日新聞』が一八七二（明治四）年に創刊されて以降、新聞の創刊が続き、自由民権運動の時代になると、『郵便報知新聞』『朝野新聞』『東京日日新聞』など知識人向けの論説や報道に比重を置いた大新聞と『読売新聞』『東京絵入新聞』『仮名読新聞』など巷説や娯楽色の強い記事に比重を置いた小新聞に分かれる<sup>61</sup>。

<sup>60</sup> 半井桃水、前掲、「一葉女史」、三六頁

<sup>61</sup> 日本型新聞について研究したものに、山本武利『新聞と民衆 日本型新聞の形成過程』（紀伊国屋書店、一九九四年一月）、中島善範『新聞投書論―草創期の新聞と読者』（晩声社、一九九一年一二月）、大西林五郎『日本新聞発展史 明治・大正編』（樽書房、一九九五年三月）、山田俊治『大衆新聞がつくる明治の（日本）』（日本放送出版協会、二〇〇二年一〇月）、土屋礼子『大衆紙の源流―明治期小新聞の研究』（世界思想社、二〇〇二年一二月）、柳澤伸司『新聞教育の原点―幕末・明治から占領期日本のジャーナリズムと教育』（世界思想社、二〇〇九年三月）などがある。

当時の新聞の様相について野崎左文の回想文「昔の新聞談」(『明星』第五号、一九〇五年五月)<sup>62</sup>を引いてみよう。

新聞小説の事を書くのに先だつて、日刊の新聞が大小の名称を以つて区別された事を云つて置く必要がある。(略)さて是等の新聞を区別して大新聞小新聞と呼んだのは、紙幅の大小に基づいたのは勿論であるが、猶大新聞の主とする所は国家の政治に在つて、専ら政府を反省せしむると共に一方国民を覚醒せしめんといふ主義から筆を執るのであるから、毎号必ず社説を掲げて時事問題を論議し、(略)小新聞は之に反して政治には殆ど無頓着といふ風で論文などは掲げず——中には社説の代りに茶説と云つたやうな滑稽文を載せる新聞もあつたが——専ら世上の出来事を報ずるのを以て務めとし(略)<sup>63</sup>

野崎の説明は、小新聞と大新聞との違いや性格を要領よく示している。最初の本格的な新聞史研究とみなされている小野秀雄の『日本発達史』には、大新聞と小新聞の比較として、一八七七(明治一〇)年を前提に比較表を掲げた。この比較表によると、大新聞の文体は漢文口調が多く、記者は洋学者、漢文者、政治論者が多かった。また、政治、経済、海外、時事問題を重視し、その読者も中流以上の紳士が多いと言及している。小新聞は口語体で記者は国文学者、戯作者、狂言師などが多かった。花街の評判、演芸、面白い読み物を重視し、その読者も中流以下の者、婦人、芸人が多かった<sup>64</sup>。

大新聞に娯楽活動がなかったのにたいし、小新聞には言論活動がみられなかった。政界、言論界の動静を茶化したり、風刺したりすることはたまにあつたし、大新聞の筆禍事件を雑報としてのせることもあつたが、正面きつた正論をかくことは、皆無であつた。それでも小新聞が筆禍をうけることがあつたが、その多くは、官吏の艶種を暴露することによる讒謗律違反であつた。小新聞の記者は「某説の真偽は吹けば飛ばうな我灰小新聞の記者が保証するに非ず」(『仮名読新聞』一八七七年一月一九日)とみずからを卑下し、大新聞

<sup>62</sup> この回想録は、のちに「明治初期の新聞小説」と題して一九二七年発行の『私が見た明治文壇』の中に収録されている。

<sup>63</sup> 引用は、野崎佐文「明治初期の新聞小説」(『私が見た明治文壇』日本図書センター、一九八二年一月)二一六頁に拠る。

<sup>64</sup> 小野秀雄『日本新聞発達史』(大阪朝日新聞社、一九二二年)、一〇八一—一〇頁

記者に強い劣等感をいだいていた<sup>65</sup>。

明治期の大新聞と小新聞は、それぞれの特色を売り物にしながら、また、相互に影響しながら消長する。そうした消長の一環として、自由民権運動の退潮による大新聞の停滞の一方で、小新聞は読者の興味関心を掬い取るべく、紙面改革として、情報の正確さや迅速さや情報量の増加、平易な論説の掲載、人気のあった「続き物」や挿絵の一層の充実などを打ち出していく。そうした小新聞に抗して大新聞も、紙面改革に踏み切る<sup>66</sup>。

新聞業界が試行錯誤しながら競合する情勢の中で、『大阪朝日新聞』も、一八八六年五月、東京に支局を開く。しかし、当初は業績も振るわず部数が伸びなかった。様々な要因があるが、そのひとつに輸送の問題があった<sup>67</sup>。当時、大阪から東京への新聞の輸送には、かなりの時間を要した。一八八七年に入ると、しだいに固定読者がつき、販売部数も安定してきたが、東京を拠点とする新聞との競争を続けるには、輸送の問題を解決する必要があった。大阪からの輸送では、東京の読者に届くまで時間がかかり、東京各紙よりニュースの速報性に劣る。それでは東京の読者を満足させることは不十分であり、また固定読者がついたとはいえども、一日の発売数が五〇〇前後では、地元の東京各紙に太刀打ちできるはずもなかった。この状態を打破するためには、東京で新聞を印刷し発行するのが望ましいと判断した村山龍平と上野理一は、『東京朝日新聞』の創刊を企図する。一八八八年七月、明治初期の代言人（弁護士）として知られ、自由党（一八八一—一八八四）で政治活動をしていた星亨（一八五〇—一九〇二）が、発行していた『めさまし新聞』（一八八七年四月一日—一八八八年七月八日）の発行継続が困難になる。同紙は、星が自由民権思想を啓蒙するため、自由党系の小新聞として一八八四年に創刊した『自由燈』の改題紙『燈新聞』（一八八六年創刊）を、さらに改題し発行していた新聞であるが、星自身の保安条例

<sup>65</sup> 山本武利『新聞と民衆—日本型新聞の形成過程』（紀伊国屋書店、一九九四年一月）、三五—三六頁

<sup>66</sup> 大貫俊彦「新聞読者に拓かれた人情世態小説…坪内逍遙「此処やかしこ」試論」『言語社』：Gensha』111号（一橋大学大学院言語社会研究科、二〇一九年三月）、八七頁

<sup>67</sup> 東海道本線はこの時まで全通しておらず、新聞を送るためにはかなりの時間が必要だった。

『朝日新聞紙史 明治編』によると、大阪本社ではすこしでも早く東京へ輸送するために、あらゆる角度から輸送補法が検討された。その結果、陸路で四日市港まで新聞を運び、ここから船便で横浜へ送る案が採用された。この方法で新聞を送ると、東京に到着するのは発行日の翌日の夕刻になる。つまり、東京の読者は大阪の読者より一日おくられて新聞を入手することになる。（前掲『朝日新聞紙史 明治編』一四八頁）

違反による入獄（一八八八年七月）で発行の継続が困難になっていた。朝日新聞社は、渡りに舟とばかりにこれを買収し、『東京朝日新聞』として創刊した<sup>68</sup>。朝鮮での特派員生活を終えた桃水が、本社勤務の記者となるのは『東京朝日新聞』創刊の直後である。

『東京朝日新聞』の創刊で、『めざまし新聞』からの脱皮と紙面改革を図った朝日新聞社では、先に紹介したように社主の村山龍平が「この新出発の東京朝日を主宰させる編輯の総務は天香の外ないと見てとって、主筆としての入社をもとめ」（柳田泉「解題」）、『魁新聞』時代に桃水の記者仲間であった小宮山天香が「主筆」となる。小宮山が「東京朝日を主宰させる編輯の総務」である「主筆」に就任した直後、桃水も朝鮮から呼び戻されたことになる。とするなら、「新出発」を図ろうとする『東京朝日新聞』とその主筆である小宮山の意向は、同紙に新聞小説を書き続けることになる桃水の新聞小説にも、陰に陽に影響するであろう。小宮山も桃水も、投書家また小新聞の記者の経歴があるが、『東京朝日新聞』の「新出発」が小新聞の方向でないことは、その後の『東京朝日新聞』の歴史や『上野理一伝』などからも明らかである。柳田泉「解題」にも、天香の評価として、「明治二十七八年、日清戦争のころに及び、東京朝日をして、立派に今日のように大新聞とのびさせる土台を築いた」とある。この「大新聞」は、小新聞に対する表現としても読まれ、日本を代表する全国紙という意味にもとれるが、いずれにしても、創刊時の『東京朝日新聞』と主筆の天香の方針が、小新聞の方向にないことは確実である。やはり、社主の村山や上野また主筆の天香たちが、目指す方向性は、『めざまし新聞』のような啓蒙性を持つ小新聞の特色や人気を利用しつつ、小新聞から「大新聞とのびさせる」方向にあったと考えられる。しかし、一足飛びに大新聞になることは難しい。天香が桃水などの小新聞の記者に期待したのも、後の夏目漱石のような大新聞としての小説ではなかったであろう。天香が桃水に期待したこととして、可能性として最もあり得るのは、かつての小新聞作家の筆を活かして、小新聞を「大新聞とのびさせる」ときにふさわしい「新聞の小説」であったと考えられる。それは、かつての小新聞の通俗的小説そのままではないし、また「世の学者といわれ識者の名ある人々」の評価を得るような、いかにも大新聞にふさわしい小説でもないだろう。後には漱石のような新聞小説作家が活躍するとしても、小新聞から大新聞への第一歩を踏み出したような時期に、いきなり小新聞離れのような小説を書く、先に引いた一葉日記「若葉かけ」（一八九一年四月一五日）に桃水の発言として引かれているよ

うに、「有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様をつゝらされば世にうれさるをいかにせん」という結果になるからである。「新聞の小説」の人気によって新聞自体も売れるためには、一定程度は、小新聞的な通俗的小説の要請に応じる必要もあった。しかし、その一方で「大新聞とのびさせる」ためには、「世の学者といわれ識者の名ある人々」に類した読者を取り込んでいく必要もあった。そう考えるならば、桃水が一葉に語ったという「新聞の小説」の問題は、そのまま『東京朝日新聞』の小説の記者として呼び戻された桃水の課題を如実に反映している。

『東京朝日新聞』の記者として小説を書き始めた桃水が、主筆である天香の指導とまではいかないまでも、その意向を汲む方向で執筆していたであろうことは、一葉日記「若葉かけ」に記された天香の記事から推測される。「若葉かけ」には、一八九一年四月一五日の初対面から一週間後の四月二二日記事に、桃水の発言として「されと吾友小宮山即眞居士は良師ともいふへき人なれば此君のみには引合せ参らせんなどの給ひ聞ゆ」とあり、さらにそれから三日後の二五日に記事には「其夜桃水師のもとより消息あり 小説の事にもこの語りありかつ先の日約し置し即眞居士への紹介をもなすへければさわる事なからんには明日午前より神田の表神保町とかやいへる下宿までもうこよと也」とある。記事の続きには、翌日、一葉が雨をおして桃水を訪ねると、「実は小宮山君も俄に脳の病ひをやしなはんとて此明にかま倉地方へ赴むかれたる」と言つて大変に気の毒がったことが記されている。しかし翌五月八日に桃水を訪問し、例によつて「小説のことに付而種々ものかたり」し「例のねんころにをしゑを給ふ」後、桃水が「今日そ小宮山君に紹介いたし侍らんにはし侍給へよ」と言つたので待つていと、日没頃に「即眞居士」こと小宮山天香が合流する。その後の記事は、次のように続く。

君はよはひ卅四年 桃水ぬしに二つのこのかみにおはすとかたけたかやかならす  
こえ給はず 人からいとおたやかにみうけ侍り ものかたりするほと例の夕けのむし  
ろ開かせ給ふ

一八五八年生まれの天香は、桃水より二歳年長で、「若葉かけ」が書かれた一八九一年には数えの三四歳である。「たけたかやかならす こえ給はず」とあるから身長が低く痩せていたことになる。「姿形」の点では、一葉が記す桃水の姿と対照的であるが、一葉は穏やか

な人柄を感じている。この記事の以前、先に一部を引いた二二日の記事には、一葉が桃水に預けた小説草稿を見た桃水が、「先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるか上に余り和文めかしき所多かり 今少俗調にと教へ給ふ」とある。こうした一連の記事から、一葉から小説家になりたいと相談を受けた桃水は、当初、それを新聞に載せる小説として指導したことが推測される。また、桃水が「吾友小宮山即眞居士は良師ともいふべき人なれば」と言い、現に『東京朝日新聞』の主筆であった天香を引き合わせていることから、桃水にとつて天香は「吾友」であると同時に「良師」でもあり、一葉の小説が「新聞の小説」として掲載可能かどうか、その判断を仰ぐ上司の編集者であったと考えられよう。一葉への指導が、天香にも相談するかたちで「新聞の小説」を基準としてなされている点に注目すれば、桃水は主筆の天香と「吾友」でもあるような忌憚のない交流の中で、「俗調」にも相応に配慮しつつ「新聞の小説」を模索していたと推測される。

桃水の側にも『東京朝日新聞』で「新聞の小説」を書く事情があった。一家の経済を支えなければならぬという経済的な事情である。桃水が朝日新聞記者として朝日新聞社に勤めた頃の給料はどれほどのものであったのだろうか。『朝日新聞』(一八八二年七月一日)には、「吾朝日新聞の目的」と題する社告が掲載されている<sup>69</sup>。時を同じくして朝日新聞社内では「朝日新聞社執務規程」<sup>70</sup>が実施された。社内組織全般を体系的にまとめた規定としては、最初のものである。その規程の第七章に給料に関する項目が載っている。

## 第七章 給料

第一条 社員ノ給料ハ惣テ総督局ニ於テ定ムヘシ

第二条 給料ノ支払ハ毎月二五日トス

但シ職工等ハ、請願ニヨリ月額ヲ折半シテ、一五日毎即チ二回ニ支払フコトモアルヘシ

但シ捺印セサルモノヘハ給料ヲ渡サス

第三条 社員ニ於テ給料受取ノ際ハ、惣テ本社ノ帳簿ニ受領シタルノ証トシテ、各自必ス

<sup>69</sup> 三面下段から四面上段にかけて組みこまれた長文の社告ともいえるもの、政治にはこだわらない朝日としての立場を宣言し、正論よりも大衆の教化を目的とする創刊以来の立場を改めて声明したものである。(朝日新聞百年史編『朝日新聞社史 資料編』朝日新聞社、一九九五年七月、八八頁)

<sup>70</sup> 前掲『朝日新聞社史 明治編』八九―九五頁

捺印スヘシ

但シ捺印セサルモノハ給料ヲ渡サス

第四条 入社又退社等ニテ、一ヶ月未満ノモノハ惣テ日給ヲ似テ支払フヘシ<sup>71</sup>

この規程は一八八八年「朝日新聞社通則」が施行されるまで実施された。この規程について、年末には社員の等級と月給の規定、探訪者規則が制定され、いずれも一八八三年一月から実施された。『朝日新聞社史 明治編』によると社員の等級は、当時の官庁の制度にならったもので、次のように一等から一七等までであるが、月給は、官吏よりはるかに安く、「一等の上給一〇〇円」でも、官吏でいえば六等の少佐（軍隊の階級の一。一一等級の六番目）が府県大書記官にしか相当しない。しかも、一八八三年、社長の村山龍平の月給七五円が社内最高で、庶務課長の上野理一は四〇円、つまり実際には八〇円（二等上給）以上の社員はいなかったわけである。探訪になると、さらに給料は安く身分も正式の社員とはみとめられず、もっとも待遇のよい「一等探訪」でも社員の六等下給相当、月給二〇円であった。

社員の等級および月給

一等	上給 百円	下給 九十円
二等	上給 八十円	下給 七十円
三等	上給 六十円	下給 五十円
四等	上給 四十五円	下給 四十円
五等	上給 三十五円	下給 三十円
六等	上給 二十五円	下給 二十円
七等	上給 十八円	下給 十六円
八等	上給 十五円	下給 十四円
九等	上給 十三円	下給 十二円
十等	上給 十一円	下給 十円
十一等	上給 九円五十銭	下給 九円
十二等	上給 八円五十銭	下給 八円

十三等	上給	七円五十銭	下給	七円
十四等	上給	六円五十銭	下給	六円
十五等	上給	五円五十銭	下給	五円
十六等	上給	四円七十五銭	下給	四円五十銭
十七等	上給	四円二十五銭	下給	四円 <sup>72</sup>

「朝日新聞社執務規程」は一八八八年五月二二日に改訂されるが、大きな変化はなかった。桃水の場合、一八八一年、特派員になったのが朝日新聞での初めての職務である。桃水の釜山（朝鮮）滞在時は、現地の物価と日本の物価に違いあり、比較検討が難しい。『東京朝日新聞』の入社時の桃水にも右の規程が該当したとすれば、等級と月給には二つの可能性が考えられる。一つは、海外特派員の経歴が認められ、それが等級と月給に反映されること。もう一つは、海外特派員の経歴が認められず、新人並みと見なされることである。

一八八六年、新聞社幹部の月給は、村山が一〇〇円、上野が五〇円、織田が一〇〇円であった。物価上昇や業績の好調を反映し、一八八九年に幹部の月給が上がっているとしても、桃水の月給が十分であったとは考えにくい。この時の上野は庶務課長であるが、実質的には経営陣の一人である。その給料五〇円より高くなることはあり得ず、海外特派員の経歴が認められたとしても、五〇円には遠く及ばないと考えるのが自然である。新人の待遇を受けたと仮定する場合、月給は「一七等下級」からのスタートなら二円、仮に特派員生活七年間で一年間に一階級上がったと仮定するなら、七年目で「十四等下級」で六円ということになる。給料の水準の目安に、米価と比較すれば、一八八一年の玄米一石（ $\parallel$ 一五〇kg）の米価は六円、翌一八九〇年は八円九四銭である<sup>73</sup>。桃水の給与の具体的な数字は不明であるが、大家族を支えるのに余裕のある金額であったとは考えにくい。

こうした給与とは別に、原稿料による収入も考える必要がある。明治時代に作家が出版社から受け取った原稿料ほどの程度のものであったのか。野崎左文（『私の見た明治文壇』前掲）は、仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』初篇の原稿料が一〇両、田邊花圃『藪の鶯』（一

<sup>72</sup> 前掲『朝日新聞社史 資料編』九三頁

<sup>73</sup> 森永卓郎『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』（展望社、二〇〇八年七月）、二八頁

八八八年六月、金港堂）は原稿料三三円二〇銭と伝える。『作家の原稿料』<sup>74</sup>によると、一八六七（慶応四）年当時の福沢諭吉の原稿料は、物理学・地理学の翻訳原稿料が一〇行二〇字で一両、政治・経済・法律関係は一両三分という。一八七一、二年の物価は、慶應義塾の授業料が一八両、米二〇キロが一円、小学校教員の月給が五円、太政大臣の月給が八〇〇円という。翻訳料は高く、法学者の箕作麟祥は一〇字一〇行で四円、福地源一郎は一枚五円、中江兆民の「維氏美学」は四円という伝説が残っている。二葉亭四迷『浮雲』は前金三〇円、社の要求で坪内逍遙の本名「坪内雄蔵」の著者名で発表された。残りの稿料五〇円を二葉亭四迷が一五円、逍遙は報酬として三五円を受け取ったという。

新聞では、広津柳浪「女子参政屢中楼」（『東京絵入新聞』、一八八七年六月一日―八月一七日）は一回分七五銭、小杉天外「魔風恋風」（『読売新聞』、一九〇一年二月二五日―九月一六日）は一回三円、森田草平「煤煙」（『東京朝日新聞』、一九〇七年一月一日―五月一六日）は一回三円五〇銭だった<sup>75</sup>。

『朝日新聞社史 明治編』には、桃水が『東京朝日新聞』で小説を書き始めた一八八八年以前の朝日新聞社が、小説や作家に期待したことを示す逸話として、原稿料に絡む次のような話が記されている。一八八六年七月一九日、朝日新聞東京支局の庶務主任・宇野長与茂は、社長の村山に手紙を送り、紙面改良の一策として小説の改善を説き、『小説神髓』（一八八五年）や『一読三嘆当世書生氣質』（同）の作者坪内逍遙の起用を建言した。当時、朝日新聞社の連載小説の作者は岡野半牧、宇田川文海の二人で、その下に探訪の中村善平、加藤信次郎らがいる、小説の材料集めや下書きにあたるという仕組みになっていた。坪内逍遙の入社に際し、両者は具体的な交渉をする。朝日新聞社は、年二回の小説で月給一三〇円という条件を提示した。これに対し坪内逍遙は、京都に住んで大阪へ出勤する、二か月に二週間ずつ社用を兼ねて上京すること、さらに月給は一五〇円できれば一七〇円という条件を提示した。

先に見たように新聞社幹部の月給が村山一〇〇円、上野五〇円、織田一〇〇円であった。逍遙の勤務先、東京専門学校（のちの早稲田大学）の月給は四五円で、朝日新聞社の提示

<sup>74</sup> 作家の原稿料刊行会『作家の原稿料』（八木書店、二〇一五年二月）、四頁

<sup>75</sup> 作家の原稿料刊行会、前掲書、五頁

は、その三、四倍の高給であった。月給一七〇円が一三〇円でも破格の待遇である。しかし逍遙は入社を断念する<sup>76</sup>。

ところで、一八八八年の『東京朝日新聞』の「寄書」欄には、徳富猪一郎（蘇峰）の名がみえる。蘇峰は一八八六年秋、「将来之日本」を発表して中央の論壇に登場し、翌年二月、民友社をおこして、評論雑誌『国民之友』を創刊するとともに、『新日本之青年』を刊行して青年層の人気を集め、朝日に寄稿したころは二六歳、まさに言論界の新星であった。その蘇峰が次のような思い出を語っている。

二十一年であつたと思うが、陸奥宗光が村山君と我輩を招いてくれた。我輩はこれが村山君との初対面であつたが、その席上、陸奥がいうには、村山は日本一の新聞経営者であり、徳富は日本一の記者である。この二人が提携して行けば、日本の新聞界のためにも、両人のためにも結構だ、などとうまいことをいって、我々二人を結ばせようとした。これから我輩は村山君と親しくなり、村山君もときどき二人引きの人力車で赤坂の陋居を訪問してくれた。ところで、村山君は我輩に朝日の入社をして社説を書いてくれという。我輩は他人の下に立つて仕事をするのを好まない。しかし、求められるままに、何回かは匿名で寄稿したことがある。村山君は莫大な原稿料をくれた。一介の貧書生であつた我輩を見どころありとして入社を勧めてくれた村山君に対して、今日は感謝するところ大なるものがある。

蘇峰の最初の原稿「快樂を高尚にする事」は一八八八年六月六日の「寄書」欄に掲載された。つづいて「憲法に関する管見」（一八八八年七月一五日）・「政界観測の失望」（同年九月六日）・「憲法に関する一二の管見」（同年九月二七日）・「憲法管見」（同年九月三〇日）が載せられる。ところで、徳富が語っている「莫大な原稿料」だが、当時の経理原簿には「徳富へ六、七月の手当三〇円」とあり、寄稿一本一五円の計算となる。当時としては、たしかに「莫大な原稿料」であつたといえる<sup>77</sup>。

こうしてみると、当時の朝日新聞社は、販売部数を伸ばすため、優秀な人材の確保にかなり力をいれていた事が推測される。そのためにも、売れる作品を書ける新聞小説家が必

<sup>76</sup> 前掲『朝日新聞社史 明治編』一七七一―一七九頁

<sup>77</sup> 前掲『朝日新聞社史 明治編』一七七一―一七九頁

要で、作家たちに渡す原稿料を高く支払ったとみてもおかしくはない。むしろ桃水は坪内逍遙や徳富蘇峰と比べると無名に近い作家であるが、このような状況にあった朝日新聞社に入社したのであれば、連載小説が人気を得ると、その作家の原稿料も、より多く支払われる可能性が桃水にもあったのではないか。

最後に新聞小説家の利点として連載小説の単行本化に言及しておきたい。新聞に連載される小説が読者に好評であった場合、連載の終了後に単行本として出版された。作家は新聞社からの報酬に加え、新たな報酬を出版社から受け取ることができる。明治期では著作権や版権に対する認識が現代と比べて低かったことは否定できない。コピーライト (copyright) は、一八七三年に版権と訳されるが、この版権は、著作者の権利と出版社の権利とが混同されていた。しかも出版社側に有利に解釈されがちだった<sup>78</sup>。原稿料を全く受け取ることが出来ない場合や小額の原稿料を受け取る場合も想定されるが、そうであったとしても、連載作品を単行本として出版することで収入が発生する可能性は、新聞記事だけを書いている場合より高いといえる。

## 6 おわりに

本章では、桃水の生い立ちと家庭環境を確認し、『東京朝日新聞』の新聞小説家になるまでの経緯について人間関係と経済的側面を中心に考察してきた。

桃水は、「招涼珠」(『新小説』一九〇九年八月)で少年時代の愛読書が「太閤記、三国志、史記列伝と唐詩選」だったと語り、家業についても言及している。

戦争ごっこは飯より好きで絶えず喧嘩も実行したが、相手の人数が味方より少ない時は、如何に戦を挑まれても応じなかった、平素否いやに奇侠を学んで年下の者には何な無理を言われても許す代わり年長の者に対しては我が否でも我意を通した。(略) 俠骨ある武士で家業の医は絶対に嫌ひであった。<sup>79</sup>

将来の夢が「俠骨ある武士で家業の医は絶対に嫌ひであった」という家業への反感があり、次の引用に見られるように「文筆に親し」む習慣があったことも、新聞小説家になる

<sup>78</sup> 作家の原稿料刊行会、前掲書、三頁

<sup>79</sup> 上垣外憲一、前掲書、一二頁(再引用)

遠因の一つに数えられるであろう。桃水自身は、新聞小説を書くようになった経緯について次のように述べている。

私が新聞小説を書くやうになつたについては、文章を鍛練する上に於て未だ何人からも影響された事はない、のべつに、間断なく筆を取つて茲に至つたのである。徳川時代の誰々の作、明治の何々の作、其いづれをも私は自分の修養のために読んだとか、参考に読んだとか云ふ事がない。読まないで無暗に書き慣れたのである。私は十二三の頃から既にか道楽氣でなく真剣なやうな調子で文筆に親んだ。それが追々に職業となつて遂に今日に及んだのだ。其時分私は頻りに日記を附けたものだが、今見ると其日記には何も彼も書き込んである。漢詩もある。和歌もある。感想、論文、紀行文、と云ふ風に無暗に書いてある<sup>80</sup>。

桃水は、「十二三の頃」からの「文筆」への親炙の延長で「新聞小説を書くやうになつた」と回想している。「十二三の頃」というのは、対馬藩が幕末期の多事多難で窮乏し、倭館の運営にも支障が生じた余波で、桃水も釜山に渡り給士として働き始めた時期に重なる。「道楽氣でなく真剣なやうな調子で文筆に親んだ」という発言の裏面には、経済的な苦勞をなめる日々が始まり、金を稼ぐことの大切さが身にしてみる体験が潜んでいると想像される。

「文筆」への親炙は、「十二三の頃」には、そうした年齢で働く日々からの逃避や自己慰撫の性格もあつたであろう。桃水の場合、経済的な苦勞は続き、その後も父のたび重なる失敗や失業によつて、半井家の長男としての責任は、重くなるばかりであつた。その間も、「のべつに、間断なく筆を取つて茲に至つた」「それが追々に職業となつて遂に今日に及んだのだ」というのは、「十二三の頃」に多分に逃避や慰撫として始まつた「文筆」への親炙が、経済的困窮の持続とともに持続し、「無暗に書き慣れた」という没頭の深さが、やがて逃避や慰撫の次元を超えて、一家の生計を支える桃水自身を支える手段にもなつたことを語っているようにも考えられる。「無暗に書き慣れた」こと、「道楽氣でなく真剣なやうな調子で文筆に親んだ」ことは、経済的な困窮を生きる少年桃水の精神的な支えとして始まり、経済的困窮とともに成長した青年桃水の経済的な支えとなつていく。経済的な支えと

<sup>80</sup> 半井桃水「新聞小説は何うして書かれるか?」『文章世界』第六卷第八号(博文館、一九一一年五月二五日)、一〇八一—一〇九頁

いっても、役つきでもない新聞記者の月給では、係累の多い一家を支えるには十分ではない。しかし、「文筆」の原稿料は、「文筆」家としての能力や人気によって変動する。「文筆」次第で高い原稿料や収入を得ることも夢ではない。桃水にとって、少年時代から親しんだ「文筆」の力を、「新聞の小説」を書くことで発揮することは、「無暗に書き慣れた」という書くこと自体による精神的救済の面からも、また「文筆」の力で生計を立てるといいう経済的な面からも、実に重要な活動であったと考えられる。

## 第二章 「啞聾子」論——主人公の設定をめぐって

### 1 はじめに

この章では、桃水が朝鮮から呼び戻され、『東京朝日新聞』に最初に連載した小説「啞聾子」の作品読解を行う。すでに一葉の日記「若葉かけ」（一八九一年四月一五日）を引いて確認したように、桃水は、「新聞の小説」が「有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様の事をつゝらされば世にうれさる」ということを熟知していた。その一方で、「この新出発の東京朝日」（柳田泉「解題」）が、旧来の小新聞的な紙面から脱し、大新聞の方向に舵を取ろうとしていたことも本論第一章（「朝日新聞社と桃水」）で検討確認したところである。そこでの検討の結果として、東京朝日新聞社入社時の桃水の「新聞の小説」家としての課題が、一定程度は、小新聞的な通俗的小説の要請に応じる一方で、大新聞の読者にも訴える新味を取り込んでいくことであった。その課題に、実作を通じて分かりやすいかたちで応じることが困難であることは、先の「若葉かけ」の発言からも知られるが、桃水なりの工夫の痕跡が見られるかどうか、その点に注意しつつ検討を試みる。

「啞聾子」は、『東京朝日新聞』に一八九九年三月一日から四月一七日まで掲載された。「桃水痴士筆記」として、一回を一席とし毎回挿絵がある。連載後には同年中に単行本としても出版された<sup>81</sup>。

大まかな内容は、周囲から啞聾子と目されていた主人公の岸辺捨吉が、実際には啞聾子のふりをしていたことを告白し、その理由や経緯を描く物語である。全三一回<sup>82</sup>にわたって連載されるが、連載が始まる前日の三月九日には連載予告が出されている。

### ○新出の小説

<sup>81</sup> 半井桃水『啞聾子』駸々堂、一八八九年一月。

<sup>82</sup> 朝日新聞百年史編『朝日新聞社史 資料編』（東京朝日新聞社、一九九五年一月）には『朝日新聞』の連載小説一覧が載っている。その一覧には作品名・作家名・掲載期間・回数順に示している。この目録によると、「啞聾子」の連載回数は「三十」と表記されているが、実際のところ「三一」である。また、高木健夫『新聞小説史年表』（国書刊行会、一九八七年五月、四六頁）にも「啞聾子」の連載回数は「三十」になっている。既存の資料に誤差が生じるのは、おそらく第一回に当たる三月一〇日の連載が「発端」と記されていることと関係している。つまり、第二回から「一席」と記され、最終回に当たる四月一七日の連載が「三十席」と記されていることが連載回数の誤差が発生した原因とみられる。

明日の紙上より桃水痴史が得意の婉曲の筆を以て物せる左の小説を掲ぐ

啞聾子 桃水痴史 稿

趣向ハ新奇なる人情小説なり文章ハ婉曲なる自叙体なり

〔『東京朝日新聞』一八八九年三月九日〕

新聞小説では、連載開始の前に予告や広告が出ることは珍しくないが、新作の告知が必ず出るわけでもない。「啞聾子」と同年の『東京朝日新聞』の新聞小説では、「阿姑麻<sup>あこま</sup>」（霞亭主人、二月一日―二月一三日）、「双飛燕」（花々亭香夢・春泉居士、四月一八日―五月一〇日）、「小夜嵐」（香夢小史、五月一五日―五月一七日）などには連載告知がない。それと比べるなら、右の告知は、桃水に対する期待と受けとめていいかも知れない。その期待は、具体的には、前章で言及した『東京朝日新聞』主筆となった小宮山天香<sup>83</sup>の期待でもある。右の予告の筆者は不明であるが、桃水本人でないとすれば、桃水のことを知悉していた記者が、ある程度は作家の特色や小説の性格も把握した上で書いたと考えるのが自然である。その可能性が最も大きいのは主筆で旧知の天香である。一葉の日記に見られた天香関係の記事からうかがえるように、天香と桃水は友人としても親しく交わっている関係にある。「新奇なる人情小説」という句は、広告にありがちな表現とも言えるが、『東京朝日新聞』の小説家としては新顔の桃水に、どういう期待が寄せられていたかを示唆するようにも受けとめられる。

ところで、右の予告には「得意の婉曲の筆」ともあるが、この表現は、それ以前の桃水の「筆」（作家の特色）をそれなりに把握していたことを示す。朝日新聞での活動としては、桃水には、「鶏林情話 春香伝」（『大阪朝日新聞』一八八二年六月二五日―七月二三日）の連載がある。同作も「人情小説」に括られる要素がある点では興味深いが、七年前の小新聞時代の『大阪朝日新聞』の翻案作品を前提にした通知文ではないだろう。しかし、そのような前作を通じて「得意の婉曲の筆」が認められていた可能性はある。原作がある「鶏林情話 春香伝」の場合、小説の展開や一回ごとの分量については、ある程度は予想し調整することができる。主要な登場人物や事件また展開が一定程度決まっているのであれば、作家の腕の見せどころは「婉曲の筆」や「婉曲」な「文章」など、文章表現ということになる。そのような意味での「筆」があつたとしても、「新奇なる」小説を自らの創作として

連載する場合には、人物の設定や事件や展開、小説の素材や構成、一回ごとの分量に見合った内容などを計算しながら小説を書かなくてはいけない。その力量を測り、測られるという点で、この最初の小説「啞聾子」は、『東京朝日新聞』の「新聞の小説」作家としての適性が問われる作品でもあった。

『東京朝日新聞』以前の作品の執筆については、「鷄林情話 春香伝」以外にも、『上野理一伝』に、一八八二(明治一五)年「十月二十七日には桃水が汽船高千穂丸で大阪に帰ってきた。彼は疲れることをされぬげに旅装を解く間もなく「朝鮮みやげ」という時局に即した続き物を連載した」<sup>84</sup>と、桃水が「続き物」を『大阪朝日新聞』に連載した記事がある。この一〇回にわたって掲載された「朝鮮みやげ」は、新聞小説というより、桃水の朝鮮滞在経験を元にした朝鮮見聞録に近い連載物である。

あるいは、桃水が西京新聞入社の際について回想した以下の文章もある。

私は明治十一年西京新聞に入り、大阪で魁新聞が創刊される時から入社して、初めて小説に筆をそめました、当時新聞読物の執筆者で、私どもの先輩と認めて居たのは、仮名垣一派、即ち魯文氏を含め、柳塘、橋塘、胡蝶園、一筆庵等の諸氏と、高島藍水、爲永眞水、條野採菊、古川傀儡子、三品蘭溪の諸氏マでなりました。

私は明治十四年魁新聞が廃刊してから同十八年まで中絶しましたが、其の後官吏生活の餘暇、常に匿名をもって、都下二三の新聞小説を書き、二一年東京朝日新聞創刊以来、また桃水の名をもって執筆する事になりました<sup>85</sup>。

桃水の発言を検証すべく『新聞小説史年表』<sup>86</sup>を調べると「桃水痴人」の名前で一八八七年一月一五日『絵入自由新聞』に「新編開化の復讐」を掲載していたことが確認できる。ただ、「新編開化の復讐」は一回読み切りで連載小説ではない。そうした点に加え、本章の冒頭で確認した『東京朝日新聞』創刊時の「新聞の小説」という課題との関係からも、「啞聾子」は、桃水の新聞小説家としての能力が本格的に試された作品といえる。

<sup>84</sup> 『上野理一伝』(朝日新聞社、一九五九年一二月)、二二二頁

<sup>85</sup> 半井桃水「新聞小説の發育期」『早稲田文学』二二二二号(早稲田文学社、一九二五年六月)、一四六頁

<sup>86</sup> 高木健夫『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月)、四二頁

「啞聾子」の考察で注目したいのは、耳と口が不自由な障害者を装うという主人公の設定の意味である。また、作者の桃水が、作品内に登場することの意味である。次節以降では、以上のような主人公捨吉の設定と作品内に桃水が登場する点に注目しながら、そうした設定の意味について検討することで、桃水が『東京朝日新聞』の作家として「新聞の小説」の課題にどのように応じようとしたのかを考察したい。

## 2 主人公の設定

桃水が、「新聞の小説」を意識して「啞聾子」を書いていることは、作中に新聞広告と記者会見と記者桃水による取材という趣向が導入されていることから推測される。具体的には、小説の主人公である岸辺捨吉という人物の記者会見を予告する新聞広告が載る。その広告は、それまで啞聾子と目されていた岸辺捨吉が、実際には啞聾子ではなかったことを告白した広告文で、なぜそのような生き方を選択したのかについて記者会見をするという内容であった。作中では、その記者会見に記者桃水が取材に行ったことが記される。

捨吉（「私」）が語ったのは次のようなことである。幼い頃、捨吉のせいで父は斬殺され、妹は行方不明になる。捨吉は、妹を探し出し父の仇を討つまで、啞聾子として生きることを決意する。呉服屋で働き始めた捨吉は主人とその娘お雪には可愛がられる。最初は捨吉を嫌がっていた主人の後妻のお初も、何故か急に捨吉を可愛がるようになる。それは密かに佐七という男と関係を持っていたお初が、啞聾子の捨吉を利用すれば、密会がばれないと思っただけだった。佐七と共謀し呉服屋をのっとりとするお初の計画を知った捨吉は、その計画を見事に防ぐ。その後、片桐家に嫁ぐことになったお雪が、実は養女であり、行方不明だった妹であることを知る。しかし、捨吉は、お雪の幸福のために、その事実を明かさず、お雪が嫁いだ片桐家で働くようになる。ある夜、捨吉は、盗賊と間違えてお雪の義父となった片桐東作を殺してしまう。しかし、東作の遺書から、東作が故意に捨吉の手を借りて死を選んだことが明らかになる。父の仇であった東作は、偶然捨吉の正体を知り、捨吉の敵討ちのために自ら捨吉の手にかかり敵討ちを果たさせたのであった。

捨吉が「啞聾子」と偽った目的と経緯を確認する。捨吉は、京都生まれで本名は三嶽俊吉みたけしゆんきちで父と四つ下の妹と暮らしていた。父は三嶽青松という儒者で、母は妹のお国を産んで健康が悪化し翌年に亡くなる。青松は幕府の暴威を憎んでいて、倒幕の計画をひそかに立てていたが、捨吉はその計画を半眠りに聞いていた。捨吉（俊吉）が六歳の誕生日、訪ねて

きた佐幕派の武士に、それとは知らずに父の意思を告げたのが災いし、父は斬り殺されてしまう。自宅も火にかけられ焼失する。江州の親類を頼ろうとした捨吉は、妹を背に山を越えようとして疲労で倒れる。気がつくとき妹の姿は見えず、絶望した捨吉は、自殺（湖水に飛入）しようとするが、江戸の出店へ向かう江州長浜の縮緬商人である森田屋の妻お浜に救われ同道することになる。すべての不幸の原因が自分の耳と口にあると思った捨吉は、父の復讐と妹の行方を知るまでは耳と口を閉ざし「啞聾子」として生きることを決意する。

仇討は、曾我兄弟や忠臣蔵などに代表されるように、小新聞の読者に喜ばれる「有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様事」に類する筋立てである。しかし、その仇討をする主人公が「啞聾子」であるという人物の設定や仇討される男が真相を知って自ら犠牲になるといった仇討の様態は、森鷗外の「阿部一族」や芥川龍之介「或敵打の話」などを経て昭和以降の大衆小説にも多く見られる一般的な仇討ものとは距離がある。仇討ものという筋立てを借りる一方で、主人公を「啞聾子」とする人物の設定や東作が捨吉に仇討させる趣向には、小新聞的な通俗的小説の要請に応じる一方で、大新聞の読者にも訴える新味を取り込んでいくという姿勢がうかがわれるのではないだろうか。

主人公の人物設定について、障害児の社会的地位という視点から考察してみよう。江戸時代における障害児や奇形児の待遇には、大きく分けて二つの実状があったと考えられる。一つ目は、〈当道座・警女座〉、もしくは〈見世物小屋〉に代表される芸能や娯楽の担い手としての生き方である。二つ目は、家庭が貧困の状態に陥るといふ恐れから、あるいは、〈家〉に何らかの災いをもたらす恐怖心から、家族共同体や血縁共同体から追放され、捨て子や子殺しの運命を受けるといふことである。そのほか、多くの〈障害児〉の生き方として、家族・親族、村落など血縁や地縁の共同体の中で、身内や近隣者の扶養を受けて生きていくという生き方である。三番目の生き方を問題にした明治後期の小説に国木田独歩「春の鳥」があり、明治後期においても、多くの〈障害児〉の生き方の問題は、解決が難しい問題であった。〈障害児〉は、いわゆる普通の生活を送るのが難しいという認識があり、それゆえ捨てられる場合もある。江戸時代は、〈障害〉の有無にかかわらず子どもの死亡率が高く、庶民の間では、生まれながらの〈障害児〉を育てることは一般的に無駄な努力と

して認識され、しばしば養育の放棄が合理的とみなされていたという<sup>87</sup>。「啞聾子」には、そういう〈障害児〉に対する一般的待遇と例外的待遇が次のように描かれている。

全く実の母娘でありません此家の御新造ハ二年前に五十三歳で死去り旦那が常から最頂にした芸者を引かせて後妻に直したのが今の御新造だと番頭小僧の話聞き始めて不審も晴れました。此家の雇人ハ相変わらず私をいぢめ御新造さんも何となく私を憎みまして暇を出さうと致しましたがお嬢さんハ殊の外私を可愛がり少しも傍を放しませんから旦那も流石恩愛に引かされ暇を出す事も出来ませんでした

〔「啞聾子」第十二席、『東京朝日新聞』一八八九年三月二六日〕

呉服屋で働くことになった捨吉は、主人とその娘お雪には可愛がられるが、主人の後妻であるお初を含め周辺の人々は、捨吉の事を嫌がるだけでなく、日常的な「いぢめ」の対象にもする。障害を偽装する捨吉は、社会の中で弱者が受ける苦悩や待遇を自らの体験として知ることになる。〈障害児〉や〈奇形児〉は自在不能な存在と見下される。そうした蔑視には、その養育が〈家〉にとつて大きな負担となるという背景以外にも、「片輪」や「不具」を「タブーの侵犯」による「神罰」や「仏罰」として捉える感覚が働いている。親や先祖に「悪業・罪業」があり、その「報い」である「業罰」や「靈障」として〈障害〉がもたらされ、〈障害児〉が生まれた〈家〉には災いが起こるといった民間信仰もあった<sup>88</sup>。そのような時代環境の中での偏見や先入観は、捨吉が自らに下した罰の強度を強める。「啞聾子」として生きるという捨吉の選択には、自身の過ちで家族を失ったという罪の意識が働いているとともに、「啞聾子」として生きること罪を引き受け、日常的に「自ら下す罰」を受け続けることで少しでも罪を贖う気持ちがあったのではないだろうか。また、そのような贖罪と自罰を通じて、弱者の痛みを自ら知ったことが、新聞広告を通じて自身の体験を告白するという行動につながっていったと考えられないだろうか。そうしたかたちで新聞が機能することは、小新聞から大新聞へという方向性にも合致するように思われる。

<sup>87</sup> クウイーラ、デヴィッド・ドミニク「江戸中後期における〈障害児〉・〈奇形児〉の捨て子や子殺しに対する認識」『障害史研究』第二号（九州大学大学院比較社会文化研究院、二〇二二年三月）、一七頁

<sup>88</sup> クウイーラ、デヴィッド・ドミニク、前掲論文、一七頁

捨吉を啞聾子と信じて嫌悪し、いじめてもいたお初が、その態度を変化させるのは、次のような理由による。

私ハ此外種々の話を聞きましたが結局御新造と彼男ハ互ひに主家を取潰ぶさうと云ふ相談に過ぎません二人ハ酔いの廻はるに付けあらぬ戯を致し此日ハ別れて帰りましたが是から一月に二三度づ、ヤレ親許に行くの寺参りをするのと云立て私を供に連れてハ密会を致しました若し私が居なくなれば勢ひ耳や口の明いた者を連れて行かねばなりません実に私ハ聞かず言はずでお誂への供廻りですから以前とハ打つて變つて御新造が私を可愛がるやうになりました

（「啞聾子」第十三席、『東京朝日新聞』一八八九年三月二七日）

こうした「御新造と彼男」との設定は、「有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様」の事」として捉えられる。「奸婦いん女」であるお初の状態が急変するのは、男との密会で捨吉を利用して他言されないからであり、そうしたかたちで（障害）を利用することは、いかにも「奸婦いん女の事跡」にふさわしい。大店の「御新造」であるお初は、一人で自由に外出することは当然難しい。望ましいのは、口堅い人と同行することである。しかし、同行者がいれば密会を秘密にするのは難しい。ただ、同行するのが「聞こえない」「話せない」人間であれば、密会を暴露される危険性は確実に低くなる。御新造が捨吉を利用するようになる一方、捨吉の方では御新造との外出を避けるようになる。その結果、お初は、口封じのためにも使い道がなくなった捨吉にぬれぎぬを着せ、追い出そうとする。

仮令生命を失ふ迄も一旦心に誓ふた事ハ飽迄も実行しやう、父の仇を報じ妹の生死を知るまでハ罪を犯した耳と口の禁錮ハ決して解くまいと思込んでハ居るもの、不義非道の咎を受け賊の汚名を取った時ハ、モウ堪らん寧ろ理非を明白に言立やうかと思ひましたが齒をくひしばり眼を閉て暫く思案を致して見ると夜半父の殺された時妹を失ふた時其折々の有様が今尚眼前にチラ付て忽ち怒ハ悲に變じ耳と口の大罪を許す氣にハなりません

（「啞聾子」第十九席、『東京朝日新聞』一八八九年四月三日）

お初の仕打ちは、捨吉を店から追い出すための謀略であるが、捨吉は啞聾子を偽っているため、自らの罪を晴らすことも容易ではない。無実を主張すれば、啞聾子の秘密を告白しなければならぬ。それは親の復讐や妹を探すまでとはいう自らに課した罰を自ら赦すことになる。無実を晴らすことも、人生の目的を諦めることも選択できない捨吉の悩みが描かれている。その中で再確認されるのが「耳と口の大罪」である。

この「耳と口の大罪」は、もちろん捨吉自身の幼いときの言動を指すが、こうした捨吉の発言は、作中では新聞の予告を通じて案内された記者会見で語られ、それを取材した新聞記者によって報じられるという趣向になっている。つまり、「耳と口の大罪」を自戒し、その苦しみが新聞を通じて拡散されるということである。

ところで、『東京朝日新聞』が買収した『めざまし新聞』の星亨が、条例違反で収監されたことは先に確認した。明治期には、反政府的な言論活動の中心となった新聞での言論活動をとり締まるために、数次にわたって新聞による「耳と口の大罪」を取り締まる条例や法令が出される。『東京朝日新聞』創刊の前年一八八七（明治二〇）年十二月二十九日にも、一八七五（明治八）年に制定され、一九八三（明治一六）年に改正された新聞紙条例をさらに改正した「新聞紙条例改正ノ件」が明治二〇年勅令第七五号として発令されている。第七五号の次の勅令第七六号は「出版条例改正ノ件」、勅令第七七号は「版權条例」、勅令第七八号は「脚本楽譜条例」、勅令第七九号は「写真版權条例改正ノ件」で、いずれも同日の発令（『明治二十年法令全書・上巻』内閣官報局、一八八七年）である。『東京朝日新聞』が創刊した一八八八年は、これら前年末に改正また制定された法令によってメディアによる「耳と口の大罪」の取り締まりが実施されていく。そのような年に条例違反でつぶされた『めざまし新聞』を買収し創刊された『東京朝日新聞』において、「耳と口の大罪」への意識や配慮が社員一同に共有されていたことは想像に難くない。主筆の天香などは、その点に最も敏感であったに違いない。新聞をめぐるそのような文脈の中で、再び「耳と口の大罪」を肝に銘じた主人公が、その経緯を新聞で予告した記者会見で発表し、それを桃水自ら取材するという趣向を捉え直すなら、桃水が「世の学者といわれ識者の名ある人々」のような新聞読者にも訴える現代的社会的な要素を、まさに「新聞の小説」の「新奇」な試みとして「得意の婉曲の筆」で導入しようとしているようにも考えられる。

一方、作中の文脈として捨吉が「耳と口の大罪」による自罰を課し、周囲から啞聾子と誤解されることで、その後起こる事件に善処することができた。捨吉が自殺を試みたと

き、助けてくれた江州長浜の縮緬商人森田屋の妻お浜が危険にさらされた時や、お初が番頭と結託し呉服屋を乗っ取る計画を立てた時などである。捨吉が、その計画を防ぐことができたのは、捨吉を「聞こえない」「話せない」啞聾子と思い込んだ悪者が油断し、捨吉の前で計画を漏らしたからである。その計画を知った捨吉は、先に述べたように「耳と口の大罪」という意識から、自ら事件を解決するわけにはいかないため、周辺の人物を陰で操ることで悪事の実行を未然に防ぐ。その過程で操られる人物たちは、本人の行動が捨吉によって誘導されたことを気づかない。周囲から啞聾子として見下されている捨吉が、実際には、物語の中で最も影響力を行使する強力な人物であることは、読者に意外な面白さを感じさせたのではないだろうか。こうした人物の設定なども、新聞というメディアに潜む力を「婉曲」的に表現しているようにも見える。

次に、捨吉が啞聾子を偽った事と捨吉の目的達成の関係について検討しよう。捨吉は、呉服屋の令嬢であるお雪が片桐家に嫁ぐ時、お雪が実は養女であることと、お雪こそ幼い頃に見失った妹であることを知る。妹の行方を探すという目的は、意外なかたちで解決してしまう。さらに親の復讐という目的の方も、同じく意外なかたちで解決してしまう。その場面は次のような記述になっている。ある日の夜、片桐家に泥棒が入る。

私が刀を捻取り飛退かうとした処へ賊ハ再び蹴起て組付いたから堪りません私が手に持た刀で脇腹をグツと突れアツと云つて倒れましたが賊も中々強い奴で又も起上つて戦ひました此中私が突出す刀に賊ハ咽喉を刺通され真逆様に打倒れて其儘死んで仕舞ました

（「啞聾子」第二九席、『東京朝日新聞』一八八九年四月一六日）

捨吉は、盗賊と間違えてお雪の義父となった片桐東作を殺してしまう。捨吉からすれば偶発的な事故とはいえ、東作の殺害は大きな罪に問われる行為である。しかし、東作の遺書により、この出来事が偶発的な事故などではなく、実は東作が故意に捨吉の手を借りて自ら斬殺されるような死を選んだことが明らかになる。父の仇であった東作は、偶然に捨吉の正体を知り、捨吉の敵討ちの成就のため、自ら捨吉の手にかかり敵討ちを果たさせたのであった。

今晚捨吉に三嶽氏殺害の時相用候一刀を預置き賊の扮打となりて忍寄り其手に掛つて相果申候間発狂の上自殺と共筋へハ御届可被下候死後の事別段頼置度義も無之唯夫婦睦じく相暮らし孝吉ハ捨吉を兄と頼み互ひに同心協力し家を起し名を揚げ候  
（「啞聾子」第三十席、『東京朝日新聞』一八八九年四月一七日）

こうして、捨吉は別れた妹と再会を果たし、親の復讐も達成することになるが、両方も捨吉の努力で得たものではない。つまり、親の復讐をするという人生の目的は達成したものの、その過程において捨吉みずからの力ではなく、外部の力（東作の意志）により解決できた。言い換えれば、相手の行為により捨吉の復讐は達成されたことで、自らの意志で明確に復讐の対象を認識し、復讐したわけではない。つまり、結果として偶然に復讐を果たしたということになり、捨吉から見ると不完全な復讐といえるだろう。このような復讐の意味をどう捉えるといいのだろうか。

ポイントは、捨吉の父と東作が、倒幕と佐幕の関係にあったということだろう。両者の関係は、長州戦争や戊辰戦争などを経て明治期にも持ち越され、西南戦争や自由民権運動などにも影響していく。明治政府は、倒幕派の薩長土肥（薩摩、長州、土佐、肥前）の藩出身者によって担われ、政府に反対する側からは藩閥政治と呼ばれる。先に見た新聞紙条例なども政府による反対派への対抗措置である。佐幕派であっても、会津藩出身で九州帝国大学初代総長となった山川健次郎のような人物もいる。一方、薩長土肥の内部にも亀裂が生じ、征韓論を唱え政府を去り西南戦争（一八七七年）の中心人物となった薩摩藩出身の西郷隆盛や自由民権運動の中心になる土佐藩出身の板垣退助のような人物もいる。明治期に持ち越された倒幕派と佐幕派の関係も含め、藩閥政治の下で派閥闘争は複雑化し錯綜する。そうした闘争には遺恨が伴い、倒幕派の中心人物で藩閥政治の中心人物でもあった大久保利通が、征韓論や西南戦争で西郷に賛同していた不平士族によって暗殺されている（一八七八年紀尾井坂の変）。征韓論の問題は、書契問題や江華島事件（一八七五年）などを通じ、桃水の出身である対馬藩（宗家）つまり半井家の運命とも深く関係していた。討幕派や佐幕派に属した人々が、具体的に明治期における運命や人生をどう生きたかは、それぞれに異なり整理しようもないが、士族またその子弟として幕末明治を生きた人々が、何らかの恩讐の念を抱えて生きていたことは容易に想像される。

討幕派の子弟である捨吉は、佐幕派の東作に仇を討つ。それは実は佐幕派の東作による自罰で、その遺書には、佐幕派の子弟（孝吉）と討幕派の子弟（お雪、捨吉）が一致結束し、一家を興すという希望が語られる。その趣向は、幕末から明治期にかけて、実際にいくつかの内戦や自由民権運動などの言論戦によって遺恨を抱きながら、ともかくも恩讐を超えて一致団結し国会を開設しなければならぬ明治前期の日本の課題とその解決が、「婉曲の筆」によって一種の希望として描かれているように見える。国会開設の詔勅（一八八一年）により、一八九〇（明治二三）年を期して国会を開設することが公示されており、実際に同年に開設されるが、それは『東京朝日新聞』の創刊そして「啞聾子」の発表の翌年のことになる。その点も意識すれば、捨吉から見れば不完全な復讐も、同時代の国内の課題と解決が「婉曲」に、しかし積極的な意義を込めて表現されていたと考えられる。

### 3 桃水の役割

小池正胤は「啞聾子」の内容からみると、当作品は一種の「当代敵討」であり、その発想そのものが、すでに、戯作小説（敵討草双紙類）的であると指摘し、その例として以下のような文体を挙げている<sup>89</sup>。

父を殺した武士ハ其中の一人で鮮血の淋漓る刀を携け私をぢろりと見た儘勝手の方に逃げましたが小児でこそあれ父を殺された悔さに怖い事も危ない事も何も彼も打忘れ素手で跡を追ひましたが早くも何処にか影を匿してとうく行方が知れません止む事を得ず座敷の方へ帰つた時の悲しさハどのやうでありましたらう。

（「啞聾子」第二席、『東京朝日新聞』一八八九年三月十三日）

小説は、東京の諸新聞紙に、岸辺捨吉という人物の記者会見を予告する新聞広告が載ることから始まる。

十余年間予と交際を結びたる諸君ハ予を以て啞なり聾なりと信ぜられし事ならん予ハ故ありて世を欺き人を欺けり予ハ啞にも非ず又聾にも非ざるなり今や予ハ何が故に

<sup>89</sup> 小池正胤「文海・桃水・渋柿園の新聞小説」『文学』三四（九）号（岩波書店、一九六六年九月）、一四頁

斯る忌はしき不具を学び自から幸福を抛棄せりやを謹んで諸君に告ぐべし此廣告を出したる後より第三日目の正午を期し新に禁錮を解かれたる予が耳と口とハ第一着に諸君の叱責を聞き自己の謝辭を述べんと欲す乞ふ予を知れる諸君右の刻限より府下第一の割烹店日本亭へ光臨あらん事を

岸辺捨吉拜告

〔「啞聾子」発端、『東京朝日新聞』一八八九年三月十日〕

この廣告は今まで障害者として世間に知られていた捨吉が実は障害者ではなかったという本人からの告白文で、なぜそのような生き方を選択したのかについて記者会見をするという内容であった。ここで注目しておきたいのは、その発表の場所が、「日本亭」となっていることであり、先に見たように国会開設直前の日本の課題と関連させるなら、「日本亭」は、そのまま「日本」を寓するような印象がある。

此廣告文を東京朝日新聞社に依頼し来れると同時に同じ趣意を認めたる招待状を送寄せり世にも稀らしき事なれば編輯員一名を遣はして会場の模様を見謝辭の趣意を聞きかしまるこそ宜けれと社中の評議略々決したり侍何人を遣はさんかと人選みに数時間を費しけるが斯く面倒なる会席に列する事ハ誰しも好まざる処なれば甲推し乙譲りて中々果てしなく見えける時に或意地悪き社員の曰らく此役目ハ桃水子こそ適当なれば才子ならずして多病斯る折に用ひずんば又何の用にか立んと諸兄頗る同意を表し社主遂に桃水に命ず泣子と地頭に勝つべきやうなく桃水ハ愚痴の有たけを溢しながらも止むを得ず領諾し当日を待受けて指定されたる(略)

〔「啞聾子」発端、『東京朝日新聞』一八八九年三月十日〕

「発端」は、新聞の広告から物語が始まり、作者自身と重なる「桃水子」をその会見へ取材に行かせ、岸辺捨吉の話を知るといふ構成になっている。続く第一席からは、主人公捨吉の回顧により物語は展開するので、捨吉が「私」と自称して語る話体が基本になっている。例えば「諸君、私が十余年啞聾となつて人を欺き夜を欺き(略)私の故郷ハ京都で本名ハ三嶽俊吉父ハ三嶽青松と云ふ(第一席)」や「若し私が居なくなれば勢ひ耳や口の明いた者を連れて行かねばなりません(第十三席)」など、物語は「私(≡捨吉)」が語っている。この語りの方角について、小池正胤は「従来の小説が「或人より聞きえたる」ところを

録し」と三人称視点を採ったのに対して、これは一人称視点を試みたものであり、その点では西欧の近代小説にしばしば見られる視点用法に合うものといえよう。<sup>90</sup>」と評価している。小池正胤は視点の側面から「啞聾子」について新しい分析を提示している。しかし、「一席」から「三〇席」まで用いられる「席」という語は、落語や講談などの用語の借用であり、小池の指摘が正しいとすれば、ここでも、小新聞的な通俗性としての落語講談の要素を導入しつつ、「西欧の近代小説にしばしば見られる視点用法」も導入するという工夫が施されていることになる。

こうした「新奇」の導入という後者の工夫は、作中への桃水の登場にも認められる。それにより、小説は、現に近時に起こった記者会見を実際に取材し、それに基づいて主人公の会見を紹介したという印象を与える。

桃水の小説内への登場は、発端を含めて三回にわたる。発端、第一五席、そして最終回の第三〇席である。「桃水子」の登場場面は、作品全体の発端、中間、末尾となり、全体の構成の上で要所に配置されている。

発端では、社内の様子が描かれ、記者でもある桃水本人が、取材にいったという記述は、岸边捨吉の記者会見が現実のものであったという印象を与える。先の引用に続く「日本亭」を訪れた場面から引用する。

玄関を上げれば、左手に卓机を据え、二人の書記椅子に凭りて来賓の姓名の帳簿に記し、其側に一個の丈夫直立して迎居れり。年は二十七八、色白く鼻高く眼涼しく眉秀で、身には黒羅紗のフロックコートを着、足には仏蘭西皮の半靴を穿てる天晴の紳士なるが、左の手に一葉の新聞紙を持ち、来賓に接する時は之の眼前に出し、右の手の指をもって彼広告に記したる岸边捨吉の文字をさし、更に其指を自己の鼻に向け笑を含んで礼を施し後、眼を二階の梯子に付け頻りに両手を動かすは彼処に行けとの意なるべし

「桃水子」が、「日本亭」の受付で「天晴の紳士」岸部捨吉から迎えられる場面である。次に「桃水子」が登場する第一五席は、連載全体の中間ということもあり、読者に、それまでの話を回想させ、主人公の設定を再確認させるような説明が付されている。

<sup>90</sup> 小池正胤、前掲論文、一四頁

筆記者桃水申す三嶽俊吉なる此話の主人公が初めて東京へ上りし頃八年甫て七歳なれど爾後数多の歳月を經此時ハ早十八歳森田屋の娘お雪ハ十五の春を迎えたるなる冀くハ読者其心して憐なはさん事を

（「啞聾子」第十五席、『東京朝日新聞』一八八九年三月二九日）

このように、第一五席の末尾では、これまでの捨吉の話を読者に思い出させ、登場人物の年齢を整理している。次に「桃水子」が登場するのは最終回で、捨吉の回想が終わった後、その回想の物語が事実であること、そのほかの登場人物が、それぞれにふさわしい勸善懲惡的なその後を迎えたことを伝えている。

筆記者桃水痴史申す啞聾子峻吉氏が当日の身の上話は頗る面白くして聞事にてありしなり其味を減じ趣を失ひたる処偏に小生が筆の業と看客見許したまはん事を乞ふ尚其期間得たる処に據れば鉄藏佐七両人ハ其筋へ拘留の上毒殺の事ハ勿論其他の悪事を白状せしに？忽ち重き刑に処せられ、森田屋の後妻お初は大いに悔悟して身を退き又主人の清兵衛ハ日ならず江州に隠居し東京の分店ハ辞すると強て俊吉氏に譲り三嶽森田片桐松田各々一家の如く親しみ頻りに幸福を受くるとぞ（本日の挿絵にハ誤つて主人公俊吉氏の図を脱す）（「啞聾子」第三十席、『東京朝日新聞』一八八九年四月一七日）

もつとも、作者を想起させる語り手が、作中に登場し、自作の内容や登場人物について解説する趣向自体は、「新奇」ではない。安河内敬太『日本近代文学における作品内作者…作品、作品内読者との関わり』（九州大学博士論文（甲第14657号）学位授与二〇一九年五月）は、「近代以前からの長い歴史を持っている」し、「近代よりも寧ろ近世において一般的であった」として幕末明治期における諸例も紹介している。明治開化期の小新聞の書き手の多くが戯作者の流れを汲む以上、そのような趣向が「新聞の小説」に見られるのは当然である。先に引用したように、桃水は「私どもの先輩と認めて居たのは、仮名垣一派、即ち魯文氏を含め、柳塘、橋塘、胡蝶園、一筆庵等の諸氏と、高島藍水、爲永眞水、條野採菊、古川愧儡子、三品蘭溪の諸氏でありました」（「新聞小説の發育期」と語っており、「作品内作者」の趣向自体は、そうした戯作者に広く共有されていた技法の転用である

だろう。戯作者だけでなく、「啞囀子」発表当時の「世の学者といわれ識者の名ある人々」を代表するような坪内逍遙の「当世書生氣質」（一八八五〜八六）にも用いられている。

『朝日新聞』（一八七九年二月）掲載の「離集れんし  
合散連枝の後栄」も、次のような作者の言葉から始まる。

天地は一大劇場にて造物者を劇主となし（略）今説出すの一件の集散離合は種々に春の霞は秋の風夏の雲は冬の霜と移り換りて行末の連枝光栄る結局まで号を累ね編を積む長物語も浮草の根無し事に非ずして煩を省き実を摘み綴り了たる脚色声色其儘是は写せしなれば看客宜しく品評をと希ふて幕を開く茲は名に負ふ浪花津の中にも船場の淡路町堺筋の紙商に吉田屋万助といふ者ありけり（略）

（「離集れんし  
合散連枝の後栄」第一回、『大阪朝日新聞』一八七九年二月二十一日）

作者は、この「長物語」が「浮草の根無し事に非ずして煩を省き実を摘み綴り了たる脚色声色其儘是は写せしなれば」として、つくり話ではなく実話であることを述べている。作品の内容は、大阪船場の淡路町、紙問屋吉田屋万助の先妻の子竜太郎と、後妻の子カメ、竹之助の三人が万助の死後一家没落するが、それぞれ苦労を重ねる集散離合のすえ、めでたく立ち直って再会する物語である。大阪を中心に敦賀、米原、大津、西は津山あたりまでが舞台になっており、売春、すり、強盗とさまざまな事件が絡まるが、因果応報の結末となる点は「啞囀子」も同様で定型的である。作者は「根無し事に非ず」と言うが、どこまでが事実か確認するのは難しい。作者は不明であるが、当時の朝日では、戯作者流の文章が書けるのは、津田貞か波部主一か『大阪新報』から二月中旬に入社した岡野武平の三人であるが、岡野の入社時期から考えれば、津田か波部の可能性が高い。この「連枝の後栄」は、四月から大阪東区の寄席で「講談師猿楽が毎夜一席ずつ読みたてます」と「講談」として語られた記事もある。新聞の連載が講談となるのも、明治期の「新聞の小説」には、まま見られることで、先に述べたように「啞囀子」の各回が「席」になっているのは、いわばそれを先取りしているような趣向ということになる。

「作品内作者」の系譜から、あらためて「啞囀子」における「作品内作者」の工夫を考へるとき、そこに何らかの「新奇」があつたかどうかが問題になるが、「作品内作者」の系譜は、古典から現代に及び、その具体例も多様であるだけに、即答することは難しい。た

だ、「当世書生氣質」や「連枝の後栄」では、「作品内作者」は、あくまで物語世界の外から作中の物語について言及し、作中人物と直接交渉しないのに対し、「啞聾子」の場合は、「作品内作者」である「桃水子」が、作中人物の捨吉と直接に交渉する点には「新奇」の要素がある。また、「作品内作者」が物語世界の外にいる場合、物語自体は三人称客観的な視点から描かれるのに対し、「啞聾子」では、物語が捨吉の視点つまり一人称の「私」の視点からの告白として展開する点も「新奇」の要素になるだろう。一人称独白形式の作品としては、後年には、遺書という形式を用いた夏目漱石「こころ」（一九一四年）や太宰治や夢野久作などの作品があるが、スタイルの点では「啞聾子」は、その先駆になっている。ただし、それを文学的実験として評価していかどうかは微妙で、「席」という言葉に関係して述べたように、むしろ落語講談の語りや話芸の流用という可能性の方が大である。それでも、先に見たように「従来の小説が「或人より聞きえたるところを録し」と三人称視点を採ったのに対して、これは一人称視点を試みたものであり、その点では西欧の近代小説にしばしば見られる視点用法に合うもの」と述べる小池正胤のような評価もあり、その先駆性の評価のためには、より広範な調査と検討が必要となる。落語講談の流れを汲むのか、それとも「西欧の近代小説」の「視点用法」を意識したのか、結果的に、その両方を意識させる点も、本章の「はじめに」で、桃水の課題として想定した小新聞的な通俗小説の要請に応じる一方で大新聞の読者にも訴える新味を取り込むという課題と呼応しているようにも見える。

#### 4 おわりに

検討してきたように、「啞聾子」は、新聞紙条例など新聞をとりまく同時代の状況に加え、掲載紙『東京朝日新聞』の「大新聞」化の方向も多分に意識しつつ、小新聞的な通俗的小説の要請に応じる一方で大新聞の読者にも訴える新味を取り込むという課題に相応に応じている作品と評価できる。それは、桃水にとっても「新出発」を告げる作品と言つていいであろう。「啞聾子」以降、桃水は大正期まで『朝日新聞』を中心に「新聞の小説」を發表し続ける。『東京朝日新聞』の連載小説だけでも七十編近くに達し、一九一三年八月二十九日には、六〇〇回の連載となる「大石内蔵之助」（一九一五年四月二二日）の掲載も始まっている。同時代の新聞小説家と比べても、桃水は新聞小説作家として長い期間にわたって活躍したと言えよう。そうした新聞小説家としての桃水の活動と活躍は、『東京朝日新

『聞』第一作である「啞聾子」の成功が予言していたといえる。ここでの成功とは、小新聞的な通俗的小説の要請に応じる一方で大新聞の読者にも訴える新味を取り込むという課題に対し、それに応じる工夫や趣向を発想する力があり、「婉曲の筆」という筆力によって、相当程度に課題に応じた作品が書けているということである。また実際に「啞聾子」は掲載の終了後に単行本としても上梓されており、その点でも成功作だったと言える。

「啞聾子」の工夫や趣向として時事性の導入があること、また時事的な問題を「婉曲の筆」で描いていることは述べた通りである。その一例として、主人公の「耳と口の大罪」の意識を新聞紙条例下での新聞記者にも共有される自戒の問題として解釈した。しかし、そのような解釈のほかにも、「耳と口の大罪」の意識から自罰として聞かず語らずの状態だった人間が、新聞を通じて広く語るようになったという点を焦点化するなら、新聞によって広く語るといふ言論の自由を主張するような解釈も可能であろう。そうした解釈の幅は、桃水の「得意」の「筆」が「婉曲の筆」であることにも由来する。

「啞聾子」が成功作だったとして、「啞聾子」に見られた工夫や趣向が、その後どのように展開するのか、「婉曲の筆」が、どのように働いているのか、次作の「くされ縁」の検討に移りたい。

### 第三章「くされ縁」をめぐる

#### 1 はじめに

新聞小説家として出発した桃水は、二ヵ月後、次の作品「くされ縁」の執筆を始める。一八八九（明治二二）年六月一六日から八月一六日まで連載され、連載が始まる前日の六月一五日『東京朝日新聞』に、次の連載予告が掲載されている。

●新出の小説御披露 明日の紙上より引続き左の小説を掲ぐ

くされ縁 桃水痴史

目先を替へて今めかぬ世話物なり泪を以て主眼ともせず笑を以て目的ともせず平つたくお名前通りのものなり

（一八八九年六月一五日）

告知では「くされ縁」が世話物であることを明かしている。ここで同年『東京朝日新聞』に連載された「えにしの糸」（二月一四日―二月二四日）、「壺すみれ」（二月二六日―四月一四日）の告知にも注目してみよう。

●新出の小説 明後十三日の紙上より霞亭主人得意の麗筆に成れる左の小説を掲載す

えにしの糸 霞亭主人稿

えにしの糸ハ巧緻なる世話物なり清艶なる人情小説なり他の小説と共に愛着を冀ふ

（一八八九年二月一日）

●新出の小説 明後二六日刊行の紙上より朝霞隠士が心を籠めたる左の小説を掲載す

壺すみれ 朝霞隠士稿

世話物なり趣向をも文体をも聊か例とハ変換せりまづい旨いハ御玩味の上

（一八八九年二月二二日）

二作品とも世話物として紹介されている。作家の名前は霞亭主人、朝霞隠士となってい

るが、渡辺霞亭<sup>91</sup>の別号なので同一作家の作品である。それ以外にも「くされ縁」とほぼ同じ時期に連載を始めた「恋歌」（五月一日―七月六日）も渡辺霞亭の作品で世話物である。

●新出の小説 明十一日の紙上より霞亭主人得意の艶筆に成れる左の小説を掲載仕り候恋歌 霞亭主人稿

賑やかにて甘い酸い加味混交の世話物即ち麻酔剤のいたずら、貴女の落ちぶれ、絶念の恋歌、選挙争ひの修羅、因果の寄寓等より成立つたものなり（一八八九年五月一〇日）

一八八九年の『東京朝日新聞』において小説の連載告知は一四回掲載されるが、そのうち四作品が世話物として紹介されている。この四作品のうち三作品が渡辺霞亭である。桃水が入社した頃、渡辺霞亭は活発に新聞小説を連載していた。世話物は、人形浄瑠璃・歌舞伎などの近世演劇において一つのジャンルとして確立され、明治になると文芸用語として他の分野にも転用されるようになる。明治書院『日本古典文学大事典』には、「世話」は通俗の意で主に私事をいう。庶民社会で起こった心中・殺人など異常な出来事を扱いは。当代の俗世間の世態風俗を写すことを主眼とする」とあり、貴族や武家の世界を描く時代物に対し、市井の町人社会を描き、色恋と金にまつわる事件が焦点になることが多い。明治期の新聞においても、霞亭「えにしの糸」の広告にあったように「世話物なり清艶なる人情小説なり」とあったように、江戸の人情本の系統を引く「人情小説」として男女の色恋を描いた世話物の小説が読者に好まれた。「新聞の小説といわゝ有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の事をつゝらされば世にうれさるをいかにせん」という桃水の発言（一葉日記「若葉かけ」）は、「奸臣賊子の伝」が歌舞伎などの時代物に、「奸婦いん女の事跡の様の事」が世話物に対応しており、こうした発言からも世話物の小説を書く必

<sup>91</sup> 渡辺霞亭（一八六四―一九二六）は明治・大正時代の小説家、新聞記者、演劇評論家、そして蔵書家である。本名は勝だが、碧瑠璃園、緑園、黒法師、黒頭中、無名氏、春帆楼主人、哉乎翁、朝霞隠士など、多数の別号を持っている。名古屋生まれで名古屋の好生館に学び、一八八一年『岐阜日日新聞』文芸欄主任として入社する。その後、名古屋の『金城新報』編集長を務めた後、一八八七年に上京して『燈新聞』に転じ一八八八年、同紙が大阪朝日新聞社に買収され『東京朝日新聞』になると、『絵入自由新聞』に移るが、ほどなく復帰する。一八九〇年には『大阪朝日新聞』に招かれ、以来関西文壇の重鎮となる人物である。（朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社、一九九四年一〇月）

要があったことが知られる。もつとも、「くされ縁」の場合、桃水の意味で世話物を執筆したのか、あるいは新聞社側の希望で世話物を執筆したのかは、現時点では確認が困難である。ただし、「今めかぬ世話物」（当世流行のものではない世話物）で、しかも「泪を以て主眼ともせず笑を以て目的ともせず」という旧来一般的な世話物とも違い、「平つたくお名前通りのもの」という表現は、新聞で見なれている今風の世話物とは違い、旧来の世話物とも違う世話物という点で、何らかの「新奇」を期待させる惹句になっている。

『東京朝日新聞』に霞亭の世話物小説が多かったのは、それが読者に好まれたからであろう。桃水が「くされ縁」を「今めかぬ世話物」とし、「泪を以て主眼ともせず笑を以て目的ともせず平つたくお名前通りのもの」と告知したのは、霞亭とは違う「世話物」を読者に案内し、読者の関心を高める狙いがあったと考えられる。桃水が世話物を選択したのは、それが明治期の「新聞の小説」の主流である以上、書くことは避けられないという事情もあつたと考えられるが、広告文からは、その世話物を書くにあたって、多分に一般的な世話物に飽きた当時の読者を意識していたと言えるのではないだろうか。「くされ縁」の予告にある「今めかぬ世話物」で、かつ旧来の世話物のように「泪を以て主眼ともせず笑を以て目的ともせず」という世話物小説とは、どのようなものであろうか。作品内容について具体的に検討する前に、作品の特色として構成について確認しておく。

「くされ縁」は、二つの物語によって構成されている。二部構成の第一部の登場人物に關係する因縁が、第二部で描かれる因縁に深く影響を与えるという構成になっている。第一部では、清吉と琴治の恋と二人の悪縁について語られ、結末は、二人の心中で終わる。第二部では、駆け落ちした盛一とお蔭が、同じ病にかかったことから、実は二人は清吉と琴治の子供であり、お互い結ばれてはいけない關係である事が判明する。「平つたくお名前通りのもの」というように、「くされ縁」は、二部構成で「くされ縁」を描いている。以下、「くされ縁」を読み直すために小説内で登場する様々な「因縁」に注目して分析を進める。また二部構成との關係についても考察する。

## 2 第一部の「因縁」

「因縁」は、直接的な原因となる因と、その因を継続させて物事や出来事を生じさせる縁という語から成る仏語である。『阿含経』<sup>あしんきょう</sup>には「これある故ゆえにかれあり、これ起る故ゆえにかれ起る、これ無き故ゆえにかれ無く、これ滅する故ゆえにかれ滅す」とい

言葉がある。すべての存在はお互いに深く関りあいながら成立しており、完全に独立して存在しているものはないことを意味する。「くされ縁」の場合、因縁の始まりとしての「縁起」は、どのように設定されているだろうか。「縁起」を確認してみよう。その「縁起」は、以下の出会いから始まる。

今を距る四十年の昔嘉永年間の事とかや芝日蔭町の通り軒を並ぶる古着屋のあるが中にも取別けて老舗と聞えし一搦浅利屋清兵衛と云へる者ありしが家号の浅利と唱ふるにも似ず利を貪りて飽く事を知らず清しと呼ぶも名のみにて心ハ泥の如く濁り常に客の眼を眩して偽物を売与へ不義の利を得て営業とす

（「くされ縁」一回、『東京朝日新聞』一八八九年六月一六日）

「今を距る四十年の昔嘉永年間」（一八四八―五五年）とあるので、この「今」は小説発表の時点と重なる。五〇歳前後の読者なら一〇歳前後の頃で、年配の読者には実地に体験した時代ということになる。その嘉永の頃、芝日蔭町に清兵衛が営む、古着屋があった。先代の清兵衛は客をだまして利益を得る悪者で、店に訪れた薩摩藩の武士早川との争いで早川に殺される。当代の清兵衛もまた悪者であるが、妻は早逝し、大切な一人息子の清吉のために乳母として「源助町の裏長家うらながやに辻駕籠つちかじを家業とする儀人」の妻お北を雇う。乳母として清吉を育てていたお北は、腕白に育った清吉が出刃包丁で遊んでいたのを見とがめ、清吉が投げつけた包丁で死んでしまう。

安政二年となり清吉八十歳の悪戯盛り乳ハ離れても何くれとなく世話の焼ける事勝なれば今にお北ハ召使へり独子の習ひとて甘やかしたる清吉ハ我儘気随の湾伯者或日の事勝手元より磨すましたる出刃包丁を人の見ぬ間に持来たり柱障子を傷けて遊び居けるをお北が見認め（略）出刃包丁を取上げんとしたれど（略）清吉ハ大いに怒り（略）出刃包丁を取直しお北を目掛けて投付けしが狙ひハ違はず乳の下へグサと許り突立ちた

（「くされ縁」二一回、『東京朝日新聞』一八八九年六月一八日）

お北の夫である儀人は旅行中だったため、お北は病死として処理され、清吉の犯罪は闇に葬られる。清兵衛は、旧知の住職青峨和尚に清吉を預けるが、理由は罪の意識からでは

なく、「世間の悪評頻りなれば流石無残の清兵衛も少しく心弱わりけん身を思ひ子を思ひ如何ハせんと案じ」たからである。清吉が一五歳になった年の一二月、儀人が訪ねてきて、清兵衛と偶然会ったことを話す。清吉は、安政二年（一八五六）年に「十歳」だったので、場面は、文久元年（一八六一）年末ということになる。

お出なさいます清吉さまの親旦那「ナニ浅利屋の清兵衛が「マアお聞きなさいました私ハ吃驚致し何で此様な浅ましい姿におなりなさいました全体女房のお北ハと半分云はず清兵衛さまハ手を合はして私を拝みサア其お前の女房ハと云掛けちやア口籠り泣て許りお出でなさいましたが漸との事に思切り何の因果か忤めが産の母より恩の深いお北を手を掛け殺して仕舞つたと委しい容子を残らず話し夫れから以来ハ悪評が広まり追々家業も衰へた其弱り目に祟目で俄に私が煩ひ付きナニ通りの腫物だらうと打捨つて置く中に病氣ハ日に増し募るので或時医師に見せた処が質の悪い癩病だから所詮 養生ハ届くまいと云はれて(略)

（「くされ縁」四回、『東京朝日新聞』一八八九年六月二十日）

清兵衛はすべてを失い、病の床に臥せるといふ結末を迎える。清兵衛は、その悪業ゆえに、この病にかかったと読み取られ、そういうかたちで悪因果の「因縁」が描かれている。一方、全てのことを知り、やむを得ない事故であったと理解した儀人は、清心と改名した清吉と同居するが、またも清心のくだらないいたずらで命を奪われてしまう。清心（清吉）の悪戯によつて、親の清兵衛も乳母のお北も清心を赦したお北の夫の儀人も、いずれも命を落とす結果となり、まさに悪縁が描かれている。

青岬和尚の死後、上野の学寮に入った清心に、新たな因縁が生じる出来事が起こる。精清心は、ある夜、男たちに襲われていた芸者琴治の難を救う。

上野の山に沿ひ池に臨みて構へたる穴の稲荷の境内にて姿なまめく一人の婦人を二人の荒くれ男が手取り足取り輪姦んとて各々先を争ふ体に清心ハ我を忘れ辺近く立向ひしに彼等ハ人の来りしを知り威して邪魔を拂はんとや腰に指したる木刀を抜つれて競掛るコハ叶はじと清心ハ二三間逃げながらも(略)

（「くされ縁」六回、『東京朝日新聞』一八八九年六月二十二日）

お互いに魅かれることで学業に集中できなくなった清心は、学校からも追い出される。ここでは芸者琴治との出会いが、清心の悪因になっている。琴治は、清心の子を身ごもり、その後には尼になる。その琴治との話から、清心は、琴治がお北の娘であることを知る。

清心は、お北と儀人の夫婦を死なせた悪因であり、その結果、芸者になってしまった琴治が清心に不幸をもたらす悪因として描かれている。まさに「くされ縁」を示す関係である。二人の間には、双子の兄妹が生まれるが、清心は父と同じ病に罹る。一連の出来事が過去の因果であると考えた清心は、自殺を思い立つが、双子の将来を案じ、双子がある程度成長するまではと思いとどまる。清心と琴治の因縁は、最後には心中で結ばれる。

清吉が父親と同じ「癩病」になることは、この病が当時は遺伝病と信じられ、また明治期以降も「天刑病」とも呼ばれたように天の刑罰という病気観があったことと関わる。いずれも誤解と偏見であり、差別的な病気観である。しかし、そうした病気観が生きていた時代の中で、治療方法が見つからない病気に父子ともにかかる設定は、清兵衛は重なる悪業の結果、清心は二人の命を奪った罪の結果の天罰の表現になっている。

清吉が清心という僧になる点、琴治も尼になる点、清兵衛が過去の悪事を涙ながらに告白する点、清心と琴治が心中を決行する点など、本作が、「十六夜清心」こと河竹黙阿弥作『小袖曾我薊色縫』（初演一八五八年）を踏まえることは明らかである。清心と十六夜が心中し損ねる場面から始まる「十六夜清心」は、清心が清心のために百両の金を運んでいた十六夜の弟をそれと知らずに殺し、清心の死を信じて菩提を弔う十六夜を抱えるようになった白蓮が、実は清心と幼い頃に生き別れた兄であったというように、種々の「くされ縁」に満ちた世話を代表する作品である。小新聞の世話を讀むような読者には、おそらく周知の作品であり、「くされ縁」と「清吉」また「清心」という人物名から、ただちに「十六夜清心」が連想されても不思議ではない。とすれば、「くされ縁」は、積極的に旧来の「十六夜清心」という世話物の世界を借りる一方で、その世界に、幕末期の大店の崩壊、「遺伝病」、「学校」の追放など幕末維新期の要素を趣向として取り込み、悪因悪果の因縁（くされ縁）を描いている作品ということになる。

### 3 第二部の「因縁」と二部構成との関係

第二部の話の概要は次の通りである。

時代は明治一六年、若い書生姿の盛一という主人公が、坂丹後町の退職陸軍大佐大樟晋の家を訪ねる場面から始まる。盛一の叔父に当る大樟は、最初、青年の正体が分からずに怪しむが、上京する途中で荷物を盗まれたという盛一の話聞いて誤解も解け、叔父の家での下宿生活が始まる。叔父の家には、横浜の商館重役のお蔭が行儀見習いを兼ねて奉公していた。やがて恋しあうようになった二人に試練が訪れる。盛一は叔父の娘の秀子との結婚話があり、お蔭にも初浦（家がらみの知り合いで銀行員）との結婚が決まっていた。初浦との結婚で盛一との仲が終わることに耐えられないお蔭は、盛一に駆け落ちしてでも一緒にいたいという気持ちを明かす。

ついに駆け落ちを決行した二人であるが、盛一は不治の病に罹ってしまい、お蔭もその看病で体を壊してしまう。そんなときに遭遇した初浦の話から、将来の結婚に希望が灯された二人は、一旦それぞれの家に帰り、治療に専念することになるが、盛一の病気は治る様子がない。さらに、お蔭までも盛一と同じ病気になってしまう。お蔭と再会した初浦は二人の病を治すため旅に出る。旅行中、二人の出生の秘密を知ることになる。二人の病が遺伝病で、ともに清心と琴治の間に生まれた双子の兄妹であったことが判明する。しかし特効薬によって二人とも病が治り、盛一はもとの通り叔父の娘の秀子と、お蔭も婚約相手であった初浦と結婚する大団円となる。

以上のように、「くされ縁」の特色は、二部構成で悪因縁にまつわる二組の男女の物語を描く点にある。一回から二〇回は清吉と琴治の因縁が、二一回から五三回は盛一とお蔭の因縁が描かれている。ただし、第一部と第二部は、二組の男女によって悪因縁が二回繰り返されたという単純な反復構造にはなっていない。

第二部は、第一部の内容が因となって盛一とお蔭という兄妹が愛し合う結果になる悪因縁が描かれ、その点では、第一部と同じように悪因縁の「くされ縁」を描いた話になる。しかし、途中で終る第一部のように悪果のまま結ばれるのではなく、むしろ第一部とは対照的に、盛一とお蔭がともに死病のはずの「遺伝病」にかかるにもかかわらず、それが治癒するという幸福に加え、二人とも結婚すべき相手と結婚する幸福を描いて結ばれる。つまり、「くされ縁」を描くという点では、第一部と第二部は同じであるが、一連の話の結

びという点では対照的である。こうした対照的な世界を導入するために二部構成としたことが考えられる。その背景や理由をどう考えればいだろうか。

まず、第二部が用意された背景としては、この作品の連載時期との関係が考えられる。『東京朝日新聞』の創刊が大新聞に向けての「新出発」であったことは、すでに確認したが、「くされ縁」の連載時期は、それが紙面の拡大として実行された時期に重なる。

「くされ縁」の連載は一八八九(明治二二)年六月一六日から八月一六日までであるが、第二〇回(七月九日)の末尾には、「記者曰く是迄ハ前編とも申すべき話にて次回よりハ急に明治十六年の新なる世界と変わる其お積にて愛読を冀ふ」と「前編」という語で第一部の物語が終わったことを告知している。第二部の開始は七月一〇日である。この七月一〇日は、『東京朝日新聞』創刊記念日である。つまり、第一部の結びは、『東京朝日新聞』創刊一年目の最後の日になり、第二部の開始は、創刊一周年を祝う創刊記念日になる。偶然の一致だろうか。そのことを桃水が意識しなかったとは考えにくい。

この一周年時には、『東京朝日新聞』でも、たんに祝意を表するというだけでなく、具体的に紙面拡張というかたちで大新聞に向けての改革が行われた。

「くされ縁」第一部が連載されていた一八八九年六月末の三日間、『東京朝日新聞』は、紙面の第一面上段を用い、紙面の拡張を報じている。具体的には、「本社東京朝日新聞が今日迄に尽し来れる記事報道の如何に付てハ読者諸君既に御承知の所今更別段に申述べべき事も無之候」「一事に候就てハ右改題一周年期も七月一〇日と申す事にて最早数日の前に近づき候間、右を機会として今回其日取り繰り上げ聊か祝意と感謝の意とを表せんが為に来る七月二日より紙面を拡張して字数五千三百余字を増加し全国各新聞紙中第一番の紙幅となし刊行仕り候」「代価は従来の通り据置なり新たに増加する文字ハ都合五千三百余字にハ過ぎ申さず候」「尚来月日刊行の本紙にハ当込の添物として絵入本紙大の付録をも相添申候」などと報じている。七月二日には、通知通り紙面が拡張している。紙面は、「めさまし新聞」買収後にも拡張していたが、それをさらに縦横二・五センチずつ広げ、一行二〇字を二二字に改めた<sup>92</sup>。

この紙面拡張の影響で、「くされ縁」も一回あたりの字数が、約一三〇〇字から一五〇〇字余に増加している。具体的には、紙面が拡張した七月二日の第一四回から、第一部が終わる七月九日までは、それ以前よりも字数が多いことになる。

当初予定していた一回当たりの字数が、第一四回から一回あたり二〇〇字増えたせいで七月九日に第一部が終わったと考えるべきか、それとも途中で字数が変更になっても七月九日に第一部が終わったと考えるべきか、それを判断する具体的な根拠資料や記述があるわけではないが、七月一〇日が創刊記念日であることを考えれば、後者の可能性が高いと考えられる。創刊一周年を祝う新聞の側から見れば、不幸な結末を迎える「くされ縁」の第一部は、多少強引にでも七月一〇日以前には終わる必要があったのではないだろうか。

第一部と第二部の設定という二部構成までが、七月一〇日の創刊一周記念日によってもたらされたとまでは言えないにしても、二〇回と三三回という回数の違いがあり、しかも第二部の各回の字数が増えた分だけ、全体の分量としては第二部の比重が回数以上に大きくなっているのは、七月一〇日の創刊一周記念日であったん第一部を終了した影響があるように思われる。

この七月一〇日の創刊一周記念日を祝う雰囲気は、第一部と第二部の分量や掲載期間だけでなく、その内容にも微妙に影響している可能性がある。

第二部の趣向のポイントは、幼時に生き別れた双子の兄妹が、それと知らぬまま魅かれ合う点にある。これは兄弟というかたちではあるが、「十六夜清心」における清心と白蓮の趣向の変奏である。第二部でも「十六夜清心」の世界を借りつつ「因果」を表現している。しかし「十六夜清心」やその世界を借りた第一部と対照的であるのは、「十六夜清心」や第一部では、主人公の男女が、ともに不幸で悲惨な死を迎えるのに対し、第二部では主人公の男女が、「めでたしめでたし」とでもいうような大団円を迎えることである。第一部と第二部の「因縁」の中心にあるのは、親から子に続く「遺伝病」であるが、第二部では、特効薬によって、その「因縁」が断ち切られるという設定になっている。

つまり、「くされ縁」の第一部の幕末明治期の世界では、治癒が不可能で絶望的な病であった「遺伝病」が、第二部の明治中期（作品掲載時の現代）の世界では、特効薬という文明によって治癒し、「因縁」が断ち切られるという設定になっている。「十六夜清心」の世界を借りる点で「今めかぬ世話物」でありながら、明治という時代が可能にした特効薬を用いて救済を用意する点で「新奇」な要素を取り込んでいると言える。しかも、その「新奇」さは、「朝日」のように光り輝く近代や文明のすばらしさや未来への希望ともつながっている。そのような大団円は、桃水が「得意の婉曲の筆」で、小新聞から大新聞に向けて歩み始めた『東京朝日新聞』の「新出發」の一周年を祝うような印象もある。

このような二部構成が、連載当初からの桃水の意図であったのか、それとも連載の途中で創刊一周年を迎えたために急遽柔軟に対応したのか、現在のところ、そのいずれかを判断できる文献や資料については未詳であるが、いずれにしても新聞社側から見れば、旧来の世話を新聞向けにうまくアレンジした「新聞の小説」の書き手としての能力は確認できたことであろう。作中の男女関係が清心と琴治の間で完結する第一部が、「十六夜清心」を初期の『朝日新聞』など明治期の小新聞むけにアレンジした作風であるのに対し、盛一とお薦との関係に加え、盛一と叔父の娘秀子やお薦と初浦など、より複雑な人間模様を描き込む第二部は、特効薬や明治期の風俗描写など「新たな世界」（第二〇回末尾）を描こうとする点で、いくぶんか大新聞むけのアレンジになっている。

#### 4 おわりに

前作「啞聾子」の分析で確認したポイントの一つは、『東京朝日新聞』の「新聞の小説」家になった桃水の課題が、小新聞的な通俗的小説の要請に応じる一方で、大新聞の読者にも訴える新味を取り込むことにあったことであった。その課題に対し、「啞聾子」では、落語講談のスタイルを借りつつ当時の新聞をめぐる状況を「婉曲の筆」で表現するというかたちで応じていることを考察した。こうした課題は、個別の一作品だけの課題ではなく、この時期の桃水の「新聞の小説」の課題だったとすれば、「くされ縁」についても、この課題に対する同じような姿勢が見られるはずである。

右に見てきたように、「くされ縁」は、「十六夜清心」という当時の新聞読者なら誰でも知っているような世界を借りる点で小新聞的な通俗的小説の要請に応じている。また、特効薬の効果で悪因縁が断ち切られ、希望の未来が開かれるという点、明治期の学校や横浜という舞台や新風俗を積極的に取り入れて「新たな世界」を描く点で、大新聞の読者にも訴える新味を取り込もうとしていたと考えられる。

第二章の「啞聾子」の分析と第三章の「くされ縁」の分析を通して、桃水が直面していた「新聞の小説」の課題とその課題に対応した実作の性格が確認できたと考える。

なお、「くされ縁」における「因縁」話が、当時の小新聞的な通俗的小説の要請に対するきわめて有効な話柄であったことは、『大阪朝日新聞』（一八八九年六月一日―七月九日）連載の「悪因縁」からも知られる。「くされ縁」連載の二日前の『大阪朝日新聞』には、「編者半痴居士申す明日よりハ悪因縁といふ当編とハ反対で時代物ソウシ花やかな中に哀れな

意味のある面白い―但手前味噌―演劇風の小説を御覧に入れますから、其お心算で(略)「『大阪朝日新聞』一八八九年六月一四日」という「悪因縁」の連載告知がなされる。半痴居士とは「何桜彼桜銭世中」<sup>93</sup>など大阪の初期小新聞の「つづき物」作者として有名で、桃水とも旧知の宇田川文海のことである。「悪因縁」は、作者自身が「セキスピヤ氏院本中にて尤も傑作の名あるロミョージュリーの劇を翻案せるもの」<sup>94</sup>（「悪因縁」第二〇回）と典拠を明かしている。シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」を「悪因縁」に見立て、それをタイトルに選ぶこと自体、この話題が明治期の「新聞の小説」にとって、いかに魅力的であったかを示唆しよう。ただし、「ロミオとジュリエット」の「悪因縁」は、「十六夜清心」のような「悪因縁」のイメージとは違ったためか、原作の第二幕に当たる部分までをかなり忠実に描き終えた後、突然中絶している。連載中断の真相は不明であるが、典拠があり、比較的忠実に翻案してきている以上、中絶の理由は、作品それ自体の展開に悩んだということではないだろう。読者側が「悪因縁」と聞いて期待する物語とは違い、不人氣だったという可能性も考えられる。ちなみに、代わって連載を開始した「烈女勝子伝」の執筆のさなか、文海は、ある詐欺事件に関係して新聞社を去ることになる<sup>95</sup>。あるいは、中絶の理由は、翻案そのものと関係するかも知れない。文海の語学力について坪内逍遙は「宇田川氏の翻案の如きも、原訳者は別にあるらしく、随つて原作と比べると、翻案は、ほんの荒筋を移したゞけのものになつてゐぬ」と評している<sup>96</sup>。中絶の理由は不明であるが、それでもロミオとジュリエット」を「悪因縁」という題で翻案する点には、当時の小新聞的な通俗的小説に対する読者の期待に応じようとする要素が絡む可能性は小さくないだろう。

なお、読者の期待については、「くされ縁」にも、それを窺わせる直接的な表現が見られる。物語が完結した第五三回の最後の部分に、「記者桃水」の発言として、次のような文章が載せられている。

<sup>93</sup> 「何桜彼桜銭世中」はシェイクスピアの『ヴェニス商人』を柳亭種彦のスタイルにならって歌舞伎の台本風に翻案したもので、同作は最初、『大阪朝日新聞』で連載された小説である。

（近藤弘幸「文明未開」と「原典翻案」…坪内逍遙の宇田川文海評価と日本のシェイクスピア受容」『人文研紀要』八八号（中央大学人文科学研究所、二〇一七年）、三〇頁）

<sup>94</sup> 『大阪朝日新聞』一八八九年七月九日、第三面

<sup>95</sup> 近藤弘幸、前掲論文、三五頁

<sup>96</sup> 近藤弘幸、前掲論文、一六一―一七頁

記者桃水白す本編ハ都て實事にして記者が空想に成れる通常小説の類に非ず唯編中間係ある人々の求めに因り氏名に聊か變更を加へたるのみ然れば随つて聞き随つて記るし中にハ初めに記載を許諾し後故あつて拒絶せし人も少なからず故に節の面白からぬ所もあれど全く事情の已むを得ざるに因れり伏て願ふ看客此意を諒せられん事を

(「くされ縁」五三回、『東京朝日新聞』一八八九年八月一六日)

「本編ハ都て實事にして記者が空想に成れる通常小説の類に非ず」というのは、まずはこう読んでほしいという作者の期待であろう。すなわち、この小説は、すべて実際にあつたことであり、作者の空想による通常の小説ではないから、そのようなものとして読んでくれ、というのは、作者の「看客」(読者)に対する期待である。しかし、「十六夜清心」を世界にしていることや、「遺伝病」である「癩病」が、特效薬で治癒するという設定など、すべて実際にあつたこととは信じにくい。事実を下敷きにしている要素があるとしても、「都て實事」というのは、明らかに事実に反する。にもかかわらず、「都て實事」と付言するのは、それが作者の期待である以前に、読者の期待であるからであろう。「通常小説の類」ではない「都て實事」であるような小説という「實事」への拘泥は、事実の客観的な報道という大新聞の本来的な使命とも通じており、小説は、その「實事」を「婉曲の筆」で方言する手段ということになる。「實事」の「婉曲」表現としての「新聞の小説」という点も、大新聞の読者にも訴える新味の一要素として捉えておいていいかも知れない。この要素は、次章の「海王丸」の検討で、さらに問題になる。

## 第四章 「海王丸」論——素材と連載時期について

### 1 はじめに

半井桃水の「海王丸」<sup>97</sup>は、明治三二（一八八九）年一月二六日から二月二九日まで『東京朝日新聞』に連載された小説である<sup>98</sup>。連載開始三日前には、次のような「予告」が出された。

○新出の小説 次号より引き続き掲載する小説ハ

海王丸 桃水痴史

騙盗の大仕掛を以て土台となしたる一種特別新製の因果小説なり

（『東京朝日新聞』一八八九年一月二三日）

この「予告」においても「一種特別新製の因果小説」と、「一種特別新制」という要素と「くされ縁」など旧来の世話物に多い「因果」という要素の両方がともに惹句になっていることに注目しておきたい。それは、ここまで再三確認してきたように、『東京朝日新聞』の「新聞の小説」作家となった桃水には、小新聞的な通俗的小説の要請に応じる一方で、大新聞の読者にも訴える新味を取り込むという課題があり、「因果」と「一種特別新制」という性格は、その課題に応じるために不可欠な二つの要素と考えられるからである。「因果」については、第三章の「くされ縁」でも確認したところなので、ある程度は予測される。したがって、ここで問題になるのは「一種特別新制」というのが、どのような性格のものであるかということであろう。

結論を先に述べておけば、「一種特別新制」には「實事」の表現という性格が含まれていると考える。第三章の最後に確認したように「因果小説」でもある「くされ縁」の連載未

<sup>97</sup> 「海王丸」（カギ括弧付）は小説のタイトルを表し、海王丸（カギ括弧なし）は小説に登場する汽船名をしている。同書は国立国会図書館デジタルコレクション (<http://di.ndl.go.jp/>) でインターネット観覧が可能である。新聞連載と単行本で、新聞連載の時は毎回添えていた挿絵の有無以外に本文に大きな異同はない。また本論文の研究対象作品の中、「啞聾子」「くされ縁」を除いて国立国会図書館デジタルコレクションでインターネット観覧が可能である。

<sup>98</sup> 「海王丸」は秋葉園主人の小説「乙女草」（一〇月二六日―十一月二三日）に続いて連載された。

尾で作者が強調したのは、「本編ハ都て實事にして記者が空想に成れる通常小説の類に非ず」という「實事」という前提であった。連載の末尾に、わざわざそのような付言をするということは、「實事」を「婉曲の筆」で表現することが作品の「新奇」や新味であり、「新聞の小説」の評価や宣伝としても機能するという意識が桃水にあったと考えられる。本章では、「一種特別新制」としての「實事」の撰取と「婉曲」的表現としての「新聞の小説」という問題意識から、作品の内容を検討していきたい。

あらずじを簡単に紹介しておく、世界無比の汽船・海王丸の沈没によって多くの人や会社が莫大な損害を受け、多額の保険金を支払うことになった保険会社が、次々と倒産するなか、唯一の生存者であった瀧野清作が、海王丸沈没の真相を追及し、事故に絡む陰謀を突き止めるという物語である。毎回挿絵があり、全三〇回で完結した。

桃水が「海王丸」以前に『東京朝日新聞』に掲載した作品は、「啞豊子」、「くされ縁」、寄木のお茶箱（分担）、「うちわ車」（分担）、「小町奴」になる。一八八八年七月一〇日の『東京朝日新聞』創刊以来、同紙には小説が掲載され続けた。当時の新聞は、連載小説の（読者受け）が売り上げに大きく影響したことから、『東京朝日新聞』も諸新聞に対する優位性を確保するため、連載小説には相当の力を入れていた。「海王丸」が連載された一八八九年の『東京朝日新聞』の連載小説は、次のとおりである<sup>99</sup>。

作品名	作家	連載期間（連載回数）
阿姑麻 <sup>あこま</sup>	霞亭主人（渡辺霞亭）	二月一日—二月一三日（一〇） <sup>100</sup>
写真	春泉居士	二月三日—三月九日（三二） <sup>101</sup>
えにしの糸	霞亭主人	二月一四日—二月二四日（一〇）
壺すみれ	朝霞隠士（渡辺霞亭）	二月二六日—四月一四日（四〇）

<sup>99</sup> 朝日新聞百年史編『朝日新聞社史資料編』（朝日新聞社、一九九五年一月）、二三四—二三五頁。表は作品名・作家名（括弧内は姓）・掲載期間・回数（括弧内）の順に示している。ただし、この目録は実際の新聞紙と対照してみると、錯誤がある。

<sup>100</sup> 第二回からは、朝霞隠士と改名している。

<sup>101</sup> 高木健夫『新聞小説史年表』（国書刊行会、一九八七年五月、四六頁）や前掲『朝日新聞社史資料編』によると、連載回数は「三十」になっているが、実際は「三一」である。二月二〇日の見出しが、本来「第十六回」であるべきところ、「第十五回」になっていることが原因だと考えられる。前掲『朝日新聞社史資料編』で連載回数を誤っている連載小説は、高木健夫『新聞小説史年表』においても同じく誤差が発生している。

啞 <small>う</small> 子	桃水痴史（半井桃水）	三月一〇日—四月一七日（三一）	102
むらさき	即真居士（小宮山天香）	四月一六日—五月一四日（二五）	
双飛燕	花々亭香夢・春泉居士	四月一八日—五月一〇日（二〇）	
恋歌	霞亭主人	五月一日—七月六日（四九）	103
小夜嵐	香夢小史	五月一五日—五月一七日（三）	
皐 <small>さつき</small> 月闇	桂華山人	五月一八日—六月一五日（二五）	
くされ縁	桃水痴史	六月一六日—八月一六日（五三）	
寄木のお茶箱	桃水痴史、香夢小史、 霞亭主人、滝山人、即真居士	七月三日—七月二日（九）	104
こゝろづくし	桂華山人	七月七日—八月四日（二五）	
うちわ車	滝山人、緑雨生、 霞亭主人、桃水痴史、 香夢小史、桂華山人	七月二〇日—七月三一日（一〇）	
残月	霞亭主人	八月六日—九月三日（二五）	
游女尾花	桂華山人	八月一七日—九月一四日（二五）	
小町奴	桃水（半井桃水）	九月四日—一〇月一五日（三五）	
萩散る夕	霞亭主人	九月一五日—一月二五日（三三）	
冬至神楽	桂華山人	一〇月一六日—十一月一四日（二五）	
乙女草	秋葉園主人	一〇月二六日—十一月二三日（二五）	
むらしぐれ	鳩の屋主人	十一月一五日—十一月二〇日（五）	
小夜千鳥	霞亭主人	十一月二一日—翌年一月一九日（四七）	

<sup>102</sup> 前掲『朝日新聞社史 資料編』では「啞う子」の連載回数を「三十」と表記しているが、実際は「三一」である。おそらく、第一回に当たる三月一〇日の連載が「発端」と記されていることと関係していると思われる。つまり、第二回から「一席」と記され、最終回に当たる四月一七日の連載が「三〇席」と記されていることが、連載回数に誤差が生じた原因と考えられる。

<sup>103</sup> 前掲『朝日新聞社史 資料編』によると、連載回数は「四九」になっているが、実際は「五十」である。紙面上では、「第二十章」で構成され、各章は「上・中・下」に分けて連載された。

<sup>104</sup> 前掲『朝日新聞社史 資料編』によると、連載期間および回数は「七月二日—七月二二日（一〇）」「となっているが、七月三日の『東京朝日新聞』には、「寄木のお茶箱（其一） 滑稽（二）桃水痴史」という題名で連載を開始している。

渡辺霞亭には及ばないが、桃水も多作である。入社一年目からの多作ぶりは、主筆の天香の期待をうかがわせ、相応の実力を新聞社から認められていたと言える。その背景には、読者に面白く読ませるための様々な工夫があった。それについては第二章や第三章で検討したところだが、ほかにも復讐ものと恋愛ものの組み合わせ（「小町奴」など、「新聞の小説」執筆において桃水なりの努力を尽くしている。

とりわけ「海王丸」の場合は、それまでの「啞聾子」・「くされ縁」・「小町奴」とは異なり、主人公清作による復讐譚にミステリーの要素を加えることで、小説の展開に大きな変化を与えている。ミステリーの要素とは、「火薬劇薬等の船積をなしたる事」がない海王丸が瞬間的に沈没した原因が謎であり、その謎の究明ということである。物語は、海王丸の沈没から始まり、その原因を究明し、後日談で完結する。船の沈没という事件は、小説における最も重要な要素の一つである。「海王丸」における船の沈没事件について言及した先行研究はない。もつとも、「海王丸」に関する先行研究がほとんどなく、草薙聡志が小説の梗概とともに簡単に言及している程度である。

（略）連載途中で読者には真相がわかっているとはいえ、そして証拠の品が外国の新聞と荷箱だけという弱さがあるとはいえ、探偵小説の裏切れさながらの効果的な結びである。「特別新制の因果小説」という看板に背いてはいないだろう<sup>105</sup>。

先に見たように、桃水は入社一年目から小説を書き続ける。その桃水が、小説の素材をどのように見出し、「海王丸」の場合であれば「特別新制の因果小説」として仕立てているのか、作品の下敷きになった「實事」との関係を明らかにしたうえで、連載の時期との関係性についても検討する。

<sup>105</sup> 草薙聡志「半井桃水 小説記者の時代（2） 新聞小説と文学的小説」『朝日総研リポート

## 2 明治期日本における海難事故・事件

一八六九(明治二年)、アメリカの太平洋郵船会社(パシフィック・メール・スチームシップ)がサンフランシスコから横浜を經由して清国に至る航路を開設した。サンフランシスコから横浜までを二〇日で、横浜から清国までを六日で結んだ。一八七一年には明治政府が海洋調査事業を開始し、一八七五年には横浜で日本初のヨットレースが開催された。さらに、一八八二年には上野動物園に日本初の水族館「観魚室」うをのぞきが設置されるなど、明治期日本の海洋・海事には目まぐるしい動きがあった。

海難事故としては、一八六八年六月二八日、奥羽諸藩に兵器を売り込むため東北に向けて航行していたプロイセンの商船が暴風雨で難破する事故が起きている。また一八七二年には、横浜港に停泊中のアメリカ船で火事が発生し乗客約三〇〇人のうち十余人が死亡、貨物の大半を焼失するという事故も起こった。こうした事故は新聞でも報道されている。例えば、一八七〇年一月二四日、浦賀水道でイギリス船「ボンベイ」がアメリカ軍艦「オナイダ」に衝突し、「オナイダ」が沈没した事故について、同年三月一三日の『もしほ草』は「英船と衝突して米艦浦賀沖で沈没」という見出しで報じている。

明治期の日本で発生した海難事故や事件のうち、「海王丸」に描かれたような社会的影響が大きかった船舶の沈没の例をいくつか取りあげてみる。「海王丸」連載(一八八九年)以前の主要な沈没事故には次のようなものがある<sup>106</sup>。

### ① 一八七四年三月二〇日のニール号沈没事件

フランスの蒸気船「ニール号」が伊豆半島妻良沖で暴風雨により沈没し、乗員九〇余人のうち生存者はわずか四人だった。同船は日本政府がウィーン万国博覧会に出品した美術工芸品、工業品などを日本に持ち帰るため満載していたが、これらの物品も失われた。遭難後約一週間を経て初めてニール号沈没事件が新聞記事で報じられた。

#### 「仏国船伊豆沖に沈没」

伊豆の国より来状に云く、本月二十日の夜同国妻良にて(フランス)船一艘沈没せり其乗組のフランス人一兩名上陸して、頻りに何か申立れども、言語さらに通ぜず、只難船

<sup>106</sup> 日外アソシエーツ編集部編『海洋・海事事典——トピックス古代 二〇一四』(日外アソシエーツ、二〇一五年一月)を参照し整理した。

人の趣なれば、早速足柄県へ届出たれども、是又通事なきを以て情実細かに分かれざれども、乗込の者多分は溺死せしならん、可憐の至りなり、且其船は蒸気なりしや、帆前なりしやも慥には知るべからずとかや。総て海辺を管轄する諸県には、訳官一員ぐらひは御備ありとも何ならんか、爰に該県庁よりの届書を録す。

〔東京日日新聞〕一八七四年三月二十八日

ニール号は、三月一三日に香港を出帆し、横浜に到達する直前に遭難し沈没したのであった。真夜中で暴風雨のために視界が十分に確保できず、伊豆沖の入間村と妻良村字吉田の中間点の岬にある白根の暗礁、横浜より七〇マイルの地点で沈没した。荷物の引揚げ作業などの続報もある。

「沈没した佛国船の荷物引き上げ」

去年の春、伊豆の妻良<sup>メラ</sup>で海中へ沈んだ<sup>フランス</sup>法国の蒸気船ニール号へ積込んで有た荷物を引揚げる事を、当月二日から取り掛りに成りましたが、水練の上手な者を選んで水底へ潜込んで、陶器や反物の入つて居る箱をいろいろ引上げたるよしに、先達て正院へ届けたとやらにて、其掛りのお役人様が検査に出向れたと風聞なり。此様子にては追ひく／＼残らず引上に成りませうと申すこと

〔東京日日新聞〕一八七四年五月一日

記事には五月二日に荷物の引揚げ作業が開始されたが、はかばかしい成果はあがらなかつたとある。

②一八七五年一月二五日の「大阪丸」「名古屋丸」衝突事件

周防灘で「大阪丸」と「名古屋丸」が衝突し、「大阪丸」が沈没、二四人が死亡する事件が起きた。この事件と関連して次のような新聞記事が掲載されている。

「陸軍運送船沈没」

此ごろ海軍の大阪丸と云ふ蒸気船が九州辺の尤も名高い国から、合戦の時に尤も入用なる品物をいろ／＼多く積み入れて出帆せしに、一昨二五日夕八時二十分ごろ、周防洋に

て名古屋丸（元ゴールデンエーヂ）と云ふ三菱蒸気郵船に突き当りて、惜しむべし陸軍の荷物は船と共にぶぶくくと沈没して仕舞たと申す電報が来たと申します。（略）

（『東京日日新聞』一八七五年二月二十八日）

当時の日本では、この海難事故を審判する法規がなく、翌年二月八日に、法務局は海軍省と内務省の要請を受けて臨時裁判所規則を制定し、大審院に臨時裁判所を開設して裁判が行われた。

### ③ 一八八六年一〇月二四日のノルマントン号事件

和歌山県の沖合でノルマントン号が沈没した。イギリス人乗務員は全員脱出して無事だったのに対し、日本人乗客は全員死亡した。イギリス神戸領事による海難審判ではドレーク船長の過失責任は問われず、無罪放免となった。この判決に当時の世論が強く反発し、同年一二月に行われたイギリス横浜領事による刑事裁判では、船長に禁錮刑三か月の有罪判決が下された。

これらの海難事故や事件のなかで最も世間を騒がしたのは、一八八六年のノルマントン号事件である。ノルマントン号事件は、イギリスを相手とする国際問題であるという点でも、横浜から乗船した日本人船客二五人（うち女性五人）全員が亡くなった点でも、きわめて大きな事件であった。一般的に大きなニュースとなる海難事故の中でも、ノルマントン号の沈没事件は、ひととき大きく報じられた。その背景には、死者の全員が日本人であること、遭難時の日本人乗客への対応、事故後の裁判結果などの要素がある<sup>107</sup>。

### 3 ノルマントン号事件と「海王丸」

一八八六（明治十九）年一〇月三〇日の『時事新報』は、「英船沈没（神戸一〇月二十八日午後特発）去る土曜日（二三日）、横浜出発の英国汽船ノルマントン号は紀州大島沖にて沈没し、乗組人中十四名だけ助かり、余は皆溺死せり」と電報記事でノルマントン号事件を

<sup>107</sup> 日本人乗客が置かれていた状況については、事件発生から一か月後の『大阪朝日新聞』に詳しい解説記事がある。これによると、日本船よりも外国船の方が安い船賃を適用していた。横浜・神戸間の船賃を比べると、日本郵船の二等は四円だが、外国定期船の二等は三円七〇銭であった。しかし、これらの外国船はほとんど貨物船で、客室の設備もなく、ひどい扱いだったという。

報じている<sup>108</sup>。同日の『内外新報』も「ノルマントン紀州沖に難破 英人船長洋人乗客と共に逃れ 日本人二十五名悉く取残されて溺死」という見出しで沈没の記事を掲載している。

神戸港居留地英七番コーエンス商館の取扱ひに係る英汽船ノルマントン号は、去二三日午後三時神戸へ向け横浜を開帆せしが、日本の乗客二五名其他雜貨を搭載して航海中其翌二四日は朝より雨降り、午後に至り風暴れ波高く、夜に入りては暗黒にて咫尺を弁ずる能はず、進航頗る困難なりしが、同夜八時過ぎ凶らずも紀州大島の東燈台鹿島と云ふ処の暗礁に乗上げたれば、船長ジラーク氏を始め乗組員一同大に驚き、種々機関を操りて漸く船体を礁上より引下すことを得たれども最初礁に触れたる時、船の横腹に大なる突き傷を生じたれば、是より汐船中に衝き入りて、見る／＼沈没すべき有様なれば、乗組一同は上を下へと騒動し叫喚大叫喚実にも目も当てられぬ許なり。(略)扱て先に遁がれしジラーク氏を始め洋人、支那人等は、上陸のうへ和歌山県の警察署に至り此の旨を届け、同署より巡查附添のうへ一昨夜午後七時三十分には神戸へ着し、一旦兵庫県の警察署に交付のうへ、居留地の英国領事館へ引渡したりと云ふ。又能野の漁船にて救助せし洋人四名は、一昨日午後二時過ぎ神戸の字メリケン波止場に着き、夫より魚夫は件の洋人四名を引て兵庫県の水上警察署へ訴へ出でたるに付、是亦直ちに英国領事館へ引渡したり。(略)

『内外新報』一八八六年一〇月三〇日)

さらに、一一月三日の『東京日日新聞』は、「ノルマントン号沈没に関する審問開始」という見出しのもと、イギリス領事館で事件関係者に対する審問が開始されたことを報じている。このように、諸新聞は事件の発生と経過を次々と記事にしていったが、こうした事件報道に不満も抱く読者もいた。一一月六日の『時事新報』には、大鳥圭介による次のような寄書が掲載されている。

(略)もし欧米諸国などにて、かゝる災難の起り候節は、新聞紙は号外を摺出すか、又は通例の紙上なれば巨大の頭字を以て掲記し世人の注意をよび起こし、社会の公論を

<sup>108</sup> 明治ニュース事典編纂委員会編『明治ニュース事典 第三卷』(毎日コミュニケーションズ、一九八四年一月)、六三〇頁

促がし後來の鑑誡となす事なるを、我國の無情冷淡卑屈の新聞紙は、かゝる非常なる出来事を以て尋常一般の事と見做し、向岸の火災視するは遺憾に堪えず、また切齒に堪えず、同胞二十三名非常の死、何とも言語に述べ難く候、何卒事實御穿鑿の上、世上へ公布し社会の公論を促したく候、頓首。十一月一日 大鳥圭介

大鳥は「此重大事件に新聞はノホホン 外国なら号外も出す」と、日本人乗客だけが溺死した「重大事件」に対する新聞報道のあり方が「無情冷淡」だと怒りを表している。

一八八二年に『時事新報』を創刊し、当初から条約改正の必要を説いていた福沢諭吉は、ノルマントン号事件に関する数編の論説を發表している。そのうち、十一月一五日の『時事新報』では、「ノルマントン号沈没事件を如何せん」という見出しで、船長以下、乗組員の帰国を差し止めて事件の真相を明らかにするべきだと主張した。日本人だけが溺死したことに對する船長の弁明に、「死人に口なし、其間に何様の事情ありしやも知る可らず」と不信感を示し、「まことに不可思議至極の事表にて、死者もし耳あればこれを聞いて何と思ふべきや」と強く非難している。その他、十一月一日の『郵便報知新聞』に掲載された投書には、

船長は日本人を乗客とみなさず、一種の荷物として取りあつたにすぎない。周施（あつ施）屋は、外国の貨物船と交渉し、甲板上を一坪何円で買いとり、荷物の資格で旅客を積み入れる。船主は旅客に飲食物をあたえない。旅客は、こもつづみと牛豚との間にある、一種の荷物として取りあつかわれる。

とあり、船長が日本人乗客に對して道義的責任を果たさなかつた背景や事情に言及している。生存した乗組員は裁判にかけられたが、一二月に行われたイギリス横浜領事による刑事裁判では、船長に禁錮刑三か月の有罪判決が下された以外は全員無罪となった。判決の軽さに世間は不平等条約の悲哀を痛感し、領事裁判権撤廃を望む世論は日増しに強まっていた。

そうした動きと相まって、事件は新聞報道を超えた広がりを見せていく。当時の諸新聞には、沈没事件の講談会・法律会の案内や事件を伝える書籍の広告が見られる。さらに、

諸新聞社が義損募金運動を行い<sup>109</sup>、四代目歌川国政が事件を錦絵にするなど、社会全般に大きな影響を与えた。その影響は文化芸術の分野にも及び、一八八七年一〇月には新富座で古河新水の『三府五港写幻灯』<sup>さんぷごこうつげんとう</sup>が上演された。また、作詞・作曲者は不明だが、五九番まである長い「ノルマントン号沈没の歌」も作られた<sup>110</sup>。

このように、ノルマントン号事件は当時の社会にとって重大事件であり、多方面に大きな影響を残した。事件が発生した一八八六年、桃水は『大阪朝日新聞』の特派員として朝鮮に滞在し、記事を送り続けていたため、事件を知らなかった可能性もある。しかし、特派員として新聞社に関わっていた桃水が、これほどまで世間の注目を集めた事件について全く知らなかったとは考えにくい。

小説は、「海王丸が沈没して生存者はない」という電報が、帝国汽船会社神戸支店から東京本店に届くところから始まる。

汽船海王丸本日午前三時頃紀州沖航海中沈没せり船客一人も助からず支店よりハ実地探検の為め取敢えず他の汽船を差向けたれど沈没の原因少しも分からず

右の電報ハ帝国汽船会社神戸支店より東京本店へ達したるものにて各新聞社通信員が本社へ当て陸続通報せし處も概ね大同小異なりしなり此不幸なる出来事ハ忽ち世上一般の噂となりて人々相集る時ハ必ず先づ海王丸を唱ふ夫れ此の如くなるもの蓋し調あり  
〔「海王丸」第一回、『東京朝日新聞』一八八九年一月二六日〕

悲報は新聞報道によって直ちに世間の知るところとなり、「帝国汽船会社が欧米諸州航路拡張の為め、前年特に仏国のある有名なる造船会社へ注文した世界無比の汽船」である海王丸の沈没により、多くの人や会社が破産・倒産する大打撃を受ける。帝国汽船会社は海王丸が突然沈没した原因を調査し、その結果をまとめて報告した。

<sup>109</sup> このとき東京では、『東京日日新聞』・『毎日新聞』・『朝野新聞』・『郵便報知新聞』・『時事新報』の新聞社が連名で、被害者遺族のための義援金募集を行った。

<sup>110</sup> 小笠原幹夫「ノルマントン号沈没の芝居」『演劇学』第二九号（早稲田大学演劇学会、一九八八年三月）、八〇頁。小笠原によると、初出は『歌舞伎新報』八一三―八四一号、一八八七年八月―一八八七年十一月。

汽船海王丸が出帆の当日气象台の天気予報ハ北海道の一区を除き其他ハ東乃至南方の風邪改正と降りて晴雨針は最上の温和を刺せり香月宗沿岸に住める一二の両氏は同日午前三時定航線路を進行する海王丸を見たりとげ他の漁師ハ不意に轟然たる響を聞いて其儘船体を見失へりと云ふ又本社管船課雇外国人の实地探検書に依れば毫も線路を失ひたるの跡なく万一機関の破裂出火の災害に逢ひしものとするも号笛を鳴らして助けを呼ぶの違あるべきに沿岸の漁師一人も号笛を聞きし者ある事なし且つ東京本店横浜支店に於いても火薬劇薬等の船積をなした事なく探検の為派遣せる小蒸気船ハ七個の死体と幾千の行李を拾上げたれども一として破船の原因を知るに足らず云々

〔海王丸〕第一回、『東京朝日新聞』一八八九年一月二六日

ノルマントン号沈没を報じた新聞記事と比較すると、まず共通点として、海王丸の沈没場所がノルマントン号と同じ「紀州沖」（和歌山県沖）であること、沈没したのが深夜であることが指摘できる。さらに、両者の出港地と寄港地も一致している。小説に登場する清作と藤松連蔵の会話から、海王丸が神戸へ向かう予定であることが分かる。

（連蔵） 実ハ此頃外国人に売込む生糸にハ随分品質の悪いものを交合はせて眼前の利を計らうといふ（略）今度神戸のスプリング商店から注文のあつたを幸ひ明日出帆の海王丸で送りたいと思が今度ハ別段荷改めをする筈だから御苦労ながら一週間許り神戸へ行つてハ賞はれまいか

（清作） 私でお間に合ふなら

（連蔵） 間に合ふ処ぢやアない夫にお前も久々で故郷なつかしうもあらうし親父さんの墓なども彼儘にしちやア置かれまいから石碑も建てたり法事も仕たりする丈の事ハして安心するが好い（略）

〔海王丸〕第四回、『東京朝日新聞』一八八九年一月二九日

出港地については、藤松の商店が横浜・太田町にあることを考えると、横浜とみてほぼ間違いはないだろう。ノルマントン号も横浜を出港し、神戸に向かう途中だった<sup>111</sup>。こ

<sup>111</sup> 宮永孝「検証 ノルマントン号事件」『社会志林』六三（一）（法政大学社会学部学会、二〇一六年七月）、九九頁。ノルマントン号は一八八六年夏頃日本に渡航し、内海（うちうみ）を往

のように、ノルマントン号と海王丸は、沈没場所が紀州和歌山沖であること、沈没したのが深夜であること、出港地と帰港地が横浜と神戸であること、そしていずれも商船であることで共通している。また、小説中の海王丸沈没の報道も、一八八六年のノルマントン号事件のそれを連想させる。

此後数十日間各新聞社へ随つて探り随つて記し遭難者の姓名履歴荷主と保険会社の間で起れる損害賠償の事其他商業上の変動救恤損金の募集海上探検者の成績報告等をもつて日々殆んど全紙の半面を充たしたれども（略）

〔海王丸〕第一回、『東京朝日新聞』一八八九年一月二六日）

一方で、両者には相違点も見られる。ノルマントン号が横浜を出港したのは午後三時頃で、当初は穏やかな航海だったが、翌朝になると雨が降り出し、午後から夜にかけては風浪が高くなった。対する海王丸は、航行中多少曇ってはいたものの、それほど悪天候ではなかった。さらに、沈没した状況も異なっている。ノルマントン号は岩礁に船腹を打ちつけられ、そのまま岩上を通過したため、船体は裂き割られるような恰好になった。ノルマントン号乗組員の証言によると、船が岩礁と接触してから沈没まで、五〇分から一時間ないしは一時間二〇分ほどの時間があつたといふ<sup>112</sup>。

これに対して、海王丸の沈没はあまりにも突然で、まるで船体が爆発したかのようである。「海王丸」の第五回に、藤松から生糸を運ぶよう命じられた清作が海王丸に乗船する場面がある。清作が甲板で景色を眺めていると、突然耳を裂くような大きな音がして船体が揺れ、清作は一瞬のうちに船の端まで撥ね飛ばされた。

（略）帯引めて甲板へ出しに今や月ハ雲と烟に鎖されて影朦朧たるが故に山ハ尚見えざれど立つ浪の畝り愈々少きをもて早地方近く進行きたるを知れり（略）時の鐘ハ早くも三時を報じたり秋の夜明難きも今一二時間経バ東方白らみ渡るべく而して船の神戸に入るハ遅くも午前七時との予定なればそろく上陸の用意も整へ置かんとやをら

復していたが、一〇月からはニューヨークに送る製茶や雑貨を神戸をはじめとする諸港で積み込むことになっていた。

<sup>112</sup> 宮永孝、前掲論文、九八頁

腰榻より起ち上りし時突然耳を劈くが如く一声の響聞ゆるかと思へばさしもの巨船震動して覺えず清作ハ船端に投去られたり（略）

（「海王丸」第五回、『東京朝日新聞』一八八九年一月三〇日）

しかし、帝国汽船会社の報告によれば、海王丸には火薬などの爆発物は積んでいなかった。当時の日本では、海賊対策として商船に大砲や鉄砲を積載する許可が出されていた（一八七五（明治八）年布告）ため、沈没の原因として爆発を疑うのは自然である。このあと、小説の展開につれて海王丸の沈没が事故ではなく事件であり、その犯人が藤松であることが判明していく。

相違点は積載物の品目にも見出される。ノルマントン号にはニューヨーク行き製の製茶、上海行きは海産物と雑貨、神戸行きは雑貨、そして牛乳が積まれていた<sup>113</sup>。これに対して、海王丸には「貨物の如きハ金銀珠玉生糸茶烟草其他各種の輸出品」<sup>114</sup>が積まれていた。

そして、最大の相違点は沈没時における生存者の有無である。ノルマントン号の場合、船長をはじめ乗組員は全員救助されたが、日本人乗客は全員死亡した。これに対して、海王丸の場合は、当初沈没事故として世間に知られていた時は生存者がいなかった<sup>115</sup>。しかし、別の見方をすれば、ノルマントン号と海王丸は、ともに日本人の生存者がいないという点で一致している。

小説は第二回から場面が一転し、横浜の貿易商・藤松連蔵とかつての主人の息子・清作の話になる。東京の商業学校で学ぶ清作は父が賊に殺され、不可解な借金で無一文になったため、やむなく藤松を頼った。藤松は当初、清作を宗主の息子として待遇したが、それも徐々になくなっていった。ある日、清作は藤松から生糸を運ぶよう命じられて海王丸に乗船したが、船は突然沈没してしまった。幸い清作は海に投げ出され、荷物とともに漁師に救出された。漂流している間、清作を支えたのは例の生糸の荷物だった。しかし、荷物を開けてみると、そこには生糸ではなくワラばかりが入っていた。不信に思った清作は自

<sup>113</sup> 宮永孝、前掲論文、九七頁

<sup>114</sup> 小説では清作が藤松から「生糸」を運ぶよう命じられているが、この「生糸」は意識的に設定された積載物である。開港以降、生糸は横浜港の主要輸出品であった。

<sup>115</sup> その後、実は主人公清作が唯一の生存者であることが読者に分かるが、当初は生存者がいないことから物語が展開していく。

分の生存を知らせず、密かに調査を始める。時に、清作にはお梅という許婚がいた。お梅は神戸の呉服屋・吉澤源助の娘だが、父親とは幼い頃に死別した。母親のお琴は家のために番頭の重次郎と再婚したが、病に罹り、お梅を残して亡くなる。生きて帰った清作は助けを求めて重次郎を訪ねるが、重次郎は門前払いをしてお梅にも会わせなかった。そのことを知ったお梅は、清作に会うため家出する。お梅は清作を探して藤松を訪ねるが、藤松が清作の父親を殺したこと知ってしまったために藤松につかまり、蔵に閉じ込められる。ある日の夜、のちに盗賊であると判明する何者かが蔵を破つたのを機に何とか逃げ出し、東京の資産家・富田貞三と義弟の貞吉に助けられる。お梅は蔵から逃げる時、思わず『倫敦（ロンドン）日々新聞』を持ち出したが、その新聞には「独逸（ドイツ）にあった詐欺の事」が報じられていた。貞吉は、この新聞の記事から藤松が海王丸の沈没を計画した犯人であることを知る。実は、貞吉は海王丸の唯一の生存者であり、お梅が探していた清作であった。清作は身分を隠して、藤松の犯罪を暴露しようとしていたのである。清作は藤松が海王丸を沈没させた事実を掴み、その証拠を集めて世間に明らかにする。

横浜貿易商人の中にて藤松連蔵と問ふ時ハ誰一人知らぬ者あらざるべし藤松は二三年前或る英国商館に雇はれ半年余り経る程に早くも若干の資本を得て貿易仲買を始めしが内外商人の信用も篤く思ひの外利益ありて此頃ハ仲買の傍ら折々直輸出をなるまでに忽ち身代を仕上げたり（略）

〔「海王丸」第二回、『東京朝日新聞』一八八九年一月二七日〕

悪役の藤松がイギリス商館で働いていたことは、ノルマントン号の船長がイギリス人であることを想起させる。また、清作の故郷が神戸であることや、ノルマントン号事件とその関係者に関連する地名や国名が「海王丸」に登場することからも、桃水が事件を意識して創作していたことが確認できる。

#### 4 連載時期との関係性について

桃水が三年前に起こったノルマントン号事件を下敷きにして「海王丸」を執筆したことは、ほぼ間違いないだろう。「海王丸」は、ノルマントン号事件という「實事」に取材し、事件と一致する種々の要素をちりばめることで「實事」を「婉曲」的に表現している。冒

頭でも述べたように、「海王丸」は一月二三日に「予告」を出してから三日後に連載を開始した。前作「小町奴」の連載終了から「海王丸」の連載開始まで約一か月あるため、桃水はこの間に構想を練ったものと思われる。そして、小説の連載時期を素材との関わりで考えたとき、ある一つの可能性が浮上する。新聞小説の読者は同時代の社会や文化を生きる存在である。桃水はそのことを踏まえ、読者の心を掴むために連載のタイミングを計っていたのではないだろうか。「小町奴」連載中の九月一三日の『東京朝日新聞』には、次のような記事が掲載されている。

「チャリネ氏の慈善興行」

此ごろ日本橋中洲にて興行中なるチャリネ氏ハ先年渡来せし折もノルマントン罹災者の遺族へ救恤の爲め慈善興行を催し其收入金半額を義捐せんとして其の日時ハ明十四日の夜興行（午前七時開場の分なり但し大雨なれば来る十八日の夜に延すよし）に定めしといふ（略）

ノルマントン号事件の遺族のために、慈善興業が開催されるという告知である。事件からかなりの時間が経っているにもかかわらず、このような催しが行われるのは、当時の社会や人々にとって簡単に忘れることのできない出来事だったからであろう。約一か月ずれるが、「海王丸」の連載が始まった一八八九（明治二二）年一月は、ノルマントン号の沈没から三周忌にあたる時期である。そうした点から考えても、桃水がノルマントン号事件を「海王丸」の下敷きにしたのは、読者が小説を読んで事件を想起し、現実の事件と作品とを重ねながら事件の教訓について考えさせる意図があったからではないだろうか。事件は、解決済みの過去の出来事ではなく、周囲を海によって囲まれた日本の海上交通の将来とも大きく関係する出来事であった。

一八八九年は、ノルマントン号事件を契機としてある団体が設立された年である。ノルマントン号事件の翌年（一八八七）、農商務大臣・黒田清隆は、欧州視察旅行記録『環游日記』を発行し、ロシア水難救済会の沿革、組織、職能について詳しく紹介している。ノルマントン号事故を機に水難救済の必要性を痛感した琴陵宥常は、『環游日記』で紹介されたロシア水難救済会を参考に、日本における水難救済会の設立を目指した。琴陵は、一八八八年に「大日本帝国水難救済会大旨」を起草し、翌年三月、当時の総理大臣・黒田清隆と

面会して水難救済会設立の賛同を得た<sup>116</sup>。一八八九年六月一六日の『東京朝日新聞』は、その設立を次のように報じている。

#### 「水難救済会」

ことおかしらつね

琴陵宥常氏の発起にて今度広く世の慈善家の賛助を得帝国水難救済会なるものを設くるの目論見あり既にその筋の許可をも得たる由にて主意書規則等を頒布したり同会の目的ハ会名の如く日本帝国の河海に於て水難に罹れる人民又ハ船舶を救済するものなり

また、一月四日の『郵便報知』は、「大日本帝国水難救済会 発会式を挙ぐ」の見出しで、一月三日の天長節に讃岐の金刀比羅宮で「大日本帝国水難救済会」の開会式が挙行されたことを報じている。あるいは同年一〇月一七日の『東京日日新聞』には、「汽船」に絡む記事として東京湾汽船会社（現・東海汽船）設立の記事が掲載されている。

#### 「東京湾汽船会社 設立」

京橋区新船町将監河岸に設立せる東京湾汽船会社は、資本金五十万円にて、東京湾及近海各地方に往復する乗客及貨物の運送をなすを営業とし、営業年期は二十ヶ年にて、発企人は麻布飯町五丁目前田清照氏外七名なりといふ。

一〇月二五日と二九日の『東京朝日新聞』には、一月一五日に東京湾汽船が開業するという広告が掲載された。東京湾汽船会社設立に関する記事は、『東京朝日新聞』に「海王丸」の「予告」が載ったのと同日の一〇月二三日の『郵便報知』にも掲載されている。

#### 「東京湾汽船会社 来月十五日開業式」

東京湾汽船会社 ○同社は来月十五日開業式を執行し、当日は品川沖に於て汽船競争  
其外余興あり、府知事等を招待するよし。

<sup>116</sup> 帝国水難救済会編『帝国水難救済会五〇年史』（帝国水難救済会、一九三九年）参考

ところで「海王丸」では「世界無比の汽船」とも呼ばれていた海王丸の沈没によって、多くの人や保険会社が破産・倒産するなどの大打撃を受ける。

帝国汽船会社ハ船長機関士以下水夫火夫に至るまで数年老練の功ある者を選びて乗組ませたるより此船に載るときさへ云へバ各保険会社にて人貨を保険するに聊かも躊躇せず海王丸の信用ハ日に月に添増さたりたりされバ此度の航海にも船客の数ハ八百人の多きに至り塔載せし貨物の如きハ金銀珠玉生糸煙草其他各種の輸出品にして是が為払入れたる保険料ハ僅々数百円の上に出ざるも若し万が一危難ある時ハ数千万円の損害を償はざるべからず我国に現在する各種保険会社中凡そ過半ハ破産するに至るべしと云り世人が海王丸を信ずるの篤き其第一報に接したる時までハ皆虚伝なりとして斥け第二第三の報告を得るに及び初めて諸会社も驚き是より態々人を派し又ハ各地に電報を發し虚実の程を問合わせしに沈没の事ハ毫も疑あらざるにぞ此に一般の驚きを惹起し就中商業会社に於てハ容易ならざる狼狽を來たしたり

（「海王丸」第一回、『東京朝日新聞』一八八九年一月二六日）

保険制度は汽船沈没事件を契機に登場するため、「海王丸」における「保険」とは、航海に関する事故によって船舶や積荷に生じた損害を保証する海上保険であると思われる。一八八六年一月二日の『大阪朝日新聞』には、ノルマントン号事件に関連した次のような記事が掲載されている。

再三報道せし紀州西牟婁郡串本浦の沖合鹿島磯の暗礁に乗揚げて沈没せし英汽船ノルマントン号は直ぐ引揚げに着手すべきか將た競売に附するかの事を電報にて本国なる会社へ掛合中なりと又該船に搭載せし製茶百五十噸の代価に該船価を併して十四万円は全く保険会社の損耗に帰するものなりと

記事によれば、船舶の沈没によって保険会社から保険金の支払いを受けられることが分かる。日本に初めて近代的な保険制度を伝えたのは福沢諭吉である。福沢は一八六七（慶応三）年に西欧文化を紹介する『西洋旅案内』と『西洋事情外編』を出版したが、『西洋旅

案内』の附録で、「災難請合の事」として「生涯請合」（生命保険）、「火災請合」（火災保険）、「海上請合」（海上保険）の仕組みを紹介している。

外国の保険会社が日本に進出した時、生命保険専営の会社が一社、生・損保兼営業の会社が五社であったが、一八七四、五年頃には四〇社に及んだ。一八七七年になると、イギリスのプロビデント・クラークス・ミューチュアル生命保険会社横浜代理店が日本人契約開始の新聞広告を出した。その後、一八七九年に東京海上保険会社（現・東京海上日動火災保険株式会社）が、一八八一年に明治生命保険会社（現・明治安田生命保険相互会社）が創立され、本格的に日本の保険業界が発展を始めた<sup>117</sup>。

「海王丸」が連載された一八八九年は、保険業界において大きな動きが見られた年であった。「海王丸」の連載開始約半年前の六月二二日には、労働者の「養老廃疾保険法」（補足）が公布された。七〇歳以上の老人と災害保険の対象とならない廃疾者に対し、労働者・使用者・国の三者負担による年金を支給することになったのである。さらに、七月一二日には藤沢利喜太郎が『生命保険論』を刊行し、日本人についての死亡生残表（平均寿命）を初めて作成した。「海王丸」の第二七回には、富田貞三が海上保険会社の設立を計画し、その準備や重役を貞吉（清作）に任せようとする場面がある。

（貞三）今も話た通り保険会社創立の事ハ万端都合よく行てもう何時でも開業の運びになつたから新聞紙に広告まで出したもの、扱困つたのハ役員随分是迄懇意にして而も今閑でぶら付いて居る者も沢山あるが何しろ此丈の大事業を監督させる位間に合ふ者も鳥渡ありかねるものでは是にハ頗ぶる閉口したテ

（略）

（貞三）海王丸の沈没で保険会社の過半ハ破産して僅かに維持へた分も追々に廃て仕舞ひ今でハ総で失なつたも同様だから一般の商況にハ大層な影響を及ぼし荷物の運搬も非常に高い賃せんを払つて成るべく安全な道を取る事になつて居るから此時を外さず会社を創立すると好い事ハ分かつて居ても何しろ貿易商に怖気が付いてなか／＼初めの中ハ甘く行かなからうと思ふのさ

（「海王丸」第二七回、『東京朝日新聞』一八八九年一月二六日）

「海王丸」作中で資産家の富田貞三は海上保険会社を計画しているが、作品の掲載に先立つ同年六月二三日の『東京日日新聞』には保険会社に関する次の記事が見られる。

「日本生命保険会社 大阪滋賀京都の豪商紳士の発起」

日本生命保険会社 ○大阪及滋賀、京都の豪商紳士の発起にて、今度表題の如き会社を創立する事に決定し、創立委員には土居通夫、田中市兵衛、川上左七郎、岡崎治助、竹田忠作、能谷達太郎、乙谷権兵衛、草間貞太郎、井上信次郎、泉博介、廣瀬某、其外三名当選したり。発起人は五十名にて株主申込の期を来る二五日迄とし、発起人会を開き直ちに出願する由なるが、資本金は三十万円、一株二五円、株券一万五千枚にて大阪に本社を置き、関西各地に支店代理店を置く見込みなりと云ふ。関西各地には是迄生命保険会社の支店若くは代理店のみにて此両者の間多少競争ありし処今般此新会社を増さば一層競争を見るに至るべしとの評判なり。

大阪初の生命保険会社で、現在では日本最大手となった日本生命保険会社の創業を報じる記事である。同社は「海王丸」連載直前の九月二〇日に開業している。大阪が『朝日新聞』創業の地で、桃水にもおなじみの土地であったことを考えれば、「海王丸」で保険会社設立が話題になるのは、日本生命保険会社の創業を視野に入れた趣向の可能性が高い。これもまた当代の「實事」を「婉曲の筆」で小説化した例に数えられよう。

ノルマントン号事件および保険に関する「實事」と「海王丸」の連載時期を整理すると次のようになる。

- 一八八六年十月二四日 ノルマントン号事件
- 一八八九年六月二二日 「養老廢疾保険法」（補足）公布
- 七月一二日 藤沢利喜太郎『生命保険論』刊行
- 九月二〇日 日本生命保険会社開業
- 一一月三日 日本帝国水難救済会発足
- 一一月一五日 東京湾汽船会社設立
- 一一月二六日 「海王丸」連載開始

右の年表から、「海王丸」作中で最も重要な出来事である商船の沈没事件および保険会社設立の話題が、ノルマントン号事件とそれに続く保険関係や水難救済会など海洋船舶関連の動向と深く関係していることが分かる。

以上から、「海王丸」は、読者の記憶や体験としても共有されている同時代の社会的な話題性に満ちた出来事（「實事」）を意識的に摂取し、それを「婉曲の筆」によって作品化することで、読者の記憶を喚起し体験を刺激する「特別新制の因果小説」を目指したと考えられる。また、「海王丸」連載の時期は、そのような目的から見ると、読者の興味を引く絶妙なタイミングであったと考えられる。

## 5 おわりに

ノルマントン号事件を報じた新聞記事の記述と「海王丸」の描写を比較すると、細かな情報は異なるものの、大きな文脈は一致していることが分かる。ある出来事をそのまま小説に取り込むのではなく、小説家の意図に即して物語展開にふさわしい形で生かすのは当然のことであり、それこそ桃水の「得意の婉曲の筆」の見せどころである。同時代の読者は、慣例的に名山・大川・国名または著名な人名を船名とすることを基本知識として持っていたため、「海王丸」というタイトルを見て、小説の内容が「船」に関係するものであることをすぐに認識したと思われる。

桃水は、三年前に起きたノルマントン号事件を「海王丸」に取り込んだ。その連載が一八八九年一月二六日からであるのは偶然ではない。桃水は、ノルマントン号事件から三週忌にあたる時期に、事件を想起させる小説を連載することで、読者の興味や関心を引き付けようとしたのである。

この小説には、お梅の義理の父・吉沢源助、長八の息子・平吉、資産家・富田貞三の弟・長三郎、そして横浜商人・藤松連蔵などの悪役が登場する。「予告」では「一種特別新制の因果小説」と紹介していたが、すべての悪役が因果応報の結末を迎えるわけではない。むしろ、因果応報の結末を迎えるのは藤松だけである。富田貞三の頼みで、彼が設立する海上保険会社の理事を任された清作は、開業式で自分が海王丸沈没の唯一の生存者であることを明かす。海王丸沈没の真相とその犯人であることを暴露された藤松は、開業式場から逃亡を図ったが、待機中の巡査に逮捕される。小説の最後には「本誌の記者附けて申す」という形で後日談が載せられている。

本誌の記者附けて申す此夜瀧野清作が海王丸破船の原因を報告せしより世上一般の疑ひハ解け帝国汽船会社の信用も快復し貿易商荷主も大いに安堵して保険会社ハ開業の日より陸続保険申込ありて非常の繁盛を極め平吉ハ云に及ばず貞三の実弟長三郎も善心に立帰つて該会社の役員となり長八ハお絹が家の楽隠居お梅ハ無論瀧野の夫人夫々目出度く取り付き大悪人の連蔵のみハ厳しき処刑に行れしとぞ（「海王丸」第三〇回）

藤松だけが因果応報の結末を迎えるという幕切れは、一体何を意味しているのだろうか。藤松は清作の復讐の相手であるだけでなく、海王丸を沈没させ保険金詐欺を計画した悪役である。ここで、海王丸沈没の下敷きがノルマントン号事件であることを想起しておきたい。船長ドレークが予審で有罪判決となつてから、ノルマントン号事件の報道は発生直後の論調と比較し微妙に変化していく。その背景には条約改正交渉に配慮し、イギリスとの関係性をこれ以上悪化させるべきではないと考える政府の意図を汲んだジャーナリズムの姿勢が読み取れる<sup>118</sup>。

ノルマントン号事件では、最終的に船長に禁錮三か月の有罪判決が下されるが、それ以外の被告は全員無罪となった。この判決に対し一二月一〇日の『時事新報』は、「満足のいく裁判ではないが、イギリスの法廷に於て、イギリスの判事が、イギリスの法律を按じてイギリスの罪人を罰したるもの」<sup>119</sup>と報じた。裁判が速やかに行われたこと、裁判が文明国の法に背くものではなく、納得のいく結果であったとも報じている。しかし、判決の軽さに世間が納得するはずはなかった。藤松は、清作の個人的復讐の対象であると同時に、海王丸沈没事件の被害者を含めた社会的復讐の対象でもあった。桃水は、現実のノルマントン号事件では到底不可能であった復讐の遂行が、読者の密かで根強い欲望であることを知っていたのではないだろうか。作中の藤松は、そのような公的な復讐の対象としての性格を帯びており、因果応報の結末には弔い合戦の意味も含まれていたのではないかと考える。それは「婉曲の筆」によって、読者の密かな欲望を遂行することでもあった。

<sup>118</sup> 戸田清子「明治前期における条約改正と新聞報道——ノルマントン号事件報道を中心に——」

『奈良県立大学研究季報』十四（二・三）（奈良県立大学、二〇〇三年一二月）、一一四頁

<sup>119</sup> 『時事新報』一八八六年一二月一〇日

## 第五章「夢」論——二項対立をめぐる

### 1 はじめに

桃水は、「啞聾子」「くされ縁」「海王丸」などを発表した翌年の一八九〇（明治二三）年にも『東京朝日新聞』に作品を発表し続ける。具体的には、「業平竹」（一月三日―三月一六日）、「夢」（四月一三日―五月六日）、「目鬢めかす」（五月七日―六月一〇日）、「花あやめ」（六月一日―七月二〇日）、「葉やま繁山」（七月二二日―九月三〇日）、「かしこ鳥」（十一月二六日―十二月二八日）で、ほとんど休む間もなく連載小説の筆を執っている。

『東京朝日新聞』入社二年目の作品群の中で、四月から五月にかけて連載した「夢」は、舞台が海外であり、しかも主人公はじめ登場人物も西洋人という点で注目される。本論の序章で確認したように、桃水は、入社三年目つまり「夢」などを発表した翌年になる一八九一年四月一五日の一葉日記「若葉かけ」の中で、「新聞の小説といわゞ有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の事をつゝらされば世にうれさるをいかにせん」と嘆いていた。実際、入社一年目の「啞聾子」「くされ縁」「海王丸」などでも、大新聞の小説にかなう「新奇」な要素を取り入れつつも、読者が求める「新聞の小説」を意識して「因縁」や「因果」など世話物的な趣向を中心に創作している。そうした世話物あるいは時代物の世界や趣向が、基本的に歌舞伎や浄瑠璃の流れを汲む以上、舞台や登場人物を海外にすることは難しい。世話物や時代物の延長にある人情小説や時代小説が主流の「新聞の小説」において、舞台は海外で登場人物もヨーロッパ人という「夢」は、前年の「啞聾子」「くされ縁」「海王丸」などと比較しても、「新奇」「新制」の点で、かなり踏み込んでいる。それだけに、「新聞の小説」の試みとしては実験性が高いとも考えられる。読者との関係では、小新聞の読者よりも大新聞の読者を、「幼ちなる」読者よりも「世の学者といわれ識者の名ある人々」のような読者を意識したとも考えられる。また、前後の作品との関係では、「海王丸」で焦点の一つとなった西洋人対日本人という問題を受け止め、ヨーロッパの世界を描くという展開になった可能性も考えられる。いずれにしても、桃水の初期新聞小説の性格を考える上では逸することができない作品である。

作品の大まかな内容を確認しておこう。ポーランド国王である父の命令で、幼い頃に山奥の洞窟に閉じ込められた王子は、野生児として育つ。成長した王子は、王位継承のために王宮に戻るものの、王位にふさわしい社会性や人間性を身につけていないとして王位継

承が困難になる。その王子が、夢の力を借りて王位にふさわしい人間回復を果たし、無事に王位を継承するという物語である。それなりに好評であったのか、『東京朝日新聞』連載後には、単行本『夢』（今古堂・金桜堂、一八九一年八月）としても刊行されている。

一八九〇年の桃水作品群は、作中の時代は区々であるが、「夢」以外は、舞台はいずれも日本で、登場人物も日本人である。趣向の点でも、「夢」の前作「業平竹」を例にすれば、「幕府盛世とよよの頃」を舞台とするお家騒動を描き、いかにも読者が喜ぶ「奸臣賊子の伝」の延長にある日本的な時代小説になっている。それだけに、舞台がポーランドで登場人物もヨーロッパ人という設定の「夢」は、その設定の意図や意味が異彩を放っている。桃水は「夢」以降も新聞小説を発表し続けるが、一八九一年一〇月に朝鮮を舞台とした「胡砂吹く風」を発表するまで、外国を舞台にした小説は「夢」のみである。そうした要素とも関係するのか、他の連載作品より、連載期間が短く、分量も少ない。具体的には、前作「業平竹」が時代物に見合うように一月三日から三月一六日まで三か月以上だったのに対し、「夢」は四月一三日から五月六日までと一か月にも及ばない。また、一回分の分量も他の作品よりもかなり短い。「夢」は、桃水が明治二二年から明治二四年にかけて『東京朝日新聞』に発表した連載小説一四作品の中で、唯一西洋を舞台にした小説であると同時に、分量的にも他の作品より短いという特徴をもつ。

「夢」の作品内容で注目されるのは、主人公で野生児のジギスムンドが、人間社会に復帰するという経緯と復帰の方法が夢によるという設定になっている点である。また、後から具体的に検討するように、「夢」には二項対立の構図がある。その対立する二項の内実や関係性も作品の読解と深く関係すると考えられる。

本章では、右のような作品の性格に加え、本作執筆時の桃水の伝記的背景も視野に入れて作品の分析を行う。なお、本作で伝記的背景を視野に入れるのは、それが作品の成立事情や内容にまで深く関係すると考えられるからである。その事情は、単行本『夢』にも「緒言」として記されている。やや長くなるが、本章第二節以下の検討の前提にもなるので以下に引用する。（漢字は新字体とし、原文のルビは適宜省略、句読点は新たに付した）

去年の春、我等偶々病を得て、神田和泉町の医院へ入れり。昼悶へ、夜苦しみ、左右を顧れば憔悴たる顔色、四隣を窺へば苦惱なる声、身は鉄鎖に繋がれざるも、猶囚人の如く。然り、我等病篤かりしは梅の花の咲き初めにして、桜の雪と降る頃に至り稍少し

く快方に向ひぬ。いざやと計り筆硯を把りて小説をものせんとするに、春をも知らで過ぎし身は面白き趣向立んやうもなく、苦悩をもつて主眼とする小説も好ましからず。扱は何を書くべき乎。我等が病苦は前に述ぶる処の如し。然るに、此際、我等を許して身体の不叶なるにも拘らず、自在に山河を跋涉し、随意に花月を賞せしむるものあり。何ぞや。夢なり。我等、元来、慾深く、人間の普通相場五十年を一刻片時も割好く生きんと望むが故に、夜もろくく寝たる事なし。然るに今や眠を貪る甚しく、我等が嘗つて深く厭ひたる睡魔は実に無二の親友となれり。苦悩又苦悩、華胥二十年の長遊びに天下を治むるなど云へる大業なる事は我等が本分には非ず。邯鄲一炊の間に榮華を極むる、是も又、望に過たり。(略)寝た間が現か、起きた間が夢か。有名なる哲学者ヒエヒテ一氏が性理学に基き身体の総ての部分がまんべんなく働く時を現なり、身体の一小部分が独り働く時を夢なりと、野暮に真面目に判断せしまで、世間の学者も、夢現、孰れを夫と分きかねて迷ひしも道理なれ。ア、辛いかな、病苦は夢にて早醒めよ、ア、快いかな、睡中の楽境、長かれかすと、念凝りて「夢」の一篇を作る間も、又、現と夢とを分たず。我等が夢を説くに当り、此長たらしき前口上も亦寢言なるや計り難し。

桃水しるす

中略した部分には、夢の中での榮達などは望まず、わずかな慰安が得られれば十分であるという感想、あるいは、ナポレオンの睡眠時間が短いのは覚醒時の快樂が大きく、ウェリントンが寝坊だったのは夢中の快樂が大きかったという観測などが語られている。右の「緒言」は、後に引くように連載直前の「口上」を踏まえた内容になっている。こうした「口上」や「緒言」の内容からも、病気による入院時の体験やその折の感想や心情などが、「作品」の内容と関係することは疑えない。

## 2 桃水の健康状態と執筆意図

「夢」の連載に先立つ『東京朝日新聞』内の小説欄に関わる動向を確認しておこう。「海王丸」の第一九回が掲載された一八八九（明治二二）年一月一七日の社告に「一般看客諸君に白す」という見出しで次のような文章が見られる。

本誌愛読諸君の御希望に従い文学上の批評小説等に一層の精美を加え本誌をして

愈々完美の新聞紙たらしめんが為に、今度饗庭篁村氏を請聘して専ら本社に力を添へらるゝ事となしたり依て自今以後同氏が靈妙円活の文章は独り本誌に於てその美観を専らにする事なるべし

この社告では『読売新聞』から移籍した饗庭篁村（めいばうこうざいん）に対する朝日新聞の期待が読み取られる。明治七年、読売新聞社に入社した饗庭篁村（一八八五—一九二二）は、一八八六年「当世商人氣質」「人の噂」などを連載してその文才を認められ、一八八九年に東京朝日新聞社に移っている。社告が載せられた同紙面の下段には、その期待に応じるような形で饗庭篁村「手前口上」も載せている。

（略）何でも一番実をつけて御覧に入れんと当人保証の大勉強当人自身の入社の上近日別製の小説を揚げ初々しく諸君の見参に入らんとす其時お褒め下さらずバ夫もまた自身に褒めて楽み申さん先ハ入社の御披露まで斯の如くに御座候

この「近日別製の小説」とは「対扇（ついであしぎ）」（明治二三年一月三日—二月一日）で、桃水の「業平竹」と同時に連載が始まっている。挿絵入りの「業平竹」に対して挿絵がない連載小説であった。やはり小新聞として始まった『読売新聞』も、小説欄を売り物に販路の拡大してきた。同紙で篁村は挿絵なしの小説に親しんでいたのか、竹の屋（舎）主人の別号で挿絵入りの小説「小町娘」（一八九〇年三月一日—四月二二日）の連載時に寄せた「字入小説の前口上」（三月一六日）で次のように述べている。

（略）適にハ洒落に絵を入れよ此方も洒落で見やらんにと懇ろに書を寄せらるゝ人あり且ハ桃水痴史病氣にて絵入の小説一つとなれば全快するまで一寸助けよ知らずや汝桃水痴史の此の小説業平竹といふよしハ竹の舎ハ業平のやうなと云ふより付し題ぞ斯褒められても嬉しうないか此跡なるに書く気はないかと煽られて見れば何やら眞個に左様かとも思はれ（略）

篁村は、桃水が病氣であることを明かし、挿絵入り小説は苦手ではあるが、桃水を助けるために挿絵入り小説の執筆へ踏み込んだことを明かしている。新聞小説家として次々と

作品を発表していた桃水の身に何が起こったのか。篁村「小町娘」の連載が終わり、「夢」の連載が始まるが、その「口上」には、篁村が語った「桃水痴史病氣」の事情が具体的に記されている。桃水自ら残した文章や記録が

先に引用した「緒言」(『夢』)と重複する表現も多いが、伝記情報として貴重なので引用しておく。

痴史過る日より病を得て和泉町第二医院に在り昼悶へ夜痛み、左右を顧みれば憔悴たる顔色四隣を窺へば苦惱なる声、身ハ鉄鎖に繋がれざるも尚囚人の如く然り、畢竟是と伝ふも我と我が性のまゝに働き、身体に対して自ら犯したる罪を自から罰するものと思へば、憐みを乞ふに由なく救ひを求むるに処なし、斯る苦悩の中僅かに業平竹を掲げ畢りたるに、いとゞ乏しき脳漿ハ、全く涸死して絞れどもく跡小説の趣向ハ出ず、苦中又一ツの苦を重ねたる折(略) (口上、『東京朝日新聞』一八九〇年四月一三日)

桃水は、「業平竹」の連載中に病気で、「第二医院」に入院し、「業平竹」の連載終了後は、新作の構想が困難なほど執筆に苦しんだことを明かしている。桃水が入院した「第二医院」とは、東京帝国大学医学部付属医院のことで、本郷の病院を「第一医院」、神田和泉町にあった病院を「第二医院」と呼んだ。なお、「第二医院」の跡地は、現在は三井記念病院となっている。「第二医院」に入院したということは、当時の最先端の医学療養を受けられる病院に入院し、そこでの見聞が契機となって「夢」の執筆に繋がっていったことになる。具体的な入院時期や期間については、「過る日」というだけで不明であるが、単行本の「緒言」に照らすことで、いくらかは推測が可能になる。先にも引用したが、ここでも再確認しておこう。

去年の春、我等偶々病を得て、神田和泉町の医院へ入れり。昼悶へ、夜苦しみ、左右を顧れば憔悴たる顔色、四隣を窺へば苦惱なる声、身は鉄鎖に繋がれざるも、猶囚人の如く。然り、我等病篤かりしは梅の花の咲き初めにして、桜の雪と降る頃に至り稍少しく快方に向ひぬ。

「緒言」の場合、「去年の春」とあり、一年前のことなので、記憶がどこまで確かなのか

という問題は残るが、いちおう「我等病篤かりしは梅の花の咲き初めにして、桜の雪と降る頃に至り稍少しく快方に向ひぬ。」という句を前提にしてみよう。入院期間が数日にとどまらないことは、「桃水痴史病氣」を伝える筆村の「字入小説の前口上」（三月一六日）や「夢」連載時の「口上」（四月一三日）に「入院数旬の久しきに渡り、花がいつ開きしや散りしや夫さえ知らぬ身分」とあることから推測される。それに加え、先の「緒言」の句を勘案すると、「梅の花の咲き初めに」は、「病篤かりし」というのであるから、東京で「梅の花の咲き初め」る時期を二月頃とすれば、二月にはすでに「病篤かりし」状態だったことになる。また、「桜の雪と降る頃に至り稍少しく快方に向ひぬ」というのであるから、東京で「桜の雪と降る頃」を四月上旬とすれば、その頃はまだ「稍少しく快方に向ひぬ」という程度だったことになる。病気の期間が、そのまま入院の期間とは限らないが、「緒言」や「口上」の句を勘案すると、少なくとも二月から四月上旬にかけては病気であったと考えられる。「業平竹」の連載は、一月三日から三月一六日なので、おそらくは連載中に発病し、連載後半には入院を余儀なくされたか、入院しながらの執筆になったであろう。

桃水の病名は明らかでないが、「口上」には「痴史も掛り医員橋爪敬三郎君の巧妙にして而も親切なる施術に因り、截るべき処も截らず済み受くべき苦痛も受で止み」とあり、「昼悶へ夜痛み、左右を顧みれば憔悴たる顔色、四隣を窺へば苦悩なる声」とあるので、場合によっては開腹などの処置も必要な痛みが持続する内臓疾患という印象であるが、現時点では不明である。ともかく、入院先が「第二医院」という点や同じ病室の「憔悴たる顔色」や「苦悩なる声」という病状からも、命の危険を伴うような苦しい病状の時期があったことは十分に推測できる。病床での「昼悶へ夜痛み」「身体の不叶なる」苦しみが命の危険を伴うようなものだったとすれば、そこには身体的な問題だけでなく、死ぬことへの不安という精神的な問題もあったと考えられる。そうした心身の不安の中で、桃水が、心身の苦しみから解放されるものとして見出したのが睡眠と「夢」であった。それは先の「緒言」でも確認されるが、連載時の「口上」にも見られる。

此際、痴史を許して身体の不叶なるにも拘はらず、自在に山河を跋渉し、随意に花月を賞せしむるものあり。何ぞや。夢なり。痴史、元来欲深し。人間の普通相場五十年を一刻片時も割好く生きんと望むが故に、夜もろくく寝たる事なし。然るに今や眼を貪る甚しく、痴史が嘗つて深く厭ひたる睡魔ハ実に無二の親友となれり。

(口上、『東京朝日新聞』一八九〇年四月一三日)

病氣というきわめて具体的現実的な苦痛の中で、それまで「深く厭ひたる睡魔」が「実に無二の親友」となるといふ体験や「自在に山河を跋涉し、随意に花月を賞せしむる」ものとしての「夢」の働きの発見は、小説「夢」において主人公が「夢」の働きによって救済されるという構造と通じるものがある。小説「夢」には、次に見られるように種々の二項対立の要素があるが、そうした二項対立の根底には、病気の体験を通して桃水が直面した現実と夢、死と生などの二項対立の問題があったと考えられる。

### 3 「夢」における二項対立

「夢」には様々な二項対立の要素があり、それが物語の軸を構成している。主人公の人間性回復が中心となつて物語が進む展開において、この対立は、作品を構成する基本的な要素になっている。具体的には、「夢」の内容には、ポーランドとロシア、動物と人間、非文明と文明、夢と現実、産みの親と育ての親などの対立関係が存在する。この二項対立の要素に注目して作品の内容を検討してみよう。以下、①ポーランドとロシア、②動物と人間、③夢と現実という点から、対立構造を確認する。

#### ①ポーランドとロシア

「夢」において、ポーランドとロシアの二項対立の関係は、この物語の原因でも関係する大きな背景になっている。ポーランドの王子として生まれながら山中に幽閉されたジギスムンドと見張り役の博士クロータルドを二十年ぶりで迎えにきた指揮官の次の発言は、その間の事情をもの語っている。

国王殿下ハ王妃に別れさせたまひし後再び妃を立す随つて王子を生ませらるゝ事なし、さるに因て此度魯国よりモスコー伯即ち王姪アストルフを迎へて位を譲らんと思定め今日立太子式挙行の旨触させられ、予ハ率ある処の近衛兵を指揮し指揮し式場に臨むべきやう命を受けたり、然るに国民ハ過る年王姪女をもつてモスコー伯に娶はされしすら甚しく感情を傷けたるに、正統の王子を山中に放ち、他国、特に最も敵視する魯国の貴族を迎へ取りて王位を譲らるゝ事ハ、取りも直さず国土を挙げて、魯国の附庸とする

ものなりとて、無数の人民朝未明より王城に迫掛けて立太子式の取消を乞ひ、併せて足下の守り奉る王子ジギスムンド殿下を迎へん事を求め若し此請願にして容られずんば、国王は天理人情に背きたまふものなりと奏上せり、(略)

(「夢」五回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月一八日)

国王の子孫がないため、国王は魯国のモスコー伯に王位を譲る事を計画したが、国民の反発を買う。そもそも王子ジギスムンドが山奥の洞窟で鉄鎖につながれた囚人のような生活を送ることになったのは、ロシア皇帝の計略であり、ジギスムンドが生まれたとき、ロシア皇帝が送り込んだ神学者の発言をジギスムンドの父で信心深いポーランド国王バジリウスが信じたからであつた。ポーランドの王位を継ぐ目的で国王の姪と結婚したモスコー伯爵もロシアから送られてきた人物である。

さて当日に至り国王ハモスコー伯もろとも大礼服を着けて謁見所に出られたり、然るに式場の次第書に文武百官ハ午前十一時参朝すべしとありしにも拘はらず正午を過るまで誰一人参内する者なく、(略)モスコー伯もいと不興気に見えたり

(略)午後第一時に至りても、宮内大臣を始め一人の参内者なきを見て、国王は震怒甚だしく(略)侍従長は狼狽周章で馳来り一大事変を奏上せり、その事変と云ふハ此日立太子式挙行に付国民一般不平を抱き城外に押寄て殿下に迫る所あらんとの事なり、国王はいよく怒り直ちに近衛兵を發して乱民を鎮撫よと命じ置き、第二の注進を待ち居られしに(略)侍従長ハ又もや御前に馳至り「殿下よ事はいよく破れて候、(略)近衛都督の(左隊八十重二十重城を囲み乱民と相連りて立太子式延期の事を請願し奉るよし殿下は如何計らはせたまふべきや」と申す

(「夢」六回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月一九日)

魯国の貴族が王位を継ぐことに「国民一般」だけでなく国王を守る近衛兵の一部も反発する姿が描かれている。ロシアがポーランドの乗っ取りを企むという設定は、ポーランドの歴史を反映している。

一七七二年にロシア、プロイセン、オーストラリアの三国により「ポーランド分割」が行われ、ポーランドは国土の約四分の一、人口の約三五パーセントを失う。この一度目の

分割後、ポーランドは国政改革を行うことで国家の維持に努め、ヨーロッパ初の憲法を制定するなど国の存続に努力する。しかし新憲法を認めないロシアがまたも介入し、ポーランドは第二回の分割を承認するかどうかの選択を迫られる。ロシアには激しく抵抗するが、またも分割することになる。一七九三年、ポーランドは面積にして二五万平方キロを失い、残された領土は二〇万平方キロ、人口は約四〇〇万人となる。一七九五年、ロシア、プロイセン、オーストリアによる三度目の分割の結果、ポーランドは国家としては完全に消滅してしまう。国家の消滅から国家としての独立を果たしたのは、一二三年後の一九一八年である<sup>120</sup>。つまり、桃水が「夢」を執筆し発表した時点では、国家としては滅亡したままで、独立に向けた運動を続けていた時期になる。小説の連載時から約一〇年後には、日本も当時のロシアと戦争することになる。ポーランドを含むロシアと周辺地域や国家の関係が、当時の新聞などでどのように語られていたのかという点も、「夢」の読まれ方を考える上での論点になるが、具体的な調査は今後の課題とする。またこうした国家間の対立の問題は、対馬藩典医の家の出身で倭館に給仕として働き、海外通信員として釜山で勤務していた桃水にとっては、朝鮮をめぐる日本や清や西洋列強の問題としても捉えられたのではないだろうか。「夢」における本来的な王位の継承という問題は、朝鮮の問題として桃水の代表作「胡沙吹く風」の中でも、作中で悪役の代表である鄭氏が、偽道士を使って、李氏が鄭氏に国を禅譲するという流言を流すというかたちで描かれている。「胡沙吹く風」のそのような設定は、先に見たように「夢」において、ロシア皇帝が神学者を使って王位をロシアの貴族に譲るといふ設定と類似している。「胡沙吹く風」における王位継承の話には、「夢」からの摂取ということも考えられる。ただ、そのような受容や摂取が行われるのは、王位継承、とくに正統的な継承や国民の支持を得る継承という問題に桃水の関心が深かったからであると考えられる。その関心の深さは、桃水の生い立ちや朝鮮で生活した体験などと深く結びついている。

◎「異様な動物」と「人間」

主人公についての最初の記述で、主人公は「動物」と記されている。具体的には、第一回で、人の出入りが禁じられた山の奥に独り住んでいる「動物」として登場し、その生活と容貌が次のように描写されている。

<sup>120</sup> イェジルコフスキ『ポーランドの歴史』（創刊社、二〇〇七年一月）参考。

春の太陽ハ光輝き東風雲を拂ひ霞を吹きて石窟の中いつよりも明るし石窟ハ正しく動物の住家なり異様な動物ハ今や熟睡の最中とて高鼾せりその状如何頭部の毛ハ黒く赤くして長さ数尺殆んど半身を蔽ひ身体都て毛生ひたるがある分部ハ熊の如くある分部ハ鹿に似たり取別けて妖しきハ諸處鳥の如き毛の生ひたる事はなり、而して此動物ハ石窟の中に推込まれたるのみならず腰部に當り長き鉄鎖を着て石の柱に繋がれたり、既に動物ハ眠覚め石窟の入口に來り二三度鉄柵を揺動かせしが此時門ハ緩く鎖されたるが故苦もなく外に開く事を得たり動物ハ直ちに馳出で乱れかゝる髪を振へし屹度四方を見廻せしがコハ抑も如何に正しく人なり但其面部ハ髯深く生延びて頬より頤を埋めたれと眼光ハ鋭く輝き鼻ハ高く聳へたり、その年齢を察する事ハ最も困難にして先づ十歳以上五十歳以下此広き範囲の中にハ漏れざるべきも社会にあり得る普通人類の他に立つものなれば精密に知るやうもなし渠鉄鎖を引摺りながらその許さん限り遠く出で崖の上の日当て好き處に座し山頂と谷間とを見渡す折二三歩距りたる立木の上にて一疋の老猿ハ菓実を喰ひつゝ此方に向つてキツ／＼と叫べり

〔夢〕一回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月一三日

この「動物」は、洞窟の奥に鉄鎖で繋がれ、囚人のような生活を送っている。その容貌も野生そのもので年齢も不詳である。「異様な動物」の描写は、まるで危険な野生動物さながらである。この「動物」の仲間も同じような野生の動物のみであり、動物たちに対して、自分がなぜこのような状況にあるのかを問い掛けるが、もちろん返事はない。一人の老人（博士クロード）だけが、この正体不明の「異様な動物」を時々訪ねるが、その目的は監視であり、「動物」にとっては憎らしい「番人」であった。

異様な動物ハ飽まで喰ひあく迄飲みたる後老人に向つて斯く話し掛けたる番人よ、予が最も憎む処の敵ハ今日も彼処の梢に來りて予を甚しく愚弄せり予ハ彼を捕へて復讐を試みると欲す汝予が腰に纏へる強情者に乞ひ暫くの間予を放つやう取持ち得させよ」老人は微笑して徐かに首を打振りその成らざる旨を答えたり

〔夢〕三回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月一六日

老人は「異様な動物」に、生きていくための最小限度の食べ物を与える以上の交渉はしない。「動物」は、老人に自分をこのようにしている相手に解放するように伝えよと訴えるが、老人は「それはできない」と答えるのみである。「動物」はさらに訴える。

異様な動物ハ更に彼の老人に向ひ「さらバ再び此羈絆を脱せんとハ願はず此外の事に付て汝に問ふべし、見よ、彼処に光ある丸きものあり渠ハいつも同じ処より出て同じ処に匿るゝ時ハ我々物を見ること能はず、而してその跡を追ふ光薄きものあり渠ハ出る時あり出ぬ時あり或いハ丸く或は欠けたり渠等ハ何用ありて高く往来するや予ハ屢々渠等に向つて直接に尋ねたれど道遠く声達せあるにや一たびも答ふることなし汝知らバ予に告げよ」老人ハ太陽を仰ぎ見て眼開閉しつゝ、「知らず」と答ふ「渠等の外折々無数の光あるものを見るハ如何「知らず(略)」

〔「夢」三回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月一六日〕

「夢」には、種々の二項対立があると述べたが、ここでは太陽と月が二項対立的に言及され、さらにその二つとは異なる星の存在も描かれている。こうした天体の記述は、作品全体では、人間には動かすことのできない天体と人間との距離を暗示している。ここでは、それが「異様な動物」と人間との距離を示すものとして使われている。「知らず」というのは博士クロータルドであり、もちろん天体が何であるかを知っている。この老人の回顧によつて、「異様な動物」の正体が明かされる。

「異様な動物」は、実は「波蘭国」のジギスムント王子であった。「異様な動物」の強調は、それが実は「王子」であったという展開においても意外性の効果を上げている。それは二項対立の効果でもある。ジギスムント王子が「異様な動物」になったのは、国王バジリウスが、ロシア皇帝の間者の予言に惑わされた結果である。国王は、生まれたばかりの王子を殺そうとも考えるが、殺したとなれば国民が納得しないと博士クロータルドを番人役にして山中の洞窟に閉じ込めたのであった。クロータルドは、ジギスムントの教育係で同情心もあるが、国王は「鉄鎖を贈りて残忍にも王子を繋がせ、其上人間の事情一も王子に教へまゐらす事あらバ直ちに兵をさし向けて殺戮すべしと厳命(三回)」しているため先に引用したような対応になっている。幼少期に適切な養育を受けることなく、長期間にわたり幽閉され放置されたジギスムントは、自分が王子とは知らない。社会との

接触がない「異様な動物」と化したジギスムンドは、王位を継ぐにふさわしい精神性や適性を欠いている。しかし、配下の「注進」を通じて、ロシアの貴族への王位継承を知った国民たちや兵の一部までもがジギスムンドに王位を継がせると迫っていることを知った国王は、ジギスムンドを呼び戻し、王位継承するにふさわしい人物かどうかを試すことになる。次は、ジギスムンドが国王と初めて対面する場面である。ジギスムンドと会うことになった王は、「涙を揮ふて棄てたる我子」、「二十年来夢現にも忘れざりしジギスムンド」と再会するという期待で「恩愛の涙」をこらえながら待っていた。

此時ジギスムンドハ側なる椅子に片手を掛けて力づくつかみ「然らバ多年予を苦ましめたる命令者にてありしよな」と云掛けて忿怒の体より「博士ハ軽く合点きその儘元の席に帰らんとせし時ジギスムンドハ国王に打向ひて宮中響渡る許りの大声を發し「悪漢」と呼掛けたり(略)「予が苦痛を命令せしものハ彼悪党、而して夫を實行せし者ハ汝ならずや故に今予ハ讐仇をなすべし、予ハ以前と違ひ身体都べて自由なるぞ」と叫畢つて椅子を振上げ国王に打つてかゝらんとす、博士ハあはて其手に縋り打つ撃せじと争ふ中、国王ハ早くもその場を逃去られたり(略)

(「夢」九回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月二二日)

自分が王になると信じこんだジギスムンドは、父王に対する復讐心に満ちた粗暴な言動を見せるだけでなく、王位継承が困難と思われる振る舞いを繰り返す。

王子の手を取りて、一室の中に伴ひ、金銀珠玉の器をもつて佳味珍羞を進むるに、嘗つて肉刀箱を用ひし事なきぞ王子ハ手掴みにて飽まで食せしが

(「夢」九回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月二二日)

「夢」が発表された時代は、いわゆる文明開化が目標であった時代であるが、ジギスムンドの振る舞いは、文明開化されていない未開の人間の振る舞いになっている。この文明開化の問題は、桃水の「婉曲の筆」によってポーランドの王位目前であったモスコー伯の言動として描かれているように思われる。

ジギスムンドの言動を見た百官たちは協議するが名案も出ない。国民のためには正統の

王位をと願ひ、ロシアに王位が渡ることを憂慮した都督は、王に善後策を持ちかける。王は、苦悩しつつも、自責の念もあり、ジギスムンドが「今すこし人らしくならん」折には、王位を継がせると語る。その役目を仰せつかったクロータルドが王に念を押すと「獣の人間に変わるを得ば直ちに立て太子となすべし」と約束するが、猶予は一週間だけである。都督は、約束をモスコー伯と国民の前でも誓ってくれと頼み、国王はそれを実行する。ポーランドをロシアのものにするという多年の願ひが、目前で破棄されかけても、モスコー伯は余裕をもって聞きながら、次のように言い放つ。

二十年間獣類の仲間となりて生長せし者が僅か一週間にして人間の仲間たるべきを得べきかと、万一博士の見込み通り教化し得るものとせんか我々人類は実に価値のなき者なりと  
（「夢」一一回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月二五日）

この発言は、文明開化を短期間で実現し、国会開設と憲法発布にこぎつけ、「夢」発表から約十年後には日露戦争の勝利に至る日本の急速な近代化を信じなかった西洋列強を「婉曲」的に表現しているようにも考えられる。あるいは、そういう発言を通して、急速な近代化の必要を説いているようにも見える。

#### ◎夢と現実

モスコー伯だけでなく、誰もが一週間での王子の「教化」を疑う中で、クロータルドがとった手段は、いったん王位継承者として目覚めたジギスムンドを、もう一度、山中に連れ戻し、宮殿での体験を夢と思わせることであつた。クロータルドは、ジギスムンドに酒を勧め、ジギスムンドが眠り込んでいる間に、山中に連れ戻す。次の引用は、それに続く一節である。

王子ハ酔醒めの水欲しさに不図眠り驚き屹と左右を顧みれば依然石窟の内にありて草の莖に臥し居たり、王子ハ且驚き且つ怪しみ急に跳起きて柵外に駆出せば例の鉄鎖腰を纏ふ「番人ハ居らずや番人々々」声に応じて立出る博士クロータルドの姿を見るより「予も汝も何故再び此処にあるや」博士ハいぶかしき面色にて答ふ「知らず」「昨日一人の親友ハ夥多の同類を率ゐて突然我々が前に顕はれしに非らずや」「知らず

〔夢〕一四回、『東京朝日新聞』一八九〇年四月二十九日

ジギスムンドは山を出るとき「衣装」をまとったこと、「同類」が多くいる場所に行ったことなどをはじめ、「人間」社会で見聞きした現実を言い立てるが、クロータルドは、いずれも「知らず」と応じ、それは「夢」を見ていたのだと教え、もし続きを見たいのであれば、「悪しき心」を起こしてはいけなさと訓戒する。宮殿で出会った「美しき動物」ロザウラとの再会を願うジギスムンドは、忠告を守ると誓い、「夢」を見るために眠り込む。その間に、クロータルドは、再びジギスムンドを宮殿に運び込む。ロザウラはもともとモスコ―伯の許婚者でありながら、モスコ―伯の心変りで、現在はモスコ―伯妃の侍女となって屈辱を忍んでいたロザウラは、帰ってきたクロータルドにジギスムンドへの愛情が本心であり、一生を捧げたいと伝える。ロザウラが看護するなか、目覚めたジギスムンドは、こんな楽しい夢を破らないために自分は悪念を起こさないから、「番人」（クロータルド）を呼んでくれと頼む。やって来たクロータルドに対し、ジギスムンドは、夢を破らないためにと同じようなことを言いかけるが、クロータルドは、そんな山の中にいたことなどはない、それこそ山の中のことこそ夢ではないかと言う。ジギスムンドが重ねて宮殿での自分の非礼で粗暴な振る舞いを述べると、それについてもすべて「知らず」と答えたクロータルドは、宮殿こそ現実で山中こそ夢なのだと答える。「石窟に寐ね、草葉果実を食ひ、鉄鎖に繋がれて山獣に伴ふ、博士ハ是を夢と説けり、王殿に居り、佳味珍羞に飽き、錦繡に纏はれて美人と遊ぶ博士ハ是を夢と説けり」（一九回）と、いずれが夢でいずれが現実かが分からなくなったジギスムンドとクロータルドとの間のやりとりは次のように続く。

「番人よ、汝山中に在りし時ハ現在の有様を好き夢なりと説きしに非らずや、却つて今又山に在りし時を夢なりと説く、予ハ果して孰れが是なるやを知らず」博士ハ答ふ「そもく自由言葉を發し手足を使ふ動物を人と云ふ人ハ諸々の動物に長たり、而して此人に長たるものハ王と名け王の生ませられしを王子とす、今殿下ハ王子たり後日王となりて我々人民の長とならせある、最も尊きおん身なり、斯る尊きおん身にして豈で山中に住みたまはん、現に殿下ハ此宮殿の外何処へも赴かせられし事なし、去りながら人として悪しき念慮を抱く時ハ必ず悪しき夢を見て睡中苦痛を感じるものなり、思ふに殿下ハその以前好からぬ心を生せられし故長き悪夢を見たまひしならん」王子ハ頻りに思煩

ひたる後「好し山中に在るを以て夢とせんか、予ハ彼の如き悪夢を厭ふ、而して悪しき夢を避けんと願はゞ好からぬ心を起こすべからず却つて現在をもつて夢とせんか、予ハ此の如き好夢を愛す、而して好き夢を見続けんとならバ悪しき念を生べからず、兔にも角にも予ハ現在の快樂を喜んで山中の苦患を嫌ふ、されバ再び他の動物に害を加へんと云ふが如き悪しき心を生せざるべし、萬一予に誤ちあらば憚る事なく殺へ呉れよ予ハ直ちに思止るべきに」此一言を聞くに及び博士ハ餘の嬉しさに涙落ち声震へり「賢くも悟らせたまふものかな斯れバ再び悪夢を見ず、連りに幸福を受けたまはん「予ハ此美しき動物と永く一所に住み得べきや（「夢」一九回、『東京朝日新聞』一八九〇年五月四日）

「美しき動物」と称されるロザウラとともに住み続けたいという願いが、ジギスムンドを変えたことを確信したクロータルドは、国王に対面を求める。そのとき側にいたモスコー伯は、今度は鎖に繋いで来るのか、それとも甲冑で身を守り「獵獣者」に護衛させないといけないのかと皮肉を言うが、国王は対面を許す。誰もが一週間での教化を怪しむ中、登場したジギスムンドは、非礼と粗暴を詫び、「孝順」を誓う。その態度は優美さにあふれ、品に満ちていた。モスコー伯が式の途中で顔色を変えて退出する中、式場は喜びにあふれ、やがてロザウラと結婚し国王となったジギスムンドは、世界中の国々から讃えられる「賢王」となったことを伝えて大団円となる。

こうした結びにも、夢かと思われた現実を真の現実とし、ひどい現実を過去の夢と化するような「教化」によって世界中から讃えられるという日本の夢と現実が「婉曲の筆」で表現されている印象がある。「夢」の連載は、一八九〇（明治二三）年四月から五月にかけてである。約半年後の十一月には、前年に公布された大日本帝国憲法の施行と帝国議会の開設が控えていた。「夢」における夢と現実の二項対立と反転の構造は、文明開化以前の未開ないし半開の状態から、わずか二〇年ほどで近代国家としての体裁を整えた日本の夢と現実の構造にも重なっていたのではあるまいか。

#### 4 おわりに

以上のように、「夢」の特色は、作品の世界という点では、ポーランドという外国を舞台にした小説であることにある。作品の構成の点では、二項対立の構造が、作品の大枠から表現の細部にいたるまで採用されていることにある。多くの二項対立の中でも特に注目さ

れるのは、①ポーランドとロシア、②動物と人間、③夢と現実の三つであり、こうした対立を通じて、作中のポーランドで展開する物語が、未開・半開の状態から文明国家として西洋列強に追いつかなければならない日本を「婉曲」的に表現していると考えられる。なお、「夢」には原作があり、翻訳・翻案小説である可能性が高いが、それが翻訳・翻案であるとしても、右に述べてきた理由から、「夢」は文明開化の日本を描き、一八九〇（明治二三）の憲法発布と国会開設とも関係する時事性の高い作品として受容されたと考えられる。なお、桃水の個人的な事情との関係では、重篤な病の中で実感した現実と夢との関係が、作中の現実と夢との関係と重なりと考えられる。最後に翻訳・翻案小説について付言する。

一八七〇年、最初の日刊紙である『横浜毎日新聞』の発刊以来、諸新聞社は発行部数を伸ばすため様々な戦略を工夫したが、部数の伸長は順調ではなかった。売り上げが伸びなかった原因は様々な考えられるが、新聞を読む習慣そのものがなかったのも一因である。部数伸長の戦略の一つが小説の連載であった。連載小説は、読者層の拡大と毎日新聞を読む習慣の定着に貢献したともいえる。新聞小説の増加は、小説家には収入の機会の増大であるが、それだけに苦勞もあつた。小説の人氣が部数と関連する以上、人氣を博すための工夫が必要になる。毎日の締め切りを守りながら、変心しやすい読者の心をつかみ、他紙の連載小説と競争するのは容易なことではない。「新奇」な趣向に富んだ新作が次々と出てくるものではなく、文明開化の風潮を受けて海外の情報を求める趨勢がある以上、創作の手段の一つとして海外小説の翻案が採用されたのは当然であろう。桃水が新聞小説を連載した明治二〇年代は翻訳・翻案小説の連載は珍しいことではない。当時の翻訳・翻案小説の流行について『やまと新聞』（一八八七年四月二七日）に次のような記事が載せられている。

近頃頻々出版せる人情小説なるものを買ツて読むに（略）其趣向ハ大抵西洋の焼直しイナ直訳にして日本の人情に疎く読で格別感心せず考へて別段の妙味もなし（略）新聞紙の続き物も亦然り

「夢」が連載された一八九〇年も、『読売新聞』には「一円紙幣の履歴ばなし」（坪内逍遙訳、二月一日―三月一三日）、『国民新聞』には「地震」（森鷗外訳、三月一七日―二六日）、『東京中新聞』には「ぼんぺい栄華の夢」（益田克徳訳、九月一四日―一〇月四日）などの翻訳・翻案小説が連載されている。

翻訳・翻案小説の場合、当然ながら原作があるが、それを明示する場合もあれば、原作の存在自体を明示しない場合もある。「特に翻案と名乗りたる数多からざりしも、其裏面には西洋若くは古代小説の翻案が多く行はれしは明なり」(『太陽』一八九七年一月)という証言もある。原作名また原作の存在自体を明示しない場合も相当多かつたのである<sup>121</sup>。

翻訳・翻案には外国語の読解力が必要であるが、明治期には、そうした読解力を持たずに翻訳・翻案小説を作っている作家もいる。例えば、『やまと新聞』を創刊した条野採菊は、多くの翻案小説を残しているが、彼自身は外国語が全くできなかったと伝えられる。つまり、原作(西洋小説)を読まずに翻案小説を書いていたことになる。原作の日本語訳を参照して執筆していたと考えられる。

「夢」にも原作があると考えられるが、桃水の場合は、どうであろう。英語塾の共立学舎で学んでいたことは分かっているが、英語の能力に関する記録は残っていないため、その能力の程度を確かめることは難しい。「夢」の創作については、作中での固有名詞の使用やポーランドの歴史との呼応などから原作(典拠)はあると考えられる。ただ、それを桃水みずから翻訳したのか、条野採菊のように第三者の翻訳に依拠したのかは確定し難い。原作(典拠)との関係は今後の課題にしたい。

---

<sup>121</sup> 堀啓子「明治期の翻訳・翻案における米國廉価版小説の影響」『出版研究』三八(〇)(日本出版学会、二〇〇八年)、二九頁

## 第六章 「胡砂吹く風」論——『朝鮮紀聞』『雞林医事』との比較を中心に

### 1 はじめに

明治期に朝鮮を訪れた日本の作家は朝鮮の風俗をどのように表現したのか。朝日新聞社の特派員として釜山駐在を長く勤め、朝鮮関係にまつわる多くの記事を執筆している桃水は朝鮮を舞台とした「胡砂吹く風」を発表している。「胡砂吹く風」は主人公林正元が親の復讐を果たし、朝鮮の様々な問題を解決して後に朝鮮の最高顧問になる物語である。この作品は一八九一（明治二四）年一〇月一日から一八九二年四月八日まで、一五〇回にわたって連載される。『東京朝日新聞』連載時は毎回挿絵とともに掲載され、朝鮮の地理や風俗などが小説内で言及されている。時には読者の理解を図るために「付（附）記す」の形で、本文内で言及された朝鮮の慣習を説明している。この作品と関連して、樋口一葉は次のような日記を残している。

（明治二十五年）十二月七日。大人より文あり。朝日新聞にかねてのせたる小説、こさふく風、更に一本にまとめて世に出さんとするを、いかで御歌一首めぐませ給はらずや。（略）直にかへししたためて、歌は一首、よからねども林正元をよめるの成けり。

（樋口一葉「道しばのつゆ」<sup>122</sup>）

単行本で出版された時、樋口一葉は半井桃水の依頼で『胡砂吹く風』の題歌として、「朝日さすわが敷島の山ざくら あはれかばかりさかかせてしかな<sup>123</sup>」という和歌一首を贈っている。また、その鑑賞を日記に残している。

（明治二十六年二月）二三日。（略）胡砂吹く風は朝鮮小説にて、百五十回の長編なり。

桃水うし、もとより文章粗にして、華麗と幽邃とをかき給へり。又みづからも文に勉むる所なく、ひたすら趣向意匠をのみ尊び給ふと見えたり。なれども林正元の知勇、香蘭の節操、青楊の苦節ともにいさゝかもそこなはれたる所なく、見るまゝに喜ぶべきは喜ばれ、歎くべきには只涙こぼれにこぼれぬ。さるは編中の人物活動するにはあらで、我

<sup>122</sup> 『樋口一葉全集 第三卷（上）』（筑摩書房、一九七六年）

<sup>123</sup> 『胡砂吹く風 前編』（今古堂、一八九三年）

が心の奥にあやつるものあればなるべし。田中みの子ぬしは、学ふかからず、識も又高からざる人なれど、胡沙マヤふく風につきて批難し給ふ所あまた有し。そも当れる説にはあらざりけめど、とまれ、完美の作にはあらざるべし。（樋口一葉 「よもぎふ日記」<sup>124</sup>）

一葉は「胡砂吹く風」の文章はともかく、登場人物に興味をもっていたことがわかる<sup>125</sup>。従来の先行研究では、「胡砂吹く風」が小説でありながらも、朝鮮紹介をしていると捉える論が多く、「胡砂吹く風」が持つ朝鮮の紹介書としての価値について論じられてきた。特に、「はしがき」の次の文章はしばしば注目されている。

朝鮮国の土地風俗人情の変制度文物工芸の異に至るまで尽く之を記す、今や朝鮮論ハ東洋の一問題たり之が国情を写すの小説大いに世人を裨益すべしとハ社友諸氏の教唆、西洋小説ハ多く見る末だ世界を朝鮮に取れるものなしとハ小説記者の煽動なり

（「胡砂吹く風」はしがき、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月一日）

この内容から分かるように、桃水は「胡砂吹く風」を通して日本の隣国である朝鮮の土地・風俗・人情などを小説の中で紹介しようとする意図を持っていたのは確かである。「胡砂吹く風」における朝鮮の説明を論じる従来の先行研究では、桃水が「胡砂吹く風」を通して朝鮮文化を紹介していること、紹介された朝鮮文化を一連の基準において整理していること、そして「胡砂吹く風」における朝鮮の描写は桃水の朝鮮に対する認識であることが指摘されている<sup>126</sup>。

<sup>124</sup> 『樋口一葉全集 第三卷（上）』（筑摩書房、一九七六年）、二一四頁

<sup>125</sup> 桃水が一葉に与えた影響に関する論文に、佐藤慶子の「樋口一葉文学に及ぼした半井桃水の影響——『胡砂吹く風』を通じた『春香伝』と『九雲夢』の受容——」（『日本文学』第六（東国大学校日文学研究所、一九八七年三月）がある。これは、桃水が韓国古典小説『春香伝』と『九雲夢』を土台にしたと思われる『胡砂吹く風』を通して、『春香伝』と『九雲夢』に関する一葉の理解を探って、彼女の作品への影響を述べたものである。

<sup>126</sup> 例えば、桃水の意図を踏まえながら、鄭美京は「新聞小説『胡砂吹く風』に描かれた朝鮮」『韓国言語文化研究』第一号（九州大学韓国言語文化研究会、二〇〇五年一二月）において作品の執筆動機、朝日新聞の朝鮮認識や当時の朝日新聞の読者層などについて論じている。しかし、小説内で描かれている小説の内容よりも、作品の執筆動機、朝日新聞の朝鮮認識や当時の朝日新聞の読者層などに焦点を当てて論じている。「胡砂吹く風」の朝鮮の紹介書の側面に注目した権美敬は「風俗資料としての小説——『胡砂吹く風』、『小説東学党』での『付記す』の問題

ところで、「胡砂吹く風」の「はしがき」の末部で、桃水は次のように述べている。

記者桃水画に疎く画師年英実地を知らず唯韓人の写真数葉を得之と小池正直氏の雞林医事（非売品）鈴木信仁氏の朝鮮紀聞等に画く所の衣冠器具を参看して毎回の挿絵を作る故に往々実際と違ふ事もあるべし／編中記す所の名詞ハ重に彼国通用の熟語を採り我が訳語を振仮名とす／最も奇異なる慣習の如きハ時々毎回の末に付記すべし（／原文改行）  
（「胡砂吹く風」はしがき、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月一日）

ここでは、挿絵担当の右田年英<sup>127</sup>が『朝鮮紀聞』と『雞林医事』を参考にして、毎回の挿絵を描いたと述べている。朝鮮に行つた経験もなく、朝鮮の事はあまり知らなかった年英は朝鮮関連の書籍や写真を頼りに「胡砂吹く風」の挿絵を描くしかなかった。そのような資料の中で少なくとも『朝鮮紀聞』と『雞林医事』を参考にしたのは確かであろう<sup>128</sup>。一方で朝鮮について詳しい桃水でも、読者に朝鮮の事をより理解しやすく伝えるためには、従来の朝鮮関連書籍や記事を参考にしながら、「胡砂吹く風」を連載したと考えるのが自然であろう。実際、「付記す」において、桃水は『朝鮮紀聞』や『雞林医事』に言及している。仮に『朝鮮紀聞』と『雞林医事』を参考にしながら「胡砂吹く風」を執筆していたのであ

——『日本語文学』第三二号（日本語文学会、二〇〇六年二月）において、『胡砂吹く風』の風俗資料としての役割を論じている。権は「胡砂吹く風」の「付記す」の内容を表でまとめている。政治・観光・女・文学・葬式・刑罰の総六項目に分類し、この小説が持っている風俗資料としての価値を論じながら、一九五二年に岡島宝文館から出版された服部徹の『小説東学党』の「付記す」と比較している。しかしながら、趙惠淑は「메이지（明治）시대 조선 문화의 소개양상——나카라이 도스이（半井桃水）『胡砂吹く風』에 대해서——」『日本思想』第一六号（韓国日本思想史学会、二〇〇九年六月）において権の研究に趙は作品内に紹介された朝鮮文化を分類、整理したという意義はあるものの、「付記す」の部分のみをその研究対象として分類したという限界があると指摘している。一方、趙は「胡砂吹く風」の「付記す」を含め、作品内容に描かれている朝鮮像全般を取り扱っているながら、「胡砂吹く風」は価値判断をせずに朝鮮文化を紹介している部分と、日本人の視線で朝鮮を評価、紹介している部分があることを指摘しながら、朝鮮や朝鮮人に対する評価をプラス的な評価とマイナス的な評価に分けて考察している。

<sup>127</sup> 右田年英は、一八六三年生まれで桃水より三歳若く、以後桃水の小説の挿絵をほぼ担当している。元々は浮世絵師であって、浮世絵の他にも洋画も学んでおり、リアリティーのある筆致の歴史画、風俗画を描く。その他、役者絵・戦争画・新聞挿絵も多い。（小林忠・大久保純一『浮世絵の鑑賞基礎知識』（至文堂、一九九四年五月）参考）

<sup>128</sup> 本章では挿絵については論じないが、「胡砂吹く風」における挿絵の部分は『朝鮮紀聞』より『雞林医事』を主に参考にしたと推測される。

れば、「胡砂吹く風」における朝鮮に関する描写や説明と、『朝鮮紀聞』と『雞林医事』の内容とを比較すると、どの部分が影響を受けたのか明らかにすることができる。

本章では、主にこの「はしがき」の文章に着目して、「胡砂吹く風」における朝鮮に関する記述を『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』と比較する。本来であれば、挿絵の部分を含めて論じるのが妥当であるが、挿絵は除き、「胡砂吹く風」の本文に限って論じることとする。

## 2 『朝鮮紀聞』『雞林医事』について

『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』以前にも、朝鮮に関する書籍は明治期に多く出版された。朝鮮関連書籍は特定の分野に集中してはいるのではなく、多様な分野にわたっている。その中でも、『朝鮮紀聞』は朝鮮の全般的な事情を紹介して、『雞林医事』は朝鮮の医学に関する書籍だ<sup>129</sup>。

「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』や『雞林医事』を比較する前に、『朝鮮紀聞』や『雞林医事』について簡単に紹介しておく。『朝鮮紀聞』は一八八五(明治一八)年五月に愛善社版が出版され、一八九四年一月に博文館版が出版されている。愛善社版の一九〇項に対し、一八九四年博文館版では三六四項と増項し、内容にも大きな変化が加えられている<sup>130</sup>。桃水の「胡砂吹く風」が一八八九年から翌年にかけて『東京朝日新聞』で連載されていた事

<sup>129</sup> 特に明治初期における朝鮮に関する出版物は多い。棲井義之の『朝鮮研究文献誌——明治・大正編』(龍溪書舎、一九七九年)によると、朝鮮に関する明治初期の地誌・紀行は「朝鮮誌略」(一八七五)、「朝鮮八域誌」・「朝鮮地誌」(一八八一)、「雞林地誌」(一八八三)、「朝鮮八道誌」(一八八七)などがある。また、明治初期に朝鮮の事情一般を紹介したのは、「朝鮮事情」(一八七四)、「朝鮮見聞録」(一八七五)、「雞林事略」・「朝鮮事情」・「朝鮮近況紀聞」(一八七六)、「通俗新編朝鮮事情」(一八七八)、「朝鮮近情」(一八八二)、「兵要朝鮮事情」(一八八四)、「朝鮮紀聞」(一八八五)、「それから」(雞林医事)(一八八七)など、数多くの書籍が出版されている。

<sup>130</sup> 一八八五年版『朝鮮紀聞』の目次は以下のとおりである。「歴世、王室、儀式、事大、地理、節序、人物、官制、風俗、台籍、文芸、武備、刑罰、度量、服色、飲食、第宅、物産、禽獸、農圃、雜聞」一方、一八九四年版の目次は以下のとおりである。「朝鮮国略史、古朝鮮、三韓、三国後高麗、新朝鮮、日韓交通略史、三韓の藩属、太宰府の防禦、倭寇の剽掠、勘合船の往来、豊太閣の出征、徳川氏の修交、明治政府の修交、地理略説、八道の形勢、都府、開港場、河流、山岳、島嶼、日本より京城に赴く沿道里程、王室竝に支那朝貢、官制、外官職制誌に儀仗、官吏登用乃ち科擧、兵備、刑罰、財政、土地租稅俸祿、通貨及度量衡、教育及文学、産業、農業、商業、漁業、物産、風俗、冠婚葬祭、戸籍、衣服、飲食、住居、節序、人品、遊戯、雜聞、朝鮮国土沿革図表、同歴代沿革図表、大院君の伝、朴泳孝の伝」

を考えてみると、「はしがき」で桃水が参考にしたと言及する『朝鮮紀聞』は一八九四年の博文館版ではなく一八八五年の愛善社版であろう。

一方、『雞林医事』は軍医小池正直（一八五四—一九一四）が朝鮮釜山の濟生医院長として派遣された時の見聞を記した労作である。一八八七年九月に出版された本書は非売品とあるが、発行所の記載はない。書名は『雞林医事』であるが、上篇においては地誌、風俗、飲食、物産等を記述し、下篇においては病院と患者、疾病など医事に関する観察を具体的な統計を添えて記述している<sup>131</sup>。

本書は一八九一年、森鷗外によって独訳され「Zwei Jahre in Korea（朝鮮に於ける二年間）」の題で International Archiv für Ethnographie Bd. IV, 1891 に訳載された<sup>132</sup>。櫻井義之は『明治と朝鮮』において『雞林医事』を次のように評価している。

上篇の総説的叙述も、一般事情論ではなく、診療を前に、病気の起因する風習、生活様式等を調査し、医学、衛生学的見地から、その根源に省察を加えたもので、周知な用意がうかがわれる。下篇は本書の本領である。疾病の種類、日鮮病類の比較から彼我治療の方法および、陸軍々医本部に報告した濟生院第一年報を主として編述したものである。附載されている日韓病類対比表、科目別施療患者表の如き当時の状況を知る貴重なデータとなるものである(略)<sup>133</sup>。

ところで、『雞林医事』は関係方面にのみ配布された非売品であるにもかかわらず、桃水は入手したと考えられる。どのような経路で手に入れることが可能であったのか。青木袈裟美・佐藤恒丸の『男爵小池正直伝』（陸軍軍医団、一九四〇年）によると、著者小池正直は山形県鶴岡出身で、一八八一年には第一大学区医学校（現東京大学医学部）を卒業。一八八三年一月には外務省御用掛を兼務として、釜山に派遣され濟生医院長となった。濟生

<sup>131</sup> 『雞林医事』の目次は以下のとおりである。「【目次】「上篇」地形、氣候、風俗、人品、人物、度量衡、舟輿、樂器及雜品、織物、三物、衣服、居住、飲食、朝鮮衣食住及体力論「下篇」医院位置及造構、医院職員及事務、患者景況（日本患者、朝鮮患者にわけて、外科、蛮民病地方病、寄生病についての記述）、補遺において（鼈腹、肝臓病、半身不遂症、齲齒の状況を記す）」

<sup>132</sup> 小池と森鷗外は第一大学区医学校時代の同期で、交流があった。

<sup>133</sup> 櫻井義之「小池正直著『雞林医事』について」『明治と朝鮮』（櫻井義之先生還暦記念会、一九六四年一二月）、一六四頁

医院長は従来海軍軍医であったが、この時から陸軍軍医になり小池正直が赴任となったものである。済生医院長の任務は、釜山駐在の領事館員、居留民及び在任朝鮮人の診療から温泉の検査、公務死傷者の検死などにいたるまで担当し、着任早々から多端を極めた。

ここで注目すべき点は、小池が釜山の済生医院長として派遣された期間が一八八三年から一八八五年という事である。この期間はちょうど桃水も特派員として釜山に駐在しており、桃水の滞在期間も一八八一年から一八八八年なので重なっている。桃水は、細見貞<sup>134</sup>の宝善堂や岸田吟香<sup>135</sup>の楽善堂などの薬品特約販売も引き受けていた<sup>136</sup>。なので、桃水と済生医院長の小池が釜山の日本人居留地で知り合った可能性は充分考えられる。

### 3 「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』の比較

桃水が「胡砂吹く風」内で朝鮮に関して記述した部分は「附記す（付記す）」が多く、「付記す」や本文を含めて、朝鮮に関する記述や説明は小説が後半部に進んでいくほど、減っていく。ここでは、朝鮮に関する記述部分をいくつか択し、『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』と比較していく。「胡砂吹く風」内で『朝鮮紀聞』や『雞林医事』の名前が直接登場する部分が二か所ある。

付記す竜沢の事ハ朝鮮紀聞に詳し（略）

（「胡砂吹く風」一五回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月二〇日）

付記す東萊温泉の事ハ雞林医事に詳らかなり明治一六七年の頃より浴場を（略）

（「胡砂吹く風」二〇回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月二五日）

竜沢の伝説や東萊温泉に関する項目については、『朝鮮紀聞』や『雞林医事』が言及されており、ひとまず桃水が『朝鮮紀聞』や『雞林医事』を参考にしたのは確かであろう。

<sup>134</sup> 細見貞は村山と交流があった人物で、一八三七（天保八）年丹波国黒井村（今の兵庫県春日町）に生れ、亀山藩の御用商人になった。一八七八（明治一）年、大阪平野町に「宝善堂」という薬種商を開業、政商的手腕をふるって鎮台病院などに販路をひろげた。（前掲、『朝日新聞社史 明治編』三四頁）

<sup>135</sup> 岸田吟香（一八三三—一九〇五）新聞記者、事業家

<sup>136</sup> 前掲『上野理一伝』二二〇頁、前掲『近代文学研究叢書 第二五』三三七頁

一方、その他の朝鮮に関する項目ではどうであろう。まず、「胡砂吹く風」の四回と五回の「付記す」と『朝鮮紀聞』の「訴冤」を比較してみよう。

付記す冤罪を訴ふる者ハ国王御幸の道筋に待受け申聞鼓しんぶんこといふを鳴して直訴し又ハ王宮の正門にある鐘をついて訴へ烽燧台に火を揚ぐる等ハ皆之死をもつて冤を争ふ者なり、訴ふる者不正なれば罪死に該る、冤訴中子孫の父祖の為にする子の親の為にする妻の夫の為にする弟の兄の為にする是を名けて四件といふ、(略)

〔胡砂吹く風〕四回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月六日)

此国にて冤枉あれバ觀察使に訴へ尚聞かれざれば司憲府に訴ふを例とす

〔胡砂吹く風〕五回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月七日)

訴冤ハ京中なれば其主宰官に訴へ他ハ觀察使に訴ふ猶冤抑有れば司憲府に訴へ司憲府も採用せざる時ハ申聞鼓を打て之を訴ふ申聞鼓ハ国王挙動の時道に傍て之を打ち訴をなす王ハ宮に還りし後糺問あり若し不正の事あれハ訴る者を死刑に処す冤抑とハ子孫ハ父祖の為にし妻ハ夫の為にし弟ハ兄の為にし是を称して四件と云ふ(略)

〔朝鮮紀聞〕二〇頁)

「訴冤」の説明は『雞林医事』には該当する項目が無いため、「胡砂吹く風」と比較するのは不可能であるが、朝鮮の冤罪を訴えることに関する記述と『朝鮮紀聞』の「訴冤」の部分に似ているのが確認できる。その他にも

#### ①女医

附記す女医ハ重に官婢にして婦人の療治を専らにすれど或ハ健康なる男子病に託して招く事あり○男医婦人を診る時ハ室の入口に帳帷を垂れ顔を見るを得ざらしむ若し腹部を按ずる等のことあれば常に顔を背け居そむるとぞ

〔胡砂吹く風〕三二回、『東京朝日新聞』一八九一年二月二一日)

女医ハ京中に数多あり各道官婢の内にて適當の者を扱ひ官より医道の稽古申付るなり此医ハ男女に限らず病を療する故に其容貌美なるものあれハ或ハ病に托しこれを招くことあり其本ハ婦人の療治を専らにせしなりと婦人病あり男医を招ぐときハ房内入口に帳幕を下し脉体を診察せしむ  
〔朝鮮紀聞〕六四頁

## ②一月一五日の風俗

附記す正月十五日ハ踏橋と称し京中の人酒肴を携へ月の出る時より橋上に席を設け思ひくに樂しみを取る此夜七ツ橋を超ゆるときハ厄難を免るとて橋上大に賑ふと云々  
〔朝鮮紀聞〕八四回、『東京朝日新聞』一八九二年一月一七日

同十五日ハ踏橋と称し京中の人酒肴を携へ月の出る時より橋上に席を設け思ひくに樂みを取る此夜七ツ橋を超ゆるときハ災難を免るとて橋上大に賑へり(略)

〔朝鮮紀聞〕五七頁

## ③五月五日の風俗

五月五日端午の節ハ四名日の一にして男子ハ角觥に遊び女子ハ鞦韆に乗り城内の賑ひ言はん方なし別けて去年(略)

〔胡砂吹く風〕一〇二回、『東京朝日新聞』一八九二年二月九日

五月五日ハ端午にて限りある祝日とし国王より端午扇と云を京官及び(略) 端午には女子ハ鞦韆の遊びをなし男子ハ角觥の戯をなし(略)  
〔朝鮮紀聞〕五八頁

などに記述されている説明は、それぞれ似ている部分や参考にした部分が確認できる。以上のように「胡砂吹く風」における朝鮮に関する記述の一部と『朝鮮紀聞』の記述に類似点を確認できたが、それに対し『雞林医事』の場合はどうであろうか。

附記す東萊温泉の事ハ雞林医事に詳らかなり明治一六七年の頃より浴場を畫り半ハ日本人の浴場に借入る、事となれり

(「胡砂吹く風」二〇回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月二五日)

『朝鮮紀聞』では温泉に関する項目は見当たらないが、『雞林医事』では温泉について詳しく説明されている。桃水は「胡砂吹く風」二〇回の「付記す」では東萊温泉と書いているが、温泉に関しては『雞林医事』に詳しく説明されていることを述べている。『雞林医事』の温泉に関する言及は金山温泉についてのものなので、東萊温泉とはおそらく金山温泉のことであろう。しかし、実際は東萊温泉の名称が正しく、金山温泉という名称は小池の間違いである可能性が高い。

金山温泉ハ東萊ヲ距ル約五韓里金山村ニ在リ其道平坦ニメ運輸ニ便ナリ金山ハ(略)其ノ泉湯ノ成分ハ衛生局大阪試験所ノ分成表ヲ掲ケテ之ヲ示シ併セテ其理學上ノ検査ヲ左ニ記ス(略)故ニ該鉱水一容量ハ摂氏二十四度ノ温ニ於テ〇、〇六八一三容量ノ游离炭酸氣ヲ含有セルモノナリ 以上ノ試験成績ニ拠ルニ該水ハ「アルカリ」性食塩泉ト名クヘキモノナリ

(『雞林医事』一三一—一九頁)

一方、「胡砂吹く風」において温泉の記述をみてみよう。

東萊を距る十余丁金井里と云へる処に一の温泉ありて好く諸病を治すと聞えぬ林正元ハ祖母なる清香尼に別れし日金井里に至り温泉に浴して身を浄めんと浴場近く立寄しに折から浴客ありと覺しく何やらん語らふ声す、男子か女子か、女子ならば帰るを待んと戸外に立て聞ともなく聞取し話の趣<sup>おもむき</sup>、声ハ正しく二人なり<sup>ふたり</sup>

(甲) 今夜の仕事の手筈を聞たか

(乙) 聞たとも、大分今度ハ旨さうだ(略)

(乙) 今夜の仕事ハ旨く行ぜ、何故といつて見る、相手ハ梁山の金持で金瑠明といふ商人、春早々から(略) (「胡砂吹く風」二〇回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月二五日)

『雞林医事』では金山温泉について、衛生局大阪試験所の分析表を参考にその理学上の検査結果を記している。弱アルカリ性、無色無臭である事を述べて、含有成分を数字で掲げた後、試験成績に依って「アルカリ性食塩泉」と名づくべきものであると説明されている。『雞林医事』では科学的調査結果を中心として、記述されていることが分かる。その反面「胡砂吹く風」では、温泉については簡単に説明されている。二〇回の展開において温泉の紹介はあまり重要ではなく、主人公林正元が梁山商人金琇明の危険を察知する場所の意味しか持たない。桃水は「付記す」で温泉に関する事は『雞林医事』に詳しいと説明しているのみで、まるで『雞林医事』に温泉に関する項目があることを読者に伝えているかのようにみえる。

「胡砂吹く風」における朝鮮の説明や描写について『朝鮮紀聞』を参考にした部分はいくつかの項目で確認できたが、それに反して『雞林医事』を参考にした部分はあまり見当たらない。これらの事から、桃水は主に『朝鮮紀聞』を参考にしながら「胡砂吹く風」における朝鮮の地理や風俗について記述したと考えられる。『朝鮮紀聞』で取り扱っていない項目については、『雞林医事』を参考にしたとみるのが妥当であろう。

#### 4 「胡砂吹く風」と半井桃水

今まで述べてきたように、桃水が「胡砂吹く風」における一部の朝鮮に関する説明は、『朝鮮紀聞』の内容をそのまま写した部分や、大きく参考にした部分が確認できる。しかし、「胡砂吹く風」で見られる朝鮮に関する紹介や説明には、両書との関係が薄いものもみられる。例えば、一回の地理、五回の壬辰録（文学）、日本人の呼称、六六回の論介（歴史的人物）・蠹石楼（地理）など『朝鮮紀聞』と『雞林医事』で説明されている項目とは異なる部分や、『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』では取り扱っていない項目が存在する。「胡砂吹く風」の五回、七回、六九回、一一九回などには朝鮮の文学作品名が具体的に登場する。

附記す壬辰録ハ豊公朝鮮征伐の顛末を記せる彼の国の書なり書中日本人を指して倭賊と記す(略) (「胡砂吹く風」五回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月七日)

附記す催仲傳ハ彼国人の持囃す小説なり

(「胡砂吹く風」七回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月九日)

小説春香伝（桃水数年前大阪朝日に記載す）の妓生春香同九雲夢の才女春雲を指す  
（「胡砂吹く風」六九回『東京朝日新聞』一八九一年一月二六日）

二人が話す傍らにて正元はさきの程より頻りに本を見て居りしが今漸く読み畢れば

（柳）もうお仕舞いになりましたか

（正）やっと済んだ（柳）大層面白さうな御本でございます事ねへ

（香）九雲夢といつて面白い小説です

（「胡砂吹く風」一一九回、『東京朝日新聞』一八九二年三月二日）

朝鮮の文学に関する記述は『朝鮮紀聞』や『雞林医事』には存在しない。にもかかわらず「胡砂吹く風」で朝鮮の文学作品名が具体的に登場するのは、桃水が対馬出身であることと関連がある。対馬は古くから朝鮮との貿易や交流のため、日本の他の地域よりも朝鮮の文化と接する機会が多かった。また、朝鮮語を学習するため、朝鮮の古典文学を教材として朝鮮語を習っていた。半井家は元々対馬宗家の医者を務めており、桃水の父も釜山の倭館で勤めたことがあり、桃水が朝鮮の文学をよく知っていたのは当然であろう<sup>137</sup>。

さて、前述で言及した東萊温泉という場所についてももう少し話を進めたい。東萊温泉は「胡砂吹く風」の他の部分においては、あまり登場しない。むしろ、東萊温泉を他の場所に変えても「胡砂吹く風」の展開にさほど影響は与えるとは考えにくい。しかし、桃水は『雞林医事』まで参考にしながら、「胡砂吹く風」で東萊温泉に言及している。一八八二（明治一五）年三月二五日『大阪朝日新聞』の雑報には東萊温泉についての記事が載っている。その記事とは様々な病に効果がある温泉で世間に知られている温泉が東萊にあるという内容の記事である。記事の最後の部分には実際現地を訪れた人の話であると書かれているこ

<sup>137</sup> 日本で朝鮮語学習の公式機関として知られているが、対馬の「韓語司」である。雨森芳洲により設立された「韓語司」については、松原孝俊・超眞璟「雨森芳洲と対馬藩「韓語司」設立経緯をめぐって」『日本研究』一二（中央大学校日本研究所、一九九七年）・「雨森芳洲と対馬藩「韓語司」における学校運営をめぐって」『比較社会文化』第三卷（九州大学大学院比較社会文化研究科起要、一九九七年）に詳しく説明されている。超眞璟は「일본〈한어사〉에서의

한국어교육」（釜山大学校博士論文、二〇一〇年）において「韓語司」の韓国語教育に使用された教材について初級・中級・上級と分けている。特に超は上級の段階で、古典小説を使用して講読したと指摘している。

とから推測してみると、この記事を送ったのは、当時釜山で特派員を務めていた桃水であろう。桃水が実際東萊温泉を訪問した事実については、この記事ではわかりにくい。しかし、少なくともこの時期から桃水は東萊温泉の事を知っていて、「胡砂吹く風」内に簡単にでも東萊温泉を言及したとみることは出来るであろう。

次に「胡砂吹く風」内で登場する地名に関しては、釜山内の地名が他の地域の地名より多く具体的に記されている。地理に関する記述は『朝鮮紀聞』の場合、朝鮮全国に渡って比較的均等に説明されている。一方、『雞林医事』では小池が釜山に滞在したことから釜山地域についての記述は多いのだが、『雞林医事』の場合、小池は医学的観点から地理を説明しているため、「胡砂吹く風」における地理の描写とはその性質が異なる。

言い換えれば、『朝鮮紀聞』や『雞林医事』にも釜山に関する記述は現れているものの、「胡砂吹く風」内で釜山に関する描写や説明は、『朝鮮紀聞』や『雞林医事』の説明とは若干異なるということである。

「胡砂吹く風」でしばしば釜山地域の地理が詳しく記されるのは、桃水自身の朝鮮に対する経験からその要因を推測できる。桃水は幼年時代、父とともに釜山の倭館で生活した経験がある。その経験と特派員として釜山に駐在した経験が「胡砂吹く風」で反映されているという解釈が可能である。

「胡砂吹く風」で桃水の経験が反映しているもう一つの部分は「刑罰」に関する項目である。

附記す官の都合にて收贖を許す事あり初より收贖を見込み召捕つて獄に繋ぐもあり、懷胎の女七十以上の老人ハ收贖せしむるを例とす○記者曾つて屢々杖罪を見たり棍に大中小の分ちありて唯罪人を地上に俯さしめ袴をまくりて臀部を打つものと梯子やうの木に縛り着け俯向に寝させて撃つものと其法さまぐなり棍手棍を加へ罪人地を咬んで煩悶する中或ハ手指を動かして賄賂を約し棍手に憫れみを乞ふ事ありて一指を屈り二指を示す是れ錢の多寡なりと云ふ○囚人の賄ハ自家より送る

（「胡砂吹く風」三四回、『東京朝日新聞』一八九一年一月一四日）

附記す凌置処断ハ先づ手足を斬り後に首を落す或ハ云ふ其後鹽漬にして国中を引廻はすと其手足を斬り首を落すまでハ記者曾つて実見せり、斬罪ハ髻に小き箭を通し之に

綱を結びて前面に引き首を延ばさせて斬る何れも鈍刀を用ひる法にて幾撃かの後僅かに身首処を異にす (「胡砂吹く風」八九回、『東京朝日新聞』一八九二年一月二三日)

「胡砂吹く風」における刑罰の説明は、刑罰が具体的にどのようなように実行されているかに焦点をあてて説明されている。これは、桃水が朝日新聞社の特派員として釜山に滞在していた時の出来事と深く関係している。

明治一四年という年は、一方では紳士遊覧団が日本に派遣され、また開化への意欲がようやく官吏の間にも見えはじめた時期であった。しかし一方、日本外交を司る東萊府でも守旧党が多数を占め、また全国で開港に反対する上疏が相次ぎ、暗殺など不穏な事件も頻々と起こるなど、国全体が開花と鎖港に揺れた年であった。そうする内に八月には釜山近郊で日本人の殴打事件が発生し桃水はその事件の主人公になってしまう。これが亀浦事件である。(略)この事件では半井桃水は事件の当事者として警察に拘留され、領事裁判によつて禁固六十日の刑に処せられたが、対馬の巖原で刑は執行され、逆に人氣者になったという。その警察拘留の間に領事警察官が同情的であるので筆、硯を借りて、弟の名義を用いて通信を『朝日新聞』に送ったのだった<sup>138</sup>。

桃水が朝日新聞社の特派員として釜山に滞在している時、桃水は亀浦事件で当事者として拘留されている。本来であれば、朝鮮の刑罰を受けるべきであるが、一八七六年の日朝修好条規第十款<sup>139</sup>により治外法権が認められ、朝鮮国内の日本人に対しては朝鮮の法律も裁判権も及ぶことはなかった。したがって、桃水も朝鮮の刑罰を受けることはなかった。しかし、この時の経験は桃水が朝鮮の刑罰や司法に対する関心を持つ一つのきっかけになった可能性は高い。その結果、亀浦事件の時の経験が「胡砂吹く風」における刑罰に関する説明が多くみられることと密接に関係していると考えられる。

<sup>138</sup> 上垣外憲一、前掲書、一二六一―一二七頁

<sup>139</sup> 日本國人民朝鮮國指定ノ各口ニ在留中若シ罪科ヲ犯シ朝鮮國人民ニ交渉スル事件ハ總テ日本國官員ノ審斷ニ歸スヘシ若シ朝鮮國人民罪科ヲ犯シ日本國人民ニ交渉スル事件ハ均シク朝鮮國官員ノ查辨ニ歸スヘシ尤雙方トモ各其國律ニ拠リ裁判シ毫モ回護袒庇スルコトナク務メテ公平允當ノ裁判ヲ示スヘシ (『朝鮮國ト交換條約御布告』 (一八七六年三月))

## 5 おわりに

本章では、「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』を比較してきた。その結果、小説内で朝鮮に関して描写する際にも、『朝鮮紀聞』や『雞林医事』を参考にした部分が確認できた。特に「胡砂吹く風」における一部の朝鮮に関する説明は、『雞林医事』より『朝鮮紀聞』の内容をそのまま写しとった部分や、大きく参考にした部分が多い。しかし、小説本文における朝鮮に関する全ての描写部分について、『朝鮮紀聞』や『雞林医事』を参考にしたということではない。『朝鮮紀聞』や『雞林医事』を参考にした部分を除いた記述は、桃水の目線から朝鮮を描写した可能性が高い。その中でも、いくつかの項目は桃水の朝鮮での滞在経験が強く反映された部分である。朝鮮の文学作品や地名などを具体的に小説中で言及することで、より具体的に朝鮮について読者に伝えている。しかしながら、「胡砂吹く風」を執筆する以前に二回朝鮮に在留していることから、朝鮮に対する桃水の目線は当時の朝鮮を實際経験していない知識人とは異なる。桃水が経験した多くの経験から、なぜ特定のトピックについては詳しく書くのかについて疑問が残る。また、背後に桃水の経験があることを踏まえつつ、その記述が作品や読者にどういった影響を与えているのかという点もいまだに明確ではない。

## 第七章 「胡砂吹く風」論——歴史的事実と小説的虚構のあいだ

### 1 はじめに

一八九三（明治二六）年二月二二日の『東京朝日新聞』に、「（広告）今古堂出版発売所 金桜堂朝鮮小説胡砂吹く風桃水痴史」という広告が載せられている。「胡砂吹く風」が単行本として出版されるという知らせである。広告に「朝鮮小説」と打ち出されていることから明らかだが、小説は朝鮮を舞台としている。前章でも言及しているが、「胡砂吹く風」が朝鮮を素材にしたことについて、従来の研究はジャンル論的、テーマ論的な分析にとどまっているといえる。具体的には、『近代文学研究叢書 第二五卷』（昭和女子大学、一九六六年九月）において「胡砂吹く風」が伝奇小説として分類されていることから、それに対する反論として、この小説を政治小説として読み解く試みがなされてきた。上垣外憲一は『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日韓関係』（筑摩書房、一九九六年一月）において「胡砂吹く風」は伝奇小説と政治小説の特徴を持つが、より政治小説に近いと述べている。また、全円子も「半井桃水の人と文学——『胡砂吹く風』を政治小説として読む——」（『岡山商大論叢』第三九巻第三号、二〇〇四年二月）及び「アジアから見た日本文学——半井桃水が近代の初期に政治小説を書いたことの意味——」（『清心語文』第一〇巻、二〇〇八年七月）において「胡砂吹く風」は従来の敵討ちの物語のような伝奇小説的な趣向をとりながら、実は政治小説的な思想性を伴っていると論じている。

その他、「胡砂吹く風」が持つ朝鮮紹介書としての価値についても論じられてきた。そこでは、桃水が本作品を通して朝鮮文化を紹介していること、紹介された朝鮮文化を一定の基準において整理していること、そして、本作品における朝鮮の描写が、桃水の朝鮮に対する認識であることが指摘されている。

そこで本章では、登場人物の設定という角度から論じることを試みる。新聞記者として東京朝日新聞に勤めていた桃水が、新聞小説の連載を始めたのは一八八九年のことである。初めての小説「唾嚙子」の連載を始めたのが三月一〇日なので、『東京朝日新聞』が創刊された一八八八年七月一〇日から約八か月後に、桃水は小説を執筆しはじめたことになる。その後も桃水は、「くされ縁」・「小町奴」・「海王丸」など、続けて数多くの新聞小説を執筆していく。その作品数は一八八九年から一八九一年の間だけでも一四作品に及ぶ。当時の新聞小説が新聞の販売部数を伸ばすための一種の目玉商品であったことを踏まえると、桃

水の小説は同時代の読者にある程度人気を得た小説であったと考えるのが妥当であろう。桃水自身も同時代の読者を意識した新聞小説を次々と発表していく。なかでも「胡砂吹く風」は多様な読みが可能な作品である。そのひとつの要因として、登場人物の設定における「同時代」の反映が挙げられる。

前作「下闇<sup>140</sup>」と見比べてまず気づくのは、登場人物の膨大な数である。主人公林正元のほかに、実に多くの人物が登場しては次々と姿を消していく。林正元の物語が小説の中心ではあるものの、同時代の朝鮮を舞台としながらストーリーが展開する。虚構の人物と歴史上の人物が混在しているのも「胡砂吹く風」の特徴のひとつである。桃水はこの膨大な数の登場人物をどのように設定し、小説を執筆したのであるか。前章では、「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』及び『雞林医事』の比較について論じた。ここでは、「胡砂吹く風」が朝鮮に関する描写をする際に、『朝鮮紀聞』や『雞林医事』を参考にした部分が確認できた。

本章では桃水がどのように「同時代」を反映させたのかについて登場人物の設定という視点から論じる。既述のとおり、桃水は朝鮮滞在の経験があり、その経験は本作品に反映している。特に本作品では、作家に馴染みのある場所や出来事の記憶を基に、物語が展開している。そこで、主人公林正元及び対立関係にある悪役を中心に桃水の記憶や経験がどのように反映しているのか考察する。また「胡砂吹く風」で描かれた事件は、歴史的史実を基にしている。その中でも注目されるのは、桃水が経験した史実の場合、それを新聞記

---

<sup>140</sup>。「下闇」は『東京朝日新聞』に一八九一年七月五日から八月二六日まで連載された作品。あらすじを紹介しておく。奈波の領主重胤の次男重宗は馬鹿げた行動を繰り返す愚か者である。重胤は隣国竹田信兼との戦いで弓に射られ亡くなり、嫡子で暗愚な重光がその後を継いだ。しかし、実際のところ重胤の異母弟勝見重員が自分の思いのままに動かしている。竹田との戦いで戦死した重胤は、実は争乱に紛れて勝見に射殺されたのだ。

ある日通り道で重宗を見た、竹田信兼の娘藤姫は重宗に一目ぼれする。藤姫と重宗の縁談の話が出て来るようになり、重宗は婿入りを求められる。今は愚か者になったとはいえ、昔は聡明であった重宗に対して疑問を持っていた勝見は、重宗を竹田のもとへ追い払うよい機会と思う。しかし重宗は病のため「呆痴者」になってしまった。実は、父重胤の死の真相を見抜いていた重宗は、わざと馬鹿げた行動を繰り返していたのだ。もはや邪魔者はないと安心した勝見は、ついに重胤の後室貞松院を我がものにして重光に取って代ろうとする。ひそかに忠臣たちと反撃の機会をうかがっていた重宗がついに決起し、隣国の竹田も加勢して勝見を滅ぼす。重宗は藤姫と婚姻し、両国を統一する。

事として残していることである。作家の経験や史実の作品への反映を解明することで、同時代を生きた桃水の時代認識を明らかにする。

## 2 主人公林正元について

桃水は東京朝日新聞の専属小説家として数多くの新聞小説を書いたが「胡砂吹く風」は異色なものとして桃水研究のなかでも比較的取り上げられることが多い作品である。その特異性は次の二点に整理できる。具体的には、朝鮮を背景に林正元という混血児を主人公に仕立てあげた点、そして「付（附）記す」の形で、小説内で描写された朝鮮の慣習や地理などを説明している点である。確かに、「胡砂吹く風」における主人公の設定は、それ以前に桃水が『東京朝日新聞』へ連載した新聞小説群と比べてみると比較的目立つ設定といえる。林正元は日本人の父と朝鮮人の母を持つ混血児として設定されている。水野達朗は「半井桃水『胡砂吹く風』」において、主人公林正元の混血児という設定が持つ意味について次のように述べている。

林正元は日本人と朝鮮人との間で生まれた混血児として設定されており、彼のもつこの〈中間性〉は小説のなかで大きな役割を果たしている。しかしその役割とは、「日本人」でも「朝鮮人」でもない、境界線の曖昧な中間領域を生きることではなく、境界線によって明確に区別された二つの領域を自在に往復することである。すなわち、「日本人」としても「朝鮮人」としても振る舞うことができるということになる<sup>141</sup>。

ここで水野は、日本人と朝鮮人の間に生まれた混血児である林正元は、「中間性」を持つ存在であると指摘している。また、草薙聡志「半井桃水 小説記者の時代（7）ヒーローは朝鮮を目指す」、『朝日総研リポート AIR21』、朝日新聞社総合研究本部、二〇〇五年一〇月号）において、主人公林正元が西郷の征韓論を支持している点、日本は朝鮮に対する野心などないと語っている点などを踏まえ、日本の立場を代弁した存在として取り扱われるべきだと指摘している。

確かに、林正元の混血児という設定は「胡砂吹く風」において重要な役割を果たしてい

<sup>141</sup> 水野達朗「半井桃水『胡砂吹く風』」（『比較文学研究』第七〇号、一九九七年八月）、一七六一―一七七頁

る。権美敬は「明治文学に描かれた朝鮮——明治二十年代の「朝鮮関連小説」を中心に」（「金沢大学大学院社会環境科学研究科 博士論文」二〇〇二年六月）において、主人公の混血児という設定は、小説のなかで朝鮮理解と朝鮮紹介というプラスの役割ばかりを担っていたのではなく、スパイとしてのマイナスの役割も担っていたことを指摘している。

しかし、従来の研究で指摘されたこと以外にも、混血児という設定は「胡砂吹く風」のなかで舞台装置としてうまく活用されている。たとえば、林正元が日本と朝鮮内を自由に移動できることは、混血児という設定だからこそ可能なことである。

（正）実はそつと館を脱けて朝鮮内地に旅行をします」主人はいよいよ仰天して（主）マア貴君飛んでもない事を、そんな馬鹿げた真似はお廢なされませ、捉まると殺されて仕舞ひますぜ」正元更に怖るゝ色なく（正）夫れも承知、併し捉まらぬ様にして行きませ、必らず氣遣つてハ下さるな（主）何してゝそんな旨い事が出来ませものか、尤も貴君ハ言葉が旨くて朝鮮人やら日本人やら分らぬとハ云ふものゝ、ツイ先年も日本人で大層言葉の上手な人が一切韓人の扮打で内地旅行をしました時も何か品物を道に落し拾取つて袂の中へ入れうとハせず日頃懐に物を入れる癖がついて居た所から突然懐へ入れかけて化の皮が頭はれ半殺しになつたとのこと言葉だけ旨くてもなかゝ内地へ通れません、マアゝお止なされませ、第一親御に私から申訳がありません」

（「胡砂吹く風」一四回『東京朝日新聞』一八九一年一〇月一七日）

朝鮮時代において、日本人は朝鮮内を自由に移動することは固く禁じられていた。正元と主人の会話には、日本人が身分を隠して朝鮮を旅行している途中、その正体が暴かれて大変なことになったという描写が見られる。本来であれば、日本人としての林正元は、朝鮮の限られた場所に滞在しなければならぬ。にもかかわらず、林正元が日本と朝鮮内を自由に移動できるのは混血児という設定だからである。実際、林正元は混血児という身分を利用して、朝鮮人として朝鮮内を自由に移動している。

正元ハ翌日より頻りに旅装を整へて日本郵便船の帰航を待ち当国を發して日本東京に至りしハ其年の秋の初にて或る時ハ林正元として同郷出身の貴頭を訪ひ又或時ハ外務省に出入し内より外よりさまゝに謀りしかバ

〔胡砂吹く風〕九一回、『東京朝日新聞』一八九二年一月二六日)

このように、朝鮮と日本の条約を結ぶために朝鮮を離れて日本で様々な人物と会う時には、日本人あるいは朝鮮人に自由自在にその身分を変えている。そして、混血児としての林正元のアイデンティティを読み取れるのが、彼の名前である。

一人の老人(略) 正元が傍に来り(老) 少年ハ何処の人かね」突然として問掛られ正元はつと思ひしが左あらぬ体にて老人を拝し(正) 私ハ釜山の者です(老) 左様か、姓ハ(正) エ、姓ハ林、はやしといふ林の字です(老) 林家、左様か、名ハ(略)(正) 名ハ正元(略) (『胡砂吹く風』一五回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月一〇日)

林正元という名前は、日本でも朝鮮でも通用可能な名前である。朝鮮でも「林」という名字は実在し、「正元」と漢字は異なるが、発音的には「正元」と同音の名前も実在している。ところで、日本人と朝鮮人の間に生まれた混血児という設定を、桃水はどのようにして思いついたのであろうか。林正元の父林正九郎は元薩摩藩の武士であったが、義に困って同藩の武士を斬ってしまったために故郷にいられなくなり、対馬の小島浪之進の元に身を寄せて、彼の従者として朝鮮の釜山倭館に渡る。林正元は、この倭館という空間で生まれた混血児である。田代和生は『新・倭館——鎖国時代の日本人町』において、倭館を次のように説明している。

近世倭館の住民になるには対馬藩の許可を必要とし、禁止された行為は処罰される。日本人は長期・短期をとわず館内への入居を義務づけられ、館外に居住することは許されない。(略) 同伴に家族、とくに妻や娘といった女性を連れて行くことはできない。日本人の居住が許された町でありながら、永住できない理由がそこにある。女性の同伴禁止は、長崎出島のオランダ人や唐人屋敷の中国人も同じである。しかしまだしも、かれらには長崎で日本女性(遊女)と出会えるチャンスがある。(略) 唐人屋敷への遊女の出入りも多く、年間述べ<sup>マ</sup>人数にして二万人以上に達するといふから驚きである。生まれた子供は長崎の役所へ届けられ、父親の本国へ渡ることこそ禁じられていたが、母の遊女ともども屋敷内で養育することが許されている。ところが倭館は、たとえ妓生<sup>きせん</sup>であつて

も女性の出入りはできない。(略) 女性と付き合うことはできない。女性の倭館の出入りが発覚すれば、直ちに「交奸」(密通) 事件として扱われる。仲介した者は必ず死罪、女性も男性も悪くすれば死罪を含めた厳罪がくだる。朝鮮側が理想とする近世倭館は、完璧なまでの「男の町」である<sup>142</sup>。

日本内の居留地とは異なり、女性の出入りは厳しく禁じられていたが、実際は倭館でも密通は行われていた。「交奸」(密通) は密貿易や喧嘩と同様に、倭館で多発する事件のひとつであった。朝鮮側は交奸に対して厳しい態度で臨んでおり、仲介者及び女性は双方ともに死罪とし、日本人の相手にも同様の措置を求めてきた。一七二一年に別名交奸条約といわれる辛卯条約が締結される。その内容は「一、馬島の人(対馬の者)が、倭館を抜け出して女性を強姦すれば、死罪。二、女性を誘引(おびき出すこと)して和奸する者、あるいは強姦未遂の者は、流罪。三、倭館に入館した女性を通報せず交奸する者は、それ以外の罪を適用」である。この条約以後、交奸が摘発されたのはわずか五件だけである。しかし、捕まるのは運の悪い者だけで、大部分の交奸が見逃されていたことは想像に難くない<sup>143</sup>。第一九代の朝鮮国王、肅宗すくせうの在位期間の歴史を記録した『肅宗録』(一八二八年)によると、釜山の百姓のなかでは倭人の出産が多かったという。これらの記録を見ても、混血児という設定は不自然ではなく、むしろ歴史的事実を反映しているとさえいえる。

では、桃水はこの倭館における厳しい法慣習を知っていたのであろうか。桃水の出身が対馬であることを考えると、桃水は幼い頃から倭館における厳しい法慣習や密通事件を知っていた可能性が高い。倭館では、対馬を離れるにあたって必ず医者を一人つけていた。半井家是对馬藩主の宗家に仕える典医の家系であり、父の半井湛四郎は、草梁倭館での勤務のために釜山に渡ることがあった。一八七二(明治五年)に、桃水は倭館で医師として勤務する父のもとに行き、給仕として働くようになる。この時の暮らしについては、桃水が残した資料が限られているため、はっきりとしたことは言えないが、少なくとも林正元が混血児であるという主人公の設定は、釜山の倭館で生活した桃水ならば十分に設定可能である。

<sup>142</sup> 田代和生『新・倭館——鎖国時代の日本人町』(ゆまに書房、二〇二一年九月)、一七二—一七三頁

<sup>143</sup> 田代和生、前掲書、一八二—一九一頁

一方、小説の主人公が混血児であるという設定を、当時の読者はどのように受け取ったのであろうか。江戸時代であれば、鎖国のために国際結婚は想像しがたいはずである。しかし、一八七三年三月十四日に明治政府は日本人が外国人と結婚しようとする場合は届け出て許可を得るよう布告した。

自今外国人民ト婚姻差許左ノ通条規相定候条此旨可相心得事

一日本人外国人ト婚嫁セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クベシ

一外国人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フベシ若シ故有ツテ再ビ日本人タルノ分限ニ復センコトヲ願フ者ハ免許ヲ得能フ可シ

一日本人ニ嫁シタル外国ノ女ハ日本ノ国法ニ従ヒ日本人タルノ分限ヲ得ベシ

(三か条略)

一外国ニ於テ日本人外国人ト婚嫁セントスル者ハ其国或ハ其近国ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公使及ヒ領事官ハ裁下ノ上本国政府へ届出ヘシ<sup>144</sup>

このようにして、正式に国際結婚を許された第一号は、長州の南貞助という英国に留学したことのある男といわれている。『読売新聞』には、日本人と外国人の結婚に関する記事がしばしば載せられている。たとえば、一八七五年七月二五日には、神戸在住の中国人が大阪の日本人女性と結婚したという記事が、一〇月一〇日には、日本人の娘が雇われ先の英人と結婚したという記事が掲載されている。さらに、一八九〇年一〇月五日には、「外国人と結婚する者の注意」という記事が掲載されている。これらの記事を踏まえて考えると、一八九一年に発表された新聞小説の主人公が混血児という設定は、当時の読者にとって受容可能な設定といえよう。鎖国のため国際結婚が想像しがたいものであった江戸時代に比べて、明治時代は国際結婚が可能になり、実際に国際結婚の例が見られるようになった。そうした状況を踏まえて、桃水は自らの小説に混血児の主人公林正元の登場させたのではなからうか。

<sup>144</sup> 『明治六年三月十四日太政官布告第三百三号』（内閣官報局編『法令全書（明治六年）』一八八九年五月）

### 3 悪役鄭思錫について

「新聞の連載ものは、毎日欠かさず読まなければ、その興味はまづ大半失はれると云つていゝ。」と岸田国士が「新聞小説」(『東京朝日新聞』一九四〇年三月一六、一七日)で語っているように、新聞連載小説は、一日一回ずつ連載するというハンディキャップを持っている。そのハンディキャップを乗り越えるためには、読者が毎日連載小説を読みながら、次回への期待を持つように、読者の興味を維持し続けなければならない。明治一〇年代、数多くの新聞小説を執筆した「魯文派」つまり仮名垣派は、その方法として膨大な数の人物を登場させている。松原真によると、仮名垣派の新聞小説では、大量の人物を捨て駒のように投入し、間断なく次々と事件を発生させることで、読者の興味を維持していたと指摘している<sup>145</sup>。

桃水にとって、連載回数が一五〇回にも及ぶ小説を執筆することは初めての挑戦であり、「胡砂吹く風」以前の作品群の連載回数は、多くても約六〇回にとどまる。そのため、約六か月にわたって連載された「胡砂吹く風」には、その壮大な物語を反映するように様々な人物が次々と登場する。ある時には脇役で、ある時には敵の姿で、正元の前に新たな人物が登場する。新聞記者から新聞小説家へと転職した桃水にとって、読者の興味を維持することは第一の課題であったといえる。林正元が次々と現れる新たな危機に立ち向かう姿を描くことで、桃水はこの課題を乗り越えようとしていたといえよう。

主人公が小説内でより鮮明に輝くための一番簡単な方法は、主人公と対立関係にある悪役を登場させることであろう。なかでも、林正元の生涯に大きく影響する悪役として因縁の深い鄭氏兄弟の一族がいる。兄鄭思錫は「胡砂吹く風」前半を、弟鄭思用は小説の後半を担当する悪役である。特に鄭思錫は林正元の母である元小燕を死に追い込み、後に林正元の妻になる香蘭を側室に迎えようと陰謀をめぐらせる人物である。桃水の初期新聞小説では主人公と対立する悪役がしばしば登場する。特に、一八八九(明治二二年)の『東京朝日新聞』に連載された小説には、「胡砂吹く風」の鄭思錫のような悪役が登場する。たとえば、「小町奴」や「海王丸」にも、主人公の復讐相手であり、同時に主人公を危険に追い込む悪役が登場する。

「胡砂吹く風」前半の主な内容は、鄭思錫に対する林正元の復讐談である。正元は小島

<sup>145</sup> 松原真「仮名垣派から黒岩涙香へ——明治二〇年前後の新聞小説について——」(『阪神近

代文学研究』第一七号、二〇一六年五月)、二八頁

(父の親友であり、正元の育ての親)から母の存在を打ち明けられる。母を捜すため、また鄭思錫に復讐するため、正元は釜山の倭館に渡る。ところが、捜していた母はすでに鄭思錫の命令で斬首されたと聞かされ、正元は鄭思錫への復讐の決意を新たにす。その時偶然、正元は梁山の巨商金珠明が賊に襲われようとしていたところを救い、彼の家に身を寄せることになる。復讐の相手、鄭思錫は今も梁山で権勢を振るっている。金珠明には一人娘香蘭がいて、彼女は正元に恋心を抱く。しかし、鄭思錫は香蘭を妾にするため、金珠明を無実の罪に陥れ、拷問にかける。

この部分は、桃水が朝日新聞の海外特派員として韓国の釜山に在留していた時期に、『大阪朝日新聞』に連載した「鶏林情話春香伝」(以下「春香伝」)を下敷きにしてしていると指摘されている<sup>146</sup>。年若い二人が互いに惹かれていく様はまさに「春香伝」を連想させるし、さらにその若く美しい娘を中央から下った官吏が権勢にものをいわせて我がものにしようとするところも、「春香伝」ときわめて類似している。

ここで、元小燕(正元の母)が鄭思錫について言及している部分に注目したい。

(女)(略)妾が父元貞陽ハ久しく梁山郡の大守を勤めて民百姓の帰服も好く天晴れ仁者と申されましたが隣県の令鄭思錫とて去年漢陽から参つた人是非妾を妻にしたいと媒婆をもつて申し入ましたのを父ハ其人の性質を嫌ひすげなう断りました処其恨から今年の春暗行御使の参られた時鄭思錫ハ賄賂を遣つて父が事を悪しさまに言立て夫ればかりか元貞陽ハ反謀の企てる者と訴へとうく父ハ夫が為め漢陽に召れて死刑となり妻子までも同罪と申渡されましたのを父に代つて郡守となつた鄭思錫から命乞ひして母と妾を助けましたも深い思案のあつての事(略)

(「胡砂吹く風」三回、『東京朝日新聞』一八九一年一〇月四日)

ここでは鄭思錫の悪行について語られている。ところで、一八八一年七月二七日の『大阪朝日新聞』には「在韓の社友某氏より又々左の通り報道せられたり」と始まる朝鮮関連の記事がある。

<sup>146</sup> 上垣外憲一、前掲書、二四七頁。また、権美敬、前掲論文、「明治文学に描かれた朝鮮——明治二十年代の「朝鮮関連小説」を中心に」において、「胡砂吹く風」と「春香伝」の関係について言及している。

○在韓の社友某氏より又々左の通り報道せられたり

慶尚左道水軍節度韓圭稷（正三品）が赴任以来壓制の名四隣に高かりしか客年夏秋の頃米穀貢進の時に際し諸官吏か其貢米を預り居ながら日本人に売り拂ひ其金を以て京城近傍に於て賤價に買入れ之を彼貢米と偽り（略）日本人に売拂ふて利を得るなど不正の間に私利をのみ営み居たりし折柄茲に黄海道の大商李某が日本人の注文を受け数百石の米穀を積載て西生浦に來りしに水營へ此実を以て届けなば没取せらるゝを恐れ偽て全羅道より京城に運輸する貢米なりと云做したるを韓氏聞て例の手術を施し（略）

献納の米を買い取り、横流しする悪徳役人韓圭稷について書かれているこの記事は、三回にわたって掲載されている。右の記事に続く二八日の記事では、李氏が正当な理由なく逮捕されたという内容が、さらに、三〇日の記事では、韓に拷問をかけられて死んだ李氏の復讐をするため、李氏の寡婦が韓を誘惑して刺殺したと伝えられている。新聞にはこの記事を書いた記者名は記載されていないが、一八八一年であれば桃水が朝日新聞の朝鮮特派員として釜山に滞在した時期と重なるため、おそらく桃水が書いた記事であろう。そのように考えると、韓圭稷という人物が「胡砂吹く風」の鄭思錫のモデルと考えてもよいのではなからうか。

鄭思錫も小説内で横流しをし、香蘭の父金洙明を無実の罪で逮捕している。さらに、鄭思錫は香蘭が親を助けるために鄭の側室になる予定の夜、林正元により斬り殺されている。こうした類似点からしてみても、桃水が過去の記事を活用しながら登場人物を創作したと考えるのが妥当であろう。

#### 4 桃水が描きだした歴史的事実とその結末

敵対する一派との争いで負傷した春使令を救ったことをきっかけとして、正元は李同仁の親友で名家の李嘉雄を知ることになる。李嘉雄は妓生、香雲をめぐって内官の鄭思用と対立しており、李嘉雄派の春使令は鄭思用の使令たちに襲われていたのである。「胡砂吹く風」の六九回で言及されて以降、後半の悪役である鄭思用が本格的に登場する。

李嘉雄との酒宴で正元は鄭思用が鄭思錫の弟であることを知る。やがて席に侍った妓生香雲は、驚くことに金珠明の娘香蘭であった。酒宴が終わり、香蘭の家を訪問した正元が帰った後、香蘭は何者かに拉致されてしまう。言うまでもなく、鄭思用の仕業である。監

禁されている香蘭を無事脱出させた正元は、この後、朝鮮をめぐる歴史的事件に巻き込まれる。

このように、「胡砂吹く風」は前半が林正元の個人的事件を中心に展開しているのに対して、小説の後半になると実際の歴史的事件が主な内容を占めるようになる。それでは、「胡砂吹く風」の舞台になる明治期の世界と日本はどのような時代を迎えていたのであるのか。世界的には大きな歴史的变化があり、世界各国が各々の勢力拡大に力を入れていた時期である。少数の西洋列強がアジア、アフリカ地域を強制的に植民地へと編入しようとする帝国主義の時代であった。特に東アジアは従来の中国を中心とした秩序が揺らぎ、近代化された西洋列強が東アジアに進出して、その影響力を拡大しようとした。このような帝国主義の侵略に対応して、東アジア各国は自国の国家的発展段階と危機意識に基づいた様々な近代化への道を歩むことになった。東アジアで最初に近代化を成功させたのは日本であった。ペリー来航に象徴される西洋列強の軍事的圧力に危機を感じた日本は、それまでの鎖国政策を捨てて 開国の道を選択せざるを得なかった。近世における封建的要素を取り払おうとする明治維新を迎えた日本は、様々な改革を断行した。

一方で、一八七五年の江華島事件の影響で朝鮮は日本と日朝修好条規を結び、一八八二年七月二三日には漢城で「壬午軍変」と名付けられる国兵の反乱が起こった。日本公使館が攻撃されて館員らが死傷し、さらに王妃閔氏一族も殺傷されて、朝鮮国王が住む王宮が占領される結果となった。手を焼いた朝鮮政府は清国に援軍を求めるが、これを口実に日本も大軍を朝鮮半島に送り込んだ。仁川および漢城で両国の軍艦や軍隊が対立し、日清の關係は一触即発の危機に直面する。その後、八月三〇日に濟物浦条約が結ばれ、事件は解決へと向かう。

桃水が朝日新聞の特派員として朝鮮に滞在していた期間は、一八八一年から七年間にわたる。桃水の朝鮮滞在時期と重なる代表的事件といえば、この「壬午軍変」と一八八四年の「甲申政変」である。「甲申政変」は新清派である事大党政権と親日改革派である独立党の対立が背景にあり、日本公使竹添進一郎と結んだ金玉均ら独立党がクーデターを起こす。しかし、清国側の反撃で失敗し、金らは日本へ亡命することになる。本来であれば、本章では後半の悪役である鄭思用について論じなければならないが、あえて「壬午軍変」に注目しながら桃水が描き出した歴史的事実とその結末について論じる。なぜなら、この事件をきっかけに小説の中心が主人公の個人的物語から朝鮮をめぐる歴史的物語

へと移行するからである。

そもそも、後半の悪役である鄭思用は陰謀をめぐらせる人物ではあるが、前半の鄭思錫と比べると、それほど目立った役割を果たしているとはいえない。むしろ、朝鮮をめぐる起こる歴史的故事を展開させるための脇役にとどまっているといえる。

香蘭の拉致事件が解決してまもなく「壬午軍変」が起こる。桃水は実際にこの事件取材しており、『朝日新聞社史 明治編』（朝日新聞社、一九九五年七月）によれば、日本に実情を報告するよう本社から指示された桃水が、漢城から釜山へ脱出してきた朴義秉という独立党の男を取材した記録が残っている。一八八二年八月八日の朝日新聞に「この人の話を聞くに（略）京城の常備兵は五千七百人ありしが本年旧正月菜給与を与ふることなく六月に至り漸く一月分の給与を与へたり。斯れば兵士一同みな不平なる所へ又其米は残らず腐敗なしたり。是に於て大に怒」という、「壬午軍変」の直接的な原因や漢城の様子を記した記事が載せられている。しかし、「胡砂吹く風」における「壬午軍変」に関する描写は、桃水が記者として書いた記事とは異なっている。これは、実際の歴史的事件を小説的虚構として取り込んだためと考えられる。

久しく摂政の地に立ちし青硯宮の国父君ハ数年前より外戚の爲め権勢を奪はれ快々として楽しまず折もあらバ彼等を仆し再び政を躬らせんと望みしに近年政府ハ専ら開国の主義を執り（略）当時此国の党派を分てバ政府即ち外戚党、国民即ち国父党の二つにして先の者ハ日本に依り後の者ハ支那に依り各々自己を利せんと欲し己あるを知つて暫く国あるを打忘れたる徒のみ、其何れに属するをも厭ひ真誠独立の国を建てんと望みたる李嘉雄が如きに至りてハ暁天の星と稀れなり、李嘉雄一派の参謀たる正元ハ（略）

（「胡砂吹く風」八八回、『東京朝日新聞』一八九二年一月二二日<sup>147</sup>）

小説内では、「壬午軍変」について説明するため、事件以前の朝鮮国内の状況をはじめ、清国や日本との関係が描写されている。「胡砂吹く風」の前半は林正元の個人的な事件を中心に展開しているため、現代の読者が読んでも集中して一気に読める。一方、後半は当時の歴史的事件についての知識がなければ小説を読むのは難しい。しかし、現代の読者と比

<sup>147</sup> 『東京朝日新聞』一八九二年一月二二日。なお、新聞紙面では「八十七回」となっているが、正しくは「八八回」である。

較して当時の読者にはそれほど難しい小説ではなかったと思われる。「胡砂吹く風」の連載開始は一八九一年であるため、一八八四年前後の朝鮮をめぐる歴史的事件も、当時の読者にはそう遠い昔話ではなかっただろう。むしろ身近な事件として、読者は小説を読みながら新聞記事化されたその時代の出来事を想起することもできたのではなからうか。

歴史における朝鮮の運命と「胡砂吹く風」において描かれた明治期の朝鮮とは異なっている。最終回において、林正元は朝鮮国王の信頼を得て同国の最高顧問となり、東アジアの同盟を実現させてその委員長となる。この結末に関して、上垣外憲一は『ある明治人の朝鮮観―半井桃水と日朝関係』において次のように論じている。

このような朝鮮の民衆の心理を理解すれば、一方的な武力による威嚇などが逆効果であることは明白であろう。桃水の提出した解決法は、日本の国籍は持っていないも、日朝の混血児であり、朝鮮人とまったく違わない言葉を話し、完全に朝鮮人として行動の出来る、しかももちろん日本や西洋にも充分理解力のある、林正元であった。その彼が徒手空拳、次第に朝鮮の民衆と上流社会の信望を得、さらに日本の老練な外交官の起用を待って、日本と朝鮮の理想の協力関係がなりたつ、という一種の物語である。しかし、一方にはしやにむな軍備拡張による、軍事力による朝鮮半島の制圧という計画が実現のものとなってきたとき、このような人心を獲得するという、政治外交的手段によって朝鮮との親交を全うし、さらに朝鮮の自立的発展を日本が援助するという理想図を、『朝日』という有力新聞紙上に小説という形で、百五十回も連載したという、この意味は決して小さくはないであろう<sup>148</sup>。

上垣外憲一は「胡砂吹く風」の結末について、朝鮮と日本の友好的関係を将来に期待する結末と高く評価している。ところで、桃水と同時代の人物にフランス人漫画家ジョルジュ・フェルディナン・ビゴーがいる。一八八二年に来日し、一七年あまりの滞在中に数多くの風刺画雑誌や風刺スケッチ本を残している。その代表的なものは、一八八七年から一八八九年にかけて刊行した時局風刺雑誌『トバエ』である。一八八七年二月一五日の『トバエ』に「魚釣り遊び」というタイトルの風刺画がある。朝鮮と書かれた魚を釣り上げようとすると日清に対して、その横取りを企むロシアの姿が描かれている。当時の朝鮮をめぐ、

る日本・清・ロシアの勢力関係をよく表現したものといえよう。こうした状況のなかで、桃水は新聞記者として当時の朝鮮をめぐる国際的状況を把握していたにも関わらず、「胡砂吹く風」の結末として朝鮮・日本・清の同盟を選んだことはあまりにも楽観的と言わざるを得ない。「胡砂吹く風」の結末は非現実的であり、朝鮮に対する日本のパターンリズムの姿勢が読み取れる。

また、林正元の妻香蘭が朝鮮の国籍を捨てて日本の国籍を取得する点や、国父君（国王の父）の誘いにも関わらず、林正元が日本人にとどまることを選択する点、そのうえで朝鮮の最高顧問になるという林正元個人が迎えた結末と、日本の援助（好意）で朝鮮が独立を果たすという結末に対する上垣外憲一の好評価は多少過大な面があるといえよう。

ここで改めて「胡砂吹く風」が『東京朝日新聞』に連載された新聞小説であることに注意したい。当時の新聞小説が新聞社にとって勢力を拡大するための目玉商品としての性格を持っていたこと、『東京朝日新聞』が日本国内の読者を主な対象としていたことを踏まえると、林正元が日本人の国籍を捨てるという結末は当時の読者が受け入れるには無理があったろう。それは、桃水個人の問題というよりは、読者に受け入れられなければならない、新聞小説の限界だったといえよう。

## 5 おわりに

本章では、桃水が「胡砂吹く風」においてどのように「同時代」を反映した登場人物を設定したのかを論じるとともに、小説内で描かれた明治期の朝鮮と同時代を生きた桃水の現実把握について考察してきた。その結果、新聞記事や桃水の朝鮮滞在経験が小説の描写と深く関係していることが明らかになった。

主人公林正元をはじめとする登場人物の設定には、桃水が見た「同時代」が反映されている。「胡砂吹く風」という小説には全編にわたって、桃水の二度の朝鮮経験が反映されている。本章では、前稿に引き続いてその一部を明らかにした。今後も、「胡砂吹く風」と桃水の朝鮮経験の関係性について検討を重ねていきたい。

## 終章

本論の目的の一つは、半井桃水（一八六〇—一九二六）を対象に、新聞メディアとの関係および初期新聞小説の考察を通じて桃水の新聞小説作家としての作家像を提示することであった。従来の文学史的評価では、主に樋口一葉の恋慕の対象として言及され、桃水自身を独立した研究対象として評価する事例に乏しかった。しかし、実態としては、明治から大正にかけて東京朝日新聞社に勤務しながら、記者・小説家として活躍し、多くの新聞小説を執筆している。それは、桃水の作品が、同時代読者に読まれ続けた証である。そうした桃水の評価が乏しいのは、明治期から大正期にかけての新聞小説を新聞小説として検討・研究する視点が未開拓であることも関係する。もちろん、こうした事例は桃水に限らない。たとえば、『何桜彼桜銭世中』作者の宇田川文海も当時の人気作家の一人であった。にもかかわらず、彼もまたその名前だけがシェイクスピア研究者に記憶されているような存在である。桃水や文海などのような作家を再評価するには、その作品が読まれていた当時の読書環境の中で作品そのものを再読する必要がある。

さらに作品研究によって半井桃水を作家として評価するための作家像の提示も目的になるが、序章で仮説的に提示したのは、新聞小説家としての作家像であった。その作家像について考えるための端緒としたのが、樋口一葉の日記（「若葉かけ」）が伝える桃水の発言であった。桃水は、「我思ふに叶ふへきは人好まず 人このまねは世にもて遊はれず 日本の読者の眼の幼ちなる 新聞の小説といわゝ有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様の事をつゝらされば世にうれさるをいかにせん我今著す幾多の小説いつも我心に屑しとしてかきたる物はあらさる也されば世の学者といわれ識者の名ある人々には批難攻撃面てを向ケかたけれといかにせん」と語り、さらに「我は名誉の為著作するにあらず 兄弟妹父母に衣食させんが故也」とも語ったという。前者の発言は、桃水の「新聞の小説」についての見方や考え方を示しており、後者の発言は桃水が新聞小説を書き続けなければならぬ事情を語っている。

桃水は、「新聞の小説」の性格として、商品的には大衆向けの要素を含まざるを得ず、その結果、知識階級の読者には軽視されるのは仕方がないと言っているが、そうした「新聞の小説」に対し最初に「我思ふに叶ふへきは人好まず」と語っている。そこには自分の「思ふに叶ふべき」小説を書きたいという意志がうかがわれる。実際に桃水の初期新聞小説を

検討すれば分かるように、桃水の「新聞の小説」は、「有ふれたる奸臣賊子の伝或は奸婦いん女の事跡の様」であるような旧来の大衆向けの「世話物」や「時代物」の焼き直しというわけではない。そこには大新聞化へ舵を切りつつあった『東京朝日新聞』を取り巻く状況や時事的で国家的な事件や要素の摂取など、「世の学者といわれ識者の名ある人々」の眼も意識したような要素も指摘できる。

本論では、上記の問題意識から、ひとまず桃水の初期新聞小説を対象に、新聞メディアや新聞読者との関係、話材や同時代言説の検討、作品内容や展開等の分析、典拠との比較対照などを通じて、新聞作家としての桃水像を描出することを目的とした。同時に、それなりの蓄積がある明治初期の新聞小説の研究を受け継ぐかたちで、明治中期から後期にかけての新聞小説研究のために、明治中期の新聞小説が持つ性格や問題を多角的に描出するための具体的モデルの提示も本論の目的の一つとして設定しておいた。

以下、各章の内容を振り返ったうえで、本論文の結論と今後の課題と展望を示す。

第一章は、対馬巖原藩の家に生まれ釜山で生育した桃水の伝記事項と新聞小説（大新聞・小新聞）の展開について整理している。また、朝日新聞社の在韓通信員（記者）だった桃水が、本社帰京後の一八八九（明治二二）年以降に新聞小説の執筆に至る経緯を経済的側面で考慮しつつ検討している。

その検討で確認されたのは、桃水が『東京朝日新聞』の新聞小説作家になるまでの経歴に絡む半井家の事情である。この検討によって先に引いた一葉日記中の桃水の発言「我は名誉の為著作するにあらず 兄弟妹父母に衣食させんが故也」という作家活動の背景が具体的に確認された。また、この経済的事情については、当時の朝日新聞社の福利厚生や報酬などの面からも検討している。経済的事情に加え、桃水が『東京朝日新聞』の新聞小説作家になる経緯としては、朝日新聞入社以前の「寄書」家時代や『魁新聞』など小新聞記者時代の人間関係が大きいことを指摘した。小新聞として出発した朝日新聞が、東京に進出して『東京朝日新聞』を創刊し、大新聞の性格も持つような新聞に向けて出発し始めた。東京の諸新聞との競争で優位に立つため、優秀な人材の募集に力を入れていた。その『東京朝日新聞』で、社主から主筆に抜擢されたのが小宮山天香であり、天香は桃水とは大阪の小新聞時代からの旧知の同僚であった。主筆の天香が、桃水の長所をどう捉え、桃水に何を期待したのか、そういう点も、『東京朝日新聞』初期の桃水の小説を考察する上で

は、重要な要素であることを指摘した。その上で、本章では桃水にとって書くことが、経済的な救済である以前に、精神的な救済でもあった可能性について考察している。

第二章は、「啞聾子」を対象にする。同作は、桃水が『東京朝日新聞』に最初に発表した連載小説である。新聞小説家としての能力が試された作品であるが、一介の記者だった桃水が、新聞小説の連載に臨み、どのような創作を試みているのか、その特色を主人公の人物像や作者自身による作品内言及などの方法面から分析している。その分析を通じて、同作が、新聞紙条例違反で廃業に追い込まれた『めざまし新聞』を買収して出発した『東京朝日新聞』の新聞発刊の環境とも関係する「耳と口の大罪」を桃水「得意の婉曲の筆」で表現している可能性を指摘した。あらずじとしては、旧来の「時代物」にも多い仇討の要素を用いながら、新聞紙条例などの新聞を取り巻く時代状況を「婉曲」的に表現している点に、「啞聾子」の特色があるとした。「新聞の小説」の商品性である小新聞向けの旧来の小説の意匠を借りながら、大新聞の読者が喜ぶような時事的問題も表現しようとしている新聞小説家の姿は、桃水の作家像の原型とも考えられる。

第三章は、新聞小説第二作の「くされ縁」を対象にする。「くされ縁」の形式上の特色が二部構成で悪因縁にまつわる二組の男女の物語を描く点にあるとし、第一部と第二部の内容および関係について分析するとともに、二部構成の背景として新聞社との関係を想定する。前作「啞聾子」の三一回に対し、倍増に近い「くされ縁」(五三回)の分量が持つ意味を、作家になりたての桃水の負担と新聞社側の事情から分析している。具体的には、第一部と第二部の間には、『東京朝日新聞』創刊一周年記念日の祝賀があり、その直前で第一部が終了し、その直後から第二部が始まっていることを指摘している。その上で、第一部と第二部の舞台背景が幕末と明治になっており、第一部の救われない結末と第二部の救済が用意される結末という対照には、明治という新時代の科学の可能性が「婉曲」的に表現的されていることを指摘した。また、ここでも、作品全体が、「世話物」の代表的作品である「十六夜清心」の意匠を借りながら、第二部での風俗描写など「新奇」な要素を取り込んでいるという構造において、前作「啞聾子」と通じる新聞小説であることを指摘している。

第四章は、「海王丸」を対象にする。「海王丸」の最も重要な要素を船の沈没事件にあると捉え、明治期の海難事故および新聞での海難事故報道と対比し、「海王丸」の下敷きが八八六年のノルマントン号事件とその報道にあるとする。素材や典拠との比較検討を通して、新聞小説における同時代言説の摂取や受容や変形の様相を明らかにしている。ノルマ

ントン号事件は、現在でも史実として知られているが、同時代を生きていた読者にはより強い反響を巻き起こした事件であった。そのことを諸新聞の社説や新聞記事や広告などによって確認し、ノルマントン号事件に対する人々の関心が、事件報道だけでなく、その他の海難事故や救難制度や保険なども含む種々の言説とも関係することを検討した。その上で、桃水は、ノルマントン号事件に取材しつつ、そうした種々の言説や文脈にも呼応するようなかたちで小説化していることを指摘した。その一方、この作品でも「時代物」の仇討物の趣向が取り入れられており、その点では、基本的に「啞聾子」や「くされ縁」と同じ性格を持つことを指摘した。

第五章は、「夢」を対象にする。「夢」は、野生児である主人公のジギスマンドが、人間社会への復帰の経緯を描く作品で、作中の背景や登場人物の命名などは、当時流行した翻案小説と推測されることを指摘した。ただし、作品執筆の背景には、当時の桃水の健康状態の悪化と入院という出来事が深く関係することを指摘し、作品の夢と現実という問題にも関係することを指摘している。その上で、そうした私的体験を直接的に反映するかたちではなく、西洋を舞台にしている小説化の試みについて考察した。作中の二項対立の構造の分析や舞台がポーランドでロシアによって王位が奪われる危機にあるという作品内容から、日露戦争まで約十年という時期の時代状況と呼応する性格があることを指摘した。この作品も「時代物」的なお家騒動の意匠を持つ一方で、日露戦争前夜の国際状況を「婉曲」的に連想させる一面がある点で、それ以前の桃水の新聞小説と同じ性格を持っていることを指摘している。

第六章と第七章は、従来の評価においても桃水の代表作とされる「胡砂吹く風」を対象とする。第六章では、「はしかき」に『朝鮮紀聞』と『雞林医事』の言及があることに注目し、「胡砂吹く風」と『朝鮮紀聞』および『雞林医事』とを比較検討している。その上で、『朝鮮紀聞』と『雞林医事』の撰取と受容の様相を描出し、個々の場面の作意や解釈について分析している。

第七章では、「胡砂吹く風」の登場人物の設定や舞台について検討する。幕末に薩摩藩士の父と朝鮮貴族の子女であった母の間に生まれた主人公が、維新後に日本と朝鮮を往来しながら戦闘や恋愛などの挿話を綴っていく展開において、作中に登場する人物設定や文脈上での意義などについて同時代的な背景から検討し、明治中期の日朝間に関する同時代的な反映を指摘している。

各章の検討から導かれるのは、序章で仮説的に設定した桃水の作家像の輪郭である。『東京朝日新聞』の新聞小説家としての桃水は、それまでの朝日新聞がそうであったように読者が喜ぶ小新聞的な旧来の「世話物」や「時代物」という商品性の高い意匠を活かしつつ、大新聞に向けて「新出発」をしたばかりの『東京朝日新聞』の新聞小説家として、明治という新しい時代の事件や出来事や問題を「婉曲」の筆で表現しようとしていた。それは、明治中期の新聞メディアの動向とも呼応する作家像になっているのではないであろうか。以上が、本論でのひとまずの結論となる。

以下、その他の気づいた点を補足しておく。

桃水作品の登場人物の人生は、いずれも波乱万丈である。「啞囀子」の捨吉は、復讐と家族を探すため、そして、自らの罪意識とも関わり「啞囀子」を装う。本来であれば受けることない差別を受けながらも、本人の目的を果たすまで偽りを貫く。「くされ縁」では、ロミオとジュリエットともいえる盛一と琴治の因縁、兄弟関係とは知らず恋に落ちるお蔦と盛一。「海王丸」では、父を死に追い込んだ犯人を捜すため、身分を隠し、海王丸沈没の真相を明らかにする清作。「夢」では、野生児として育てられ、異様な動物のような存在から一国の王子になるジギスムンド。「胡砂吹く風」では、混血児で朝鮮の最高顧問になる林正元。いずれも、桃水文学の主人公たちは数奇な運命にもてあそばれながらも、これら初期の小説では、それなりに幸福な結末で結ばれる場合が多い。こうした波乱万丈の人生の様相は、旧来の読者が「世話物」や「時代物」を好むという読者への配慮とも関係しよう。しかし、それなりに幸福な結末が用意され、基本的には勧善懲悪の構図が守られる点は、「明治」という時代を法制や自由や種々の権利など近代的制度によって明るくなる時代として表象しようとする志向が働いていた可能性がある。

波乱万丈の物語や勧善懲悪の構図など、旧来の小説で定型化している意匠を借りて新聞小説を創作するのは、一見簡単にもみえるが、実際は、そう簡単ではないだろう。新聞の連載小説で、明確な善と悪を設定し、一回ごとの分量の中で読者の興味をそそる話題を毎回のように用意するのは、それだけでも作家としての力量が必要になる。それに加えて、読者に飽きさせないように「婉曲の筆」で「新奇」な話題、時事的な新しい要素も取り込みながら作品ごとに新鮮な印象を与えることは、なかなか至難のことである。しかし、桃水の作家像が、先に見たようなものであったとすれば、桃水は基本的には、そうした至難な創作を続けていたことになる。

ここで喚起しておきたいのは、桃水の新聞小説創作活動期間である。半井桃水は、一八八九年初小説「啞聾子」の連載以降、大正期に至ってもなお『朝日新聞』を中心に新聞小説を発表しつづけていた。桃水が創作活動を始めた『東京朝日新聞』で連載した小説でも七十編近くに達し、一九一三年には六〇〇回の連載回数を誇る「大石内蔵之助」（八月二九日―一九一五年四月二一日）も執筆している。同時代の新聞小説家の創作活動期間が比較的短かったことを考えてみると、桃水は新聞小説作家としての生命を長期間保持しえたことになる。桃水が新聞小説を執筆する時、いかなる思いを持っていたのか。この点について、桃水は一九一一年に次のように回想している。

私は今日までに、三十年以来と云ふもの新聞小説ばかりを際限もなく書いて来た。歴史もの家庭ものゝ区別なく、其数が殆んど三百種に近いのである。無論此文学と云ふ時は、取るに足らない駄小説に違ひないけれど、さうかと云つて全然闇雲に書きなぐつたものばかりでもない。それ相応の苦心もあれば、努力もして来た。

新小説の読者にも、いろ／＼の階級があつて一様でない。文章に工風を凝してある小説を喜ぶのもあれば、情想に波乱のある動作の多い小説を歓迎するもある。だが何方かと云へば、其文章をよく玩味し小説の眞味を玩味してくれると云ふ読者は極く少ない。従つて、読者の都合の好いやうに何処迄も文章を平易にして、よく解り易く書く事を主眼とせねばならない。言葉を換へて云ふと、小説の内容に事柄を沢山拵へる方が肝賢になつて、文章の方はお留守になるのである。幾ら名文で書かれてあつても、事件がいつ迄も停滞したり、同じやうな事が繰返されたりすれば、読者の多くは直ぐ倦いて了つて顧みてくれない。

つまり新聞小説には、それ／＼の作者が各自の得意とする手加減がある。秘訣がある。私だけの経験によつて見れば、一回宛に読者の好奇心を喚起すべき事柄と文句とを入れて、ソツと思はせる。さうすれば読者は屹度次回を待つ事になる。従つて其小説は歓迎されるのである。

凝つた文章を書いて、練りに練つて見ないでもない。さう云ふ場合には私自らにも相当の興味が起こつて来て、気に入る事が多いけれども、読者側には受の悪いのが普通である。だから会話にしろ、地の文にしろ餘り細工を用ゐず、ひねくらない事を心掛けて

ゐる。直ぐ呑み込めるやうに平易に書き流すのが、新聞小説を愛読する多数の読者に満足を興へる事でもあり、作者自身から云へば新聞小説として成功した事になる。

所がそれが又中々困難だ。文章に携はつてゐる以上は、矢張文章と云ふ事が何うしても第一に考へられるのが当然であつて、それを無視して顧みないと云ふ事は、何時の場合にも、作に向ふとしてそんな気にはなれないが、其処を抑へて平凡に少しの細工を施さずに書くのだから、楽なやうに見えて決して楽なものではない<sup>149</sup>。

少々長い文章ではあるが、桃水が新聞小説を執筆する時の努力がよく伝わる。半井桃水が朝日新聞社を退職したのは、一九一九年八月末日だった<sup>150</sup>。

以上、桃水の作品論を本論文の内容に即して簡潔にまとめてみた。「鶏林情話 春香伝」・「胡砂吹く風」でのみ桃水を考察することは、桃水の新聞小説作家としての本領を見損なうことにつながりかねない。本論文で検討した作品は、桃水の作品全体から見れば、その数は圧倒的に少ない。しかしながら、桃水が『東京朝日新聞』に連載した新聞小説を具体的に検討することで初めて見えてきた「新聞の小説」の性格があることは、先に各章の結論としてまとめた通りである。結論としては、小新聞から後年の大新聞社と変わり始めた『東京朝日新聞』の「新聞の小説」に呼応した性格を持つていたことになる。その性格は、明治中期の新聞小説の課題とも深く関連するだろう。そうした基本的性格を持つ一方で、それぞれの作品は、多様な内容や性格も持つている。「啞聾子」、「くされ縁」、「海王丸」、「夢」、「胡砂吹く風」は、それぞれ異なった物語内容で、画一的に論じることができない広がりも持つている。従来の先行研究が指摘するように、朝鮮滞在経験が桃水の作品に影響を与えたことは否定できない。朝鮮での体験があるからこそ、それを作品創作活動に生かしている。その結果、「鶏林情話 春香伝」・「胡砂吹く風」・「続胡砂吹く風」などが生まれた。

<sup>149</sup> 半井桃水「新聞小説は何うして書かれるか?」『文章世界』第六卷第八号(博文館、一九一九年五月二五日)、一〇八一—一〇九頁

<sup>150</sup> 桃水以外も饗庭篁村、武田仰天子、渡辺霞亭も一九一九年に退職している。しかし、桃水がそのまま退職する反面、饗庭篁村と渡辺霞亭は退職後客員として残っている。その後、饗庭篁村客員として『東京朝日新聞』の演劇評を担当している。一方、渡辺霞亭は客員として『大阪朝日新聞』に「女の力」「井伊大老」などの新聞小説を連載する。(『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』参考) こうしてみると、朝日新聞社の新聞小説を長年担当していた新聞小説家(記者)たちが、一九一九年に全員退職したことになる。

しかし、そうした朝鮮との関係、あるいは一葉との関係だけで桃水を評価することが妥当でないことは、本論での初期小説の検討からも推察されるのではなからうか。桃水は、同時代の種々の要素を小説の中に反映しながら、多様な作品を執筆している。朝鮮に詳しい新聞小説家・朝鮮関連小説を発表した作家という点だけで評価することに問題があることは明らかであろう。

ただし、本論文では十分に考察できなかった問題もいくつかある。

第一に、半井桃水作品の全体象の把握である。本論文では、明治二二年から明治二五年のあいだ連載した小説のなから五作品を選択し、それぞれ作品を研究対象とした。しかし、明治二二年から明治二五年間、連載された桃水の作品は一四作品に登る。桃水が残した作品数は数百作品を数える。本論文では五作品に限定したため、桃水作品の全体象を把握するためには、対象とする作品の作品数を広げていく必要がある。

第二に、新聞紙掲載作品以外の単行本作品の把握である。本論文では新聞連載作品に限定したが、桃水の作品は新聞連載後、単行本としても読まれている。例えば、本論文で取り上げた「啞聾子」「くされ縁」、「海王丸」、「夢」、「胡砂吹く風」も連載後に単行本として出版されている。新聞紙版と単行本版を比較・検証することで新たに浮かび上がるものがあると思われる。

第三に、新聞小説と挿絵の関係に対する把握である。本論文では、新聞紙の本文に軸足を置いているが、明治期新聞小説における挿絵への依存度は高い。具体的な挿絵は特に物語の理解を促進する。島田英昭・北島官雄によれば、挿絵と図は、文章に対する情報を、文章以外の絵的な情報で提供していると説明している。その中でも挿絵の場合、表象形成の促進よりも、どちらかという読解への動機づけや興味、面白さを読者に引き出す役割が第一の目標であると指摘している<sup>151</sup>。とすれば、挿絵は新聞小説を構成するもう一つの役割を果たしたといえる。例えば、「夢」一二回の挿絵には阿房と推測される男性の前で、体を地面に投げ出して、阿房を見上げている王子の姿が確認できる。この挿絵は本文を読む前に、読者の好奇心を引き寄せると同時に、本文の内容を推測するための手がかりを読者に提供している。明治二〇年代において挿絵の役割は現代の挿絵より大きいといえるだろう。桃水作品において本文と挿絵の関係性を考察するためには、新聞紙と単行本の比較

<sup>151</sup> 島田英昭・北島官雄「挿絵がマニユアルの理解を促進する認知プロセス.. 機づけ効果と精緻化効果」『教育心理学研究』五六(四)(日本教育心理学会、二〇〇八年)、四七四―四八六頁

を含めて多様な角度で考察する必要がある。特に作品が単行本化される時、挿絵の場合、新聞紙に掲載された挿絵の中で、選択された挿絵が単行本に乗せられる。

今後はこうした問題を視野に入れ、新聞小説の全体象を把握しながらテキストの分析を進めていきたい。

## 参考文献

### 〈半井桃水の作品〉

#### 1 新聞小説

- 『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編③』 日本国書センター、一九九二年五月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編④』 日本国書センター、一九九二年五月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑤』 日本国書センター、一九九二年五月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑥』 日本国書センター、一九九二年五月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑧』 日本国書センター、一九九二年八月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑬』 日本国書センター、一九九二年八月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑭』 日本国書センター、一九九三年一月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑮』 日本国書センター、一九九三年一月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑯』 日本国書センター、一九九三年一月  
『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編⑰』 日本国書センター、一九九三年一月

#### 2 単行本

- 半井桃水『海王丸』今古堂、一八九一年一月  
半井桃水『夢』金桜堂、一八九一年八月  
半井桃水『胡砂吹く風 後編』今古堂・金桜堂、一八九三年二月  
半井桃水『胡砂吹く風 後編』今古堂・金桜堂、一八九三年二月  
半井桃水『胡砂吹く風 後編』今古堂・金桜堂、一八九三年二月

### 〈新聞雑誌〉

- 『東京朝日新聞〈復刻版〉』 明治編』 日本国書センター、一九九二年〜二〇〇二年  
『大阪朝日新聞』マイクロフィルム版、朝日新聞社  
『時事新報 復刻版』龍溪書舎、一九八六年  
『新聞集成 明治編年史』林泉社、一九三六年〜一九四〇年  
『東京日日新聞 復刻版』日本国書センター、一九九三年〜一九九五年  
『郵便報知新聞 復刻版』柏書房、一九八九年〜一九九三年

### 〈半井桃水関連〉

- 朝日新聞社編修室『上野理一伝』朝日新聞社、一九五九年一二月  
芦谷信和「塚田満江著『半井桃水研究 全』」『論究日本文学』五〇号、一九八七年五月

岩井寛『作家の臨場・墓碑事典』東京党出版、一九九七年六月

上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日韓関係』筑摩書房、一九九六年一月  
草薙聡志「半井桃水 小説記者の時代」『朝日総研リポート AIR21』一七九〜二〇七、二〇〇五年四月〜二〇〇七年八月

小池正胤「塚田満江著『半井桃水研究 全』」『国語と国文学』六五（九）、一九八八年九月

小池正胤「文海・桃水・渋柿園の新聞小説」『文学』三四（九）号、一九六六年九月  
坂本俊夫『樋口一葉研究』教育出版センター、一九七六年八月

佐藤慶子「樋口一葉文学に及ぼした半井桃水の影響——『胡砂吹く風』を通した『春香伝』と『九雲夢』の受容——」『東国大学校 日本文学』第六、一九八七年三月

塩田良平『樋口一葉研究』中央公論社、一九五六年一〇月

昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第二五』昭和女子大学、一九六六年  
全円子「半井桃水の人と文学——『胡砂吹く風』を政治小説として読む——」『岡山商大論叢』第三九卷第三号、二〇〇四年二月

全円子「アジアから見た日本文学——半井桃水が近代の初期に政治小説を書いたことの意味——」『清心語文』第一〇巻、二〇〇八年七月

塚田満江『半井桃水研究 全』丸ノ内出版、一九八六年五月

半井桃水「一葉女史」『中央公論』二二一（六）（二一九）（中央公論社、一九〇七年六月）

半井桃水「新聞小説は何うして書かれるか？」『文章世界』第六卷 第八号 博文館  
一九一一年五月二五日

半井桃水「新聞小説の發育期」『早稲田文学』第二三二号 早稲田文学社、一九二五年六月

中村光夫『明治文学史』筑摩書房、一九六三年一月

西岡健治「桃水野史訳『春香伝』の原テキストについて」『大谷森繁博士還暦記念朝鮮文学論叢』、一九九二年二月

西岡健治「日本における『春香伝』翻訳の初期様相——半井桃水訳『鷄林情話 春香伝』を対象として——」『福岡県立大学人間社会学部紀要』第一三卷第一号、二〇〇五年三月

樋口一葉『樋口一葉集（明治文学全集30）』筑摩書房、一九七二年五月

樋口一葉『樋口一葉全集 第三卷上』筑摩書房、一九七六年一二月

水野達朗「半井桃水『胡砂吹く風』」『比較文学研究』第七〇号、一九九七年八月

權美敬 「明治文学に描かれた朝鮮——明治二十年代の「朝鮮関連小説」を中心に」金沢大学博士論文(甲第2003号)、学位授与二〇〇二年三月

權美敬 「風俗資料としての小説——『胡砂吹く風』『小説東学党』での『付記す』の問題——」『日本語文学』第三二号、二〇〇六年二月

김신중·김용의·신해진 「나카라이 도스이(半井桃水) 역『鷄林情話春香伝』연구」『日本語文学』第一七、二〇〇三年六月

유익경 「나카라이 도스이의『계림정화 춘향전』을 통해서 본 조선인신」『공자의 인간학』第三集、二〇〇五年二月

劉銀炅 「半井桃水「胡砂吹く風」再考——初期小説の变化から——」『中央大学国文』五七、二〇一四年三月

이영수·윤석임·박태규 「일본에서의「春香伝」의 수용연구」『日本語文化』第一九集 二〇一一年九月

이영수·윤석임·박태규 「일본에서의「春香伝」 수용의 전개양상: 제1기(一八八二—一九二四) 중심이론」『日本語文化』第二二集、二〇一二年九月

鄭大成 「『春香伝』日本語翻案テキスト(一八八二年—一九四五)系統的研究」『日本学報』第四三、一九九九年一二月

鄭美京 「新聞小説『胡砂吹く風』に描かれた朝鮮」『韓国言語文化研究』第一一號、二〇〇五年一二月

鄭美京 『日本における韓国古典小説の受容』花書院、二〇一二年三月

조혜숙 「메이지(明治) 시대 조선문화의 소개양상——나카라이도스이(半井桃水)『胡砂吹く風』에 대해서——」『日本思想』第一六号、二〇〇九年六月

#### 〈新聞・文学関連〉

朝日新聞社編 『朝日本歴史人物事典』朝日新聞社、一九九四年一〇月

朝日新聞百年史編 『朝日新聞社史 明治編』朝日新聞社、一九九〇年七月

朝日新聞百年史編 『朝日新聞社史 資料編』朝日新聞社、一九九五年一月

大西林五郎 『日本新聞發展史 明治・大正編』樽書房、一九九五年三月

大貫俊彦 「新聞読者に拓かれた人情世態小説…坪内逍遙「此処やかしこ」試論」『言語社

會 : Gensha』一一号、二〇一九年二月

小野秀雄 『日本新聞發達史』大阪朝日新聞社、一九二二年

鬼頭七美『「家庭小説」と読者たち——ジャンル形成・メディア・ジェンダー』翰林書房、

二〇一三年三月

近藤弘幸「「文明／未開」と「原典／翻案」…坪内逍遙の宇田川文海評価と日本のシェイクスピア受容」『人文研紀要』八八号、二〇一七年

小谷野敦『忘れられたベストセラー作家』イースト・プレス、二〇一八年三月

作家の原稿料刊行会『作家の原稿料』八木書店、二〇一五年二月

島田英昭・北島官雄「挿絵がマニユアルの理解を促進する認知プロセス…機づけ効果と精

緻化効果」『教育心理学研究』五六（四）、二〇〇八年

高木健夫『新聞小説史 明治編』国書刊行会、一九七四年一二月

高木健夫『新聞小説史年表』国書刊行会、一九八七年五月

戸田清子「明治前期における条約改正と新聞報道——ノルマントン号事件報道を中心に

——」『奈良県立大学研究季報』十四（二・三）、二〇〇三年一二月

土屋礼子『大衆紙の源流——明治期小新聞の研究』世界思想社、二〇〇二年一二月

中島善範『新聞投書論——草創期の新聞と読者』晩声社、一九九一年一二月

野崎左文『増補 私の見た明治文壇1』平凡社、二〇〇七年二月

野崎左文『私が見た明治文壇』日本図書センター、一九八二年一二月

本田康雄「江戸文芸から新聞小説へ——文明化期文化の深層——（一）」『学校法人佐藤栄

学園埼玉短期大学研究紀要』第四号、一九九五年三月

本田康雄「江戸文芸から新聞小説へ——文明化期文化の深層——（二）」『学校法人佐藤栄

学園埼玉短期大学研究紀要』第五号、一九九六年三月

本田康雄「江戸文芸から新聞小説へ——文明化期文化の深層——（三）」『学校法人佐藤栄

学園埼玉短期大学研究紀要』第六号、一九九七年三月

『文学』第四卷第一号（特集 新聞小説の東西—近代のひろば）岩波書店、二〇〇三年一・

二月

堀啓子「明治期の翻訳・翻案における米国廉価版小説の影響」『出版研究』三八（〇）、二

〇〇八年

松原真「仮名垣派から黒岩涙香へ——明治二〇年前後の新聞小説について——」『阪神近

代文学研究』第一七号、二〇一六年五月

松原真「小説隆盛と新聞メディア——明治二〇年前後の新聞小説について」『人文・自然研  
究』第13号、一橋大学全学共通教育センター、二〇一九年三月

『明治開化期文学集(二)・明治文学全集2』筑摩書房、一九六七年六月

『明治政治小説集(二)・明治文学全集6』筑摩書房、一九六七年八月

明治ニュース事典編纂委員会編『明治ニュース事典 第三卷』毎日コミュニケーションズ、  
一九八四年一月

安河内敬太『日本近代文学における作品内作者…作品作品内読者との関わり』九州大学

博士論文(甲第14657号)、学位授与二〇一九年五月

山田俊治『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会、二〇〇二年一〇月

山本武利『新聞と民衆——日本型新聞の形成過程』紀伊国屋書店、一九九四年一月

### 〈その他〉

稲田雅洋『自由民権の文化史』筑摩書房、二〇〇〇年四月

小笠原幹夫「ノルマントン号沈没の芝居」『演劇学』第二九号、一九八八年三月

クウイーラデヴィッド・ドミニク「江戸中後期における〈障害児〉・〈奇形児〉の捨て子

や子殺しに対する認識」『障害史研究』第二号、二〇二一年三月

小池正直『雞林医事』出版者不明、一八八七年九月

佐藤恒丸・青木袈裟美『男爵小池正直伝』陸軍軍医団、一九四〇年

鈴木信仁『朝鮮紀聞』愛善社、一八八五年一二月

鈴木信仁『朝鮮紀聞』博文館、一八九四年一月

田代和生『新・倭館——鎖国時代の日本人町』ゆまに書房、二〇一一年九月

内閣官報局編『法令全書(明治六年)』一八八九年五月

日外アソシエーツ編集部編『海洋・海事史事典—トピックス古代 二〇一四』日外アソシエ  
ーツ、二〇一五年一月

保険研究所『日本保険業史 社会編(上巻)』保険研究所、一九八〇年八月

松原孝俊・超眞環「雨森芳洲と対馬藩「韓語司」における学校運営をめぐる」『比較社  
会文化』第三巻、一九九七年

松原孝俊・超眞環「雨森芳洲と対馬藩「韓語司」設立経緯をめぐる」『中央大学校 日  
本研究』一二、一九九七年

宮永孝「検証ノルマントン号事件」『社会志林』六三(一)、二〇一六年七月

『明治二十年法令全書・上巻』内閣官報局、一八八七年

森永卓郎『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』展望社、二〇〇八年七月

超眞璟 「일본〈한어사〉에서의 한국어교육」 釜山大学校博士論文、二〇一〇年